
田島君の退魔日記

田中神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

田島君の退魔日記

【Nコード】

N7890G

【作者名】

田中神

【あらすじ】

地球とは少し違う世界の物語。UMAと呼ばれる怪物が現れ、人類を襲っている世界。だが、特別な「力」に目覚めた人間により、ほとんどの人々は平和に暮らしていた。「力」持たない平凡な高校生の田島勇人は、そんな世界で平和な高校生活を満喫していた。しかし、春休みにUMAに襲われ、あと少しで死に掛けてしまう。その時天使のような女の子が彼を助けて……。ライトなかんじの現代ファンタジー小説です。

そして思うこと……（前書き）

初めての投稿です。

至らぬ点が多々あると思いますが、温かい目で見守っていただければうれしいです。

またご意見ご感想等ございましたら、どんどん送っていただけるととてもうれしいです。

そして思うこと……

もう、あきらめよう……

これまで何度こう思ったのだろう。敵はあまりにも強大だった。

俺よりはるかに強い「力」を持つはずの仲間たちが、次々と奴に触れる前に倒れていく。

おれ自身も何度倒されたのだろうか。

幾度となく打ちのめされた身体は悲鳴をあげ、動いてなくても俺の意識を刈り取ろうとする。

——でもまだ動いた。

幾度となく打ちのめされてきた心は折れかけ、俺の意思を奪い取ろうとする。

——でもまだ折れていない。

今ここであきらめれば、俺は楽になるのだろう。

俺に「力」なんてない、この敵は「平凡」な俺ががんばらなくても、「特別」な仲間たちが倒してくれるに違いない。

その証拠にほら、仲間は皆俺より傷ついているのに、俺より強い意志の力で敵を見据えている。

そうやって今まで乗り越えてきているんだ、今回だって……

そう俺は平凡だ。

俺は彼のように勇気に溢れていない。

俺には彼女のように愛する人はいない。

俺には彼女のような正義はない。

そして俺は……

彼のような「英雄」ではない。

でも、それでも譲れない物がある。

馬鹿にされたって、相手にされなくなっただっていつだって心に抱いてき

た思いがあるんだ。

だから俺には視えた。皆のように大きな力ではないけれどそれが俺が求めた「力」だった。

そう、俺はあきらめない。

抱いた決意を最後まで貫くまで……

「平凡」な人間は、何になれるのだろう……

そして思うこと……(後書き)

最初です。次からは本編です。

3月27日その1 パシリにされる

その時、俺は天使を見た。

きっかけは些細なことだった。春休みに行われた剣道部の二泊三日の合宿。

そこで二日目の夜、部員全員で顧問に内緒でパーティをすることになったのだ。場所は学校の合宿場きねんかんの男子の部屋である。……なんで女子の部屋でやらないんだろう。個人的にかなり残念だ。

しかし、学校には一応ジュースの自動販売機はあるものの、お菓子やその他食料類はどこにも無い。

それに持ち物検査があったので、誰もそのようなものは持ち込んでいない。ちなみに剣道部の顧問は、学校では「帝王」と呼ばれ恐れられている。帝王に逆らおうとする生徒は、よほどのマゾヒストか、自殺願望者くらいじゃないか？

そこで先輩方がなにやら話し合いをしたのだが、食料がなくてはパーティにはならない。と、言うのが先輩方が出した結論だった。とすると、誰か一年が買出しにいかなくてはいけない。

……ソルジャーいけにえが必要だった。それも顧問に気づかれず、かつ迅速に任務を遂行する優秀な戦士が。そう、だから極々平凡な俺が行く必要はなかったんだ。

それなのに……

「じゃあ、田島よろしく。メモに書かれたやつ以外はお前が適当に買ってきていいから」

「……」

戦いに敗れた俺は皆からいくらかの軍資金と先輩方の要望を書いたメモを受け取るのであった。

「西山、やっぱ俺が行くのはやめないか？」

「どうしてさ？」

とりあえず部で一番仲がいい西山に交渉を試みてみる俺。こんな面倒くさくて危険な任務に借り出されるなんてごめんだ。

「えーと、そう、ほら俺だとみんなの期待に答えられるような面白いものを買ってこれないだろ。」

「いや、別に面白さなんて求めてないから」

「……」

一瞬で切り捨てられてしまう。西山は表情すら変えていなかった。いや、まだだ、まだあきらめるものか！ あきらめたらそこで試合終了だって、皆言ってるじゃないか。

そうだ、夜にはU M Aユーマが出るんだ。それを持ち出せば優しい西山はきっと買い出しを俺と代わってくれる。いや、もしかしたらかわいいうち後輩が傷つくのを恐れた先輩方はパーティを中止にするかもしれない！

俺は正直無駄だろうと思う心を必死に押さえつける。そして、剣道で強敵に当たるときのような心持で、体にぐっと力を込め、

「夜だからU M Aが出るかもしれないだろ！」

と、自信満々に西山に告げた。どうだ！ 言い返してみるがいい！

「……」

うつむいて黙ってしまう西山。俺と西山の会話を興味津々に聞いていた男子部員も黙ってしまう。ちなみに女子部員と先輩方はまったく興味が無いようで、部屋のあちこちで勝手にしゃべっている。

もしかして思いかけず説得できたのか？ だとしたら儲けもんだ。俺がかすかに生まれた光に希望を持ち始めたとき。

西山は、いや男子部員達は身体を震わせると大笑いし始めたんだ。

「はっはっはっはっは！ いやー田島がこんな臆病だなんて思わなか

ったよ。UMAなんてここらじゃ夜でも出たなんて話は聞いたこと無いのにねえ。いやそうかそうか、出たこと無いUMAが怖いのか。まあでも、田島君はお・と・こだから勇気を出してひ・とり・で買い出し、いつてくれるよなあ？」

「くそう……」

どうやら、西山との交渉は無理なようだ。男のプライドを刺激してくるとは……卑怯な奴め！ その後ろの一年男子達もニヤニヤとこの臆病者め、というオーラを発している。

くっ、状況は悪化してしまったか。……いや、まだだ。まだあきらめるものか！ まだ女子がいる！ 俺のイケメン力で魅了すればきつと！

俺は自分に出来る精一杯のさわやかな笑顔を浮かべる。そして、近くで話していた女子。

えーと、えくぼが可愛い剣道部一年のアイドル（今俺が決めた）吉沢さんに俺はこう言った。

「やあ、いつも可愛いね。ところでじゃんけんで物事を決めるなんて非民主的じゃないかい？」

すると彼女もえくぼが際立つ可愛らしい笑顔を浮かべると、

「うん、その顔気持ち悪いよ。早く買い出し言ってきたね」

こう言い放ったのであった。ショック、ダブルショックである。

まさか女子に気持ち悪いって言われるなんて……。俺のイケメン力では、無理だったか。

どうやら剣道部に俺の味方はいないようだ。部内の空気がお前早く買い出し行けよ、うざいなあ。みたいになっていくのを感じる。

「……行ってきます」

部の空気に耐えられなくなった俺は部屋の外へと身体を向ける。そして皆のやる気のない声援を背中に受け、一人死地へと旅立つのであった。

学校に一番近い店までは自転車で三十分はかかる。これで学校から一番近いのだからなんだかやるせない。U M Aが出るといったのは冗談だったが、何もない真っ暗なあぜ道を一人で行くのは正直不安だった。

だが、道中特に何があるわけもなく、無事にペースマートにたどり着くことが出来た。

……いや、荒い舗装のあぜ道を走り続けたおかげで尻が痛い。

あたりは暗いのにペースマートの周りだけやけに明るい。駐輪場を探そうとあたりを見渡したときペースマートの明かりを直視してしまった。

「まぶしっ！」

あまりの明暗の差に目がくらんでしまう。どうしても目を細めないと辺りが良く見えない。なんだか本当、やりきれない気持ちになる。俺は無駄に広い駐車場の隅の駐輪場に自転車を停めると、ようやく普通に目を開けて店内へと入っていった。

3月27日その1 パシリにされる（後書き）

本編が始まりました。

文章についてご意見ご感想がございましたら、どんどん送っていただけるとうれしいです。

3月27日その2 何かに追われる（前書き）

前二話をほんの少し変えました。ストーリーにはまったく影響ありませんが……。

3月27日その2 何かに追われる

ビニール袋いっぱい買い込んだ食料やパーティ用品を自転車の籠に積み込む。ペースマートの周りはまばらに家が建つのみで明かりが少ない。俺は、ペースマートに目を向けあまりのまぶしさにやはり目を細めると、重い荷物にふらつく自転車を抑えながら学校へと続く真っ直ぐなあぜ道へと向け始めた。

俺が通う県立小山原高校は、田んぼの真ん中に建っている。周囲に建っているものといったら、無駄に広いとしか思えない農家の家くらいである。それ以外は二、三年前にできたらしいペースマートがあるだけで、街灯もなく真っ暗だった。一応ここは街の郊外にあたるので、中心に行けばそれなりに栄えているが……

それでも県庁所在地としてこれはどうよ、と俺は改めて思うのであった。

「これは関東から外される日も近いかな」

と、取り留めのないことを考えつつ、自転車のライトを頼りに荒い舗装のあぜ道を行くと。

ウオオオオン……

何処からか遠吠え、のような声が聞こえたような気がした。その声に思わずびっくりして自転車が大きくふらついてしまう。ここら辺の農家では大体の家で何かしらのペットを飼っている。たぶんその中の一匹が吠えたのだらう。あんなのでびびるなんて、情けない俺。

自分の臆病さに少し苦笑しながら自転車をこいでいくと。

ウオオオオオオオ

また、遠吠えが聞こえた。

今度の声は妙に低く、存在感があった。また犬だろ。ちゃんと舐しろよな。なんて思いつつも何故か自転車をこぐスピードが上がる。

無意識の内にハンドルを強くにぎりすぎていた。肩にも力が入りすぎているのにも気づき、こぎながら一度深呼吸をした。

そうだ、そんなわけない。あの声は空耳だ、いやどこかの農家で大きい犬を飼っているのかもしれない。そこまで考えて、少し自転車のスピードを出しすぎていることに気づく。

もう一度深呼吸して俺は自転車のスピードを緩めた。

グオオオオオオオ

また「遠吠え」が聞こえた。いや、あれは遠吠えじゃない。俺の腹の奥まで響くそれは遠吠えというよりむしろ……。いや、まさかそんなはずはない、こんなところにいるはず無いんだ。

本能的な恐怖と、まさか、ありえないと訴える理性がぶつかって混乱しそうだった。

そんな中、もう一度「遠吠え」が聞こえる。

グオオオオオオオ

「何か」が近づいてきている。

そこまでがおれの思考の限界だった。頭の中が真っ白になり、ペダルを強く踏みしめる。そんな中で、舗装の荒いあぜ道に車輪をとら

れ、転びそうになって我に返る。

そうだ、落ち着くんだ、ここで転んだらそれこそ「終わり」だ。あと学校までまっすぐ、たったの十五分じゃないか。それまで、それまで冷静に我慢し続けられればいい。そうすればみんなとパーティができるんだ。安心できるんだ、安全なんだ。それまで冷静に、落ち着いて……

何が「終わり」なのか、何を我慢すればいいのか。俺は何も考えないようペダルをこぐことに集中し続けた。

グオオオオオオオ

今度の声はもっと近くで聞こえた。手が滑りそうになり、重い籠が俺の意志に反して自転車をはっきり返そうとする。荒い舗装のあぜ道がそれに拍車をかけていた。それを必死にハンドルを握ることで押さえつけ、俺は立ちこぎでスピードを上げる。

体力は人並みにあると思っていたが、もう息が上がってしまった。気持ち悪くなんてないのに、のどから何か出そうになる。

声はもう何度も聞こえていた。そのたびに声は大きくなり、存在感を増していく。

何かに追われている、混乱した思考の中、それだけは感じていた。背中に何かついていているような気がして、何度も振り返りたくなる。だがそのたびに唇を噛みしめ、ペダルをこぐことに集中した。もういくら踏みしめてもペダルからは重さを感じなかった。

なかなか見えない学校と、何度も転びそうになる自転車に苛立て、荷物を捨てようか、と考えたその時だった。

「うわぁ！」

何が起こったのか分からない。もの凄い音がしたかと思うと、気がついた時には俺は田んぼに放りだされていた。

「痛ッ……！」

頭は打ってなかったが背中が痛い。が、田起こしたばかりの田んぼに落ちたのが幸いしたのか、背中痛みはすぐに和らいでいく。

グオオオオオオオ！

落ち着くとすぐに現実が襲いかかってきた。あぜ道に転がった自転車と荷物をうっちゃって、いつの間にか俺は全力で走り出していた。

走ると背中が痛んだがどうでも良かった。真っ暗で学校がどっちか分からなくなったけれどどうでもよかった。とにかくここから逃げたかった。早く安心したかった。

真っ暗で何度も田んぼに落ちそうになり、疲労からか足がもつれそうになる。それでも足は止めない。止められるわけがない。

後ろからの咆哮に突き動かされるように走り続けた。後ろから声がするたびに、それはその存在感を増していく。声がするたびに背中中は重くなり、のどから何か出そうになる。

「うわああああ！」

気がついたら叫んでいた。叫ばないと耐えられない。何かに飲み込まれそうで、自分が自分じゃなくなりそうで叫ばずにはいられない。

心臓と肺は暴れ回っているのに体はひどく重い。それでも空気を受け付けない肺に無理矢理空気を詰め込む。

「うわあ……はあはあ……んぐ……ゲホッゲホッ……くそおお！」
走るスピードはかなり遅くなっていた。疲労と緊張でもう限界だった。それでも逃げ続けた。足を動かし続けた。

声の主は何だか分からない。けれど、命の危機が迫っていることはなぜか感じられた。

けどまだ見えないそれに立ち向かうとは思えなかった。逃げる

ことしかできなかった。

なぜなら「力」のない『平凡』な学生には、逃げるのが唯一最大の武器だから。

だから俺は必死に逃げ続けたんだ。

そして、汗と涙で体中ぐちよぐちよになり、声も枯れはて、精も根もつきかけた頃。

そいつはそんな俺をあざ笑うかのように俺の前に姿を現したんだ。

3月27日その2 何かに追われる（後書き）

評価に値する文章では無いかもしれませんが、ご意見ご感想などいただけると、とてもうれしいです。

3月27日その3 UMA現る

そいつは俺のことを後ろから飛び越して現れた。奴は二メートル以上も飛び上がったというのに、地面に音もなく着地する。

巨大な「何か」が正面にいきなり現れ、反射的に足を止めてしまう。足を止めるとそれまでの疲れが急に大きくなって襲いかかってきた。急に目がかすんで、頭がぼんやりする。呼吸は荒く、浅く、体は錆び付いたかのようなだった。

咆哮の主が今、俺の正面に立っている。人とよく似たその姿に、やっぱり犬じゃなかったんだ、とぼんやりとそんなことを思った。それでも正面から漂う圧倒的な存在感に、逃げなくてはただけ思う。しかし、俺は現れたそいつの姿を直視した瞬間、そいつのあまりの異形に動きを止めてしまっていた。

俺の身長は二倍は軽く超える巨大な体躯。この世の物とは思えない赤黒い肌。人などたやすく引き裂いてしまいうに思われる丸太のような太い腕。その口からは鋭い牙が何本も生え、生臭い香りが俺のところまで漂っている。その身に纏っているのは獣の皮でできたと思われる腰巻きだけであった。しかし、それがいっそうそいつの荒々しさを引き立てる。

そして何よりそいつの容姿の中で異彩を放っていたのは、髪の代わりに頭から生えている1本の大きな角だった。

そいつは鬼の姿をしていた。

俺は鬼などゲームや漫画でしか見たことはないが、実在したらあのような姿なのだろう。

それはつまり、そいつが何者であるかも示していた。

「UMA……」

UMA、未確認動物（Unidentified Mysterious Animal）

60年ほど前から出現しだした謎の動物。まだ何なのかも分かっていない地球上の全人類の敵。その姿は様々であるが、すべてのUMAに共通している点がある。

それは、人種、宗教など関係なく人類が考え出した怪物どもの姿をとり、それら怪物たちと同等の能力を備えるということ。

また、夜に何処からか現れ、人間の命を絶つか自身の命が絶たれると文字通り消滅してしまうことである。

そして彼らUMAを全人類の敵たらしめる最大の特徴が、彼らUMAは非生命体の干渉を受けず、またUMA自身も干渉する事ができないということであった。

生命を絶つ為だけに存在する怪物、それが今俺の前に存在する「鬼」であった。

「……はあはあ……何だってこんな田んぼの真ん中に！」

荒い息を整えながら思わず口走ってしまう。そう、近年UMAの出現は都市部が中心であり、またその出現数も減少傾向にある。俺の住んでいる街の中心部でも月に二回UMA騒ぎが起きれば多い方だったんだ。

なのに何でこんなところにいるか。なんで俺はこんなところで命の危機にさらされなくてはいけないんだ！

「グガアアアアア！！！」

鬼が俺を威嚇するかのように咆哮を上げる。

「ひいっ！」

そのあまりの迫力に体がすくんでしまう。情けないとかは思わなかった。なぜならUMAを実際に見るのは初めてだから。ニュースで時折その存在が報道されても、実物の映像はなく、後はゲームやドラマ、小説のネタになるような存在という認識しかなかった。UMAはそれまでの俺には関係ない「物」だった。こんな、こんな「怪

物」だとは思わなかったんだ。

「ウオオオオオ!!」

鬼が俺の命を奪わんとその右手を振り上げる。そのまま俺に向かって勢いよく張り手を繰り出す。

「うわぁ!」

意識はぼおっとしていたが、体は生命の危機に反射的に動き、田んぼに飛び込むことでその攻撃をかわす。後ろでうなる様な風切り音が聞こえた。

勢いよく田んぼに飛び込んだ俺は、そのまま田んぼに倒れ込んでしまう。俺はUMAに襲われているというのに、俺の意識にはまるで実感がなかった。体はひどく重く、息もほとんど出来ないのに、意識はふわふわとして夢の中にいるようだった。

「グルルルル……」

鬼がゆっくりと田んぼに入ってくる。その巨体は相当の重さがあるはずなのに、田起こしたばかりのふかふかの田んぼには、足跡一つついていなかった。それを見て、今自分の前にいる存在がUMAだと改めて思い知った。

「ゴオオオ」

今度はゆっくりと、鬼の巨大な手が俺ののどへと伸びる。

「……はぁはぁ……うぁ……」

俺の顔を全て覆うような巨大な手を見て再び逃げなくては、と思う。だが疲労で鉛になったような身体はゆっくりとしか動かず、荒い呼吸は意識を保つことさえ難しくする。

そして俺の意志に反して、ほとんど動かない体は鬼の万力のような手に捕まることになった。なのに俺の意識は、それをどこか他人事のような目で見つめていたんだ。自分の事なのに、どこか夢を見ているような感覚。

「かつ……つく……かはっ」

もともと空気が足りないのに、もっと苦しくなる。身体は空気が欲しくて、鬼の腕を体中を使って外そうと暴れ続ける。しかし、そ

んな抵抗は無意味だ、といわんばかりに鬼の腕はびくともしなかった。頭の中に血が集まっていくような感覚が段々と強くなる。息がしたいのに出来ないという矛盾がさらに俺を追い詰める。

それなのに俺のふわふわな意識は、

「買出しに行って死ぬなんて、かっこつかないな」

なんてことを考えていたんだ。

3月27日その3 UMA現る(後書き)

やっと敵が出ました。敵の名前のセンスの無さ(それにパクリ)は許してください。自分でもダサイと思ったのですが他に思いつきませんでした……。

3月27日その4 殺されかける（前書き）

とても書くのが難しかったです。

意味不明かもしれませんが、これが今の私の文章力の限界でした…
…。

3月27日その4 殺されかける

鬼の万力のような力は弱まることは無く、むしろどんどん強くなっていく。俺のふわふわな意識も段々薄れ、徐々に頭の痺れとともに真っ暗な感覚で全てが塗りつぶされていった。

五感にはほとんど働いていない。薄っすらと残ったふわふわな意識と、それ以外のほとんどを埋め尽くす真っ暗な感覚が俺の全てだった。

もう、死んだ。と思った。それほどまでに鬼の力は絶対的で、俺の力は貧弱だった。

頭の中にいろいろなことがよぎっては消えていく。

――「力」のない人間にはUMAは倒せません。だからもしUMAに会ったら一目散に逃げるのですよ。もちろん、夜中に外にでてはいけません。

小さい頃、小学校の先生からこういわれたっけ。あの頃は自分は「特別」だと信じていた。いつか自分は秘められた「力」に目覚めるんだ、そして世界を救うんだ。UMAを倒す退魔課の人たちの活躍をニュースで見て、本気でそう思っていた。

でも現実はどうだった。

結局俺は「平凡」な大多数の人間だった。テレビでは「平凡」な人間がある時突然「力」を得て「特別」になったという話が実話から虚構までいつでも流れているのに。

誰が、いつ「特別」になるのか分からない世界。そこで俺は命の危機にさらされてまで「平凡」だった。このまま死ぬしかない、UMAに襲われ死亡したとある高校生A。それが俺だった。

どうして何も起きないのか、どうしてこんなに苦しいのか、どうして俺は死ななくてはいけないのか、なんで俺は「平凡」なのか、

「特別」になりたい、死にたくない、消えたくない、いやだいやだいやだいやだ……

ど……「特別」……う。

混濁する思考の中俺が最後に思ったのは何だったのだろう……

意識が沈んでいく。もう何も分からなくなる直前、突然辺りが強烈な閃光に包まれた。何か苦悶の叫び声のような声が聞こえ、体が唐突に自由になる。

「がはっ……ひゅーひゅーゲホッ」

田んぼに叩きつけられたようだったが、それよりも俺には空気が必要だった。うまく働かない身体を必死に動かして呼吸をする。

身体に空気が行き渡っていくにつれて、暗雲が晴れるように真っ暗な感覚が消え去っていく。その間にも苦悶の声は止まず、鬼が何かと戦っていることだけは理解できた。

「はぁはぁ、いったい何なんだ」

ようやく五感が戻ってくる。体は重く力が入らなかった。それでも先ほどより少し落ち着いた呼吸で辺りを見回す。真っ暗だったはずのあぜ道は、何かの光で照らされていた。

そこには天使がいた。

俺には天使としか見えなかった。純白のワンピースを身に纏い、金糸のようなセミロングの金髪をたなびかせながら宙を舞う少女。

そう、宙を舞っていた。彼女は背中から一対の巨大な光の翼を生やし、宙を舞っていたんだ。鬼は少女が一撃で粉碎されてしまい、そんな攻撃を繰り返そうとする。しかし、華麗に宙を舞う少女には届かない。

彼女は時折、彼女の正面の空間から光の矢を作り出す。そしてそれを手を一振りするだけで鬼に向かって発射する。それが当たると、鬼は苦悶の叫びを上げ、鬼の身体のどこかが欠けていく。いつしか、鬼は矢をかわすので精一杯になっているようだった。

まさに圧倒的だった。鬼は戦うことさえ許されていない。

「あれが「力」なのか……」

——「力」人類が目覚めたUMAに対抗しうる唯一のもの。UMAが現れるとしばらくして「力」に目覚める人間が現れた。

それまでは、神通力や、魔法、超能力と呼ばれ、架空の物、異形が扱うものとされてきた「力」。並みの生物では倒すことはかなわず、人類が開発してきた兵器も効果が無いUMAだが、人類が目覚めた新たな「力」により撃退される。各国では、「力」を持つ者を集め、組織することによって「力」持たない者をUMAから守っていた。

UMAを倒すことを許された「特別」な人間。今宙を舞っている天使がそれだった。

「ギャアアア！」

鬼がいつそう大きな声を上げる。天使が放った光の矢が鬼の胸に突き刺さっていた。鬼は片方しか無い手を空に高々と突き上げ、そのまま蜃気楼のようにあっけなく消えてしまった。

あれほど俺にとって絶対的だった鬼が、天使によって簡単に消去される。それを俺は無様に寝っ転がって見つめていた。

「消えちゃった……」

UMAは消滅する。昔から言われていた常識であったが、見るのは初めてだったので、妙に感心してしまう。それと同時に、どこか虚無感のようなものを感じていたのはどうしてだろう。俺は死にかけたのに、あまりにもあっけない気がした。

天使がゆっくりと地面に転がっている俺の近くに降りてくる。彼女の光の翼は強い光を放っていたが、不思議とまぶしいとは感じなかった。自然と俺は、翼の光に照らされた彼女の顔をまじまじと見てしまった。

思わず息を吞んでしまう。天使のような姿をした彼女は顔の造りまで天使のように美しかった。

整った眉に水晶のような大きな瞳、すっと通った鼻筋に小さなかわいらしい口。しみ一つない真っ白な肌は彼女の神秘性をさらに引き立て、まさに神話の中の天使のようだ。

そんな中でも、丸みを帯びた顔立ちが彼女の中に幼さを感じさせ、ああやっぱり人間なんだなあなんて思っていた。

天使のような女の子はさっきから田んぼに転がったままだった俺に近づくと、立ったまま俺を見下ろしてこう言ったんだ。

「あなたに、ちからはないのでですか？」

びっくりした。

てっきり大丈夫とか、そんなことを聞かれると思っていた。「力」が無いのか、と聞くことは俺に「力」があると思ったのだろうか、俺を助けたのは「力」があると思ったからなのか、「力」が無くては助ける価値も無いというのか。いや、そもそも俺は助けられたのか。

俺は天使に助けられたと言うのに、「力」を持つ「特別」な彼女と、無様に転がっている「平凡」な俺に言いようの無い怒りを感じ、

力が入らない身体に鞭打って立ち上がらせると、

「無いよ、『平凡』で悪かったな！」

こう言い放ってしまっていた。

しかし彼女は俺の言い方に驚いた様子も無く、

「そうですか」

と短くそれだけ言って光の翼を消すと、再び真っ暗となったあぜ道の向こうに消えていってしまった。

「俺、助けられんだよな……」

しばらくその場に突っ立ったままだった俺は我に返ると無意識のうちにそうつぶやいていた。あの女の子が何の目的で鬼を倒したのか分からないが、おそらく俺は助けられたのだろう。

そういえばお礼を言っていないことに気がついたが、彼女は多分退魔課の人間だろうと思う。あとで電話とかをすればいいのだろうか。この場合どうしたらいいのだろう。俺は何をしたらいいか分からなかったが、とりあえず学校に戻ろう、そう思って辺りを見渡す。

学校は遠くに黒い影のようになって見えた。これは自転車を取りに戻ったほうが早いかもしれない。俺は鬼に追われて走ってきた道をゆっくりと後戻りし始めるのであった。

3月27日その4 殺されかける（後書き）

やっと天使が出てきました。

これで3月27日は終了です。

4月8日その1 2年生になる

人生とは驚きでいっぱいだ。

県立小山原高校^{おやまはら}1年2組。登校時間も近づき、人も増え始めたその教室で、俺は春休みにあった瀕死体験を親友に報告していた。

あの時の体験は、不思議なことに俺の中でトラウマとなることは無かった。あの時は現実に死に掛けるというよりも、夢の中で死ぬ、みたいな感覚だったからかもしれない。数日経ってもその体験は恐怖というよりも、自分が普通とは違う体験をした、みたいな優越感を俺にもたらしていた。

とにかく、親友に春休みの間何か変わった事は無かったか、と聞かれた俺は待ってました、とばかりに温めていた瀕死体験を親友に話したんだ。

「と、いうことがあったんだぜ」

両手をいっぱい広げ、まるでヒットラーのように熱弁していた俺は、こう物語を締めくくる。けっこう目立つ格好だったけど、4月の始業式、今年から2年になる俺らは1年の教室で過ごすのはもうこれで最後だ、ということとで他の皆はそれぞれの友達と話しており、俺の奇行を気にする奴は誰もいなかった。端的に言えば、シカトである。

……それはそれで寂しい気がする。

「で、オチは？　　とか嘘だろ、その話。エイプリルフルはもう過ぎたぜ」

俺の席に勝手に座り、机にひじをつきながらいかにもだるそうに答える尚。小林尚^{こばやししょう}、コイツは小学校からの親友だ。きつとコイツな

ら俺の話を信じてくれると思ったのだが、現実是非情だった。くそ、もうジューズおごってやんないからな！

「いや、嘘じゃないって、俺は、本当に、UMAに襲われて、天使に助けられたの！」

「じゃあ聞くけどさ、そんなことがあったんなら何で俺にメールくれなかったんだ？」

それに何かしらUMA騒ぎがあったなら絶対ニュースになるだろ。事実春休みが終わる直前に強力なUMAがシャッターしょうてんがい通りに出たってニュースになってたし」

俺の必死の主張にもかかわらず、非情な突っ込みをする尚。既に机に乗っているのは顔だけになっている。

俺はコイツのエイプリルフールの嘘（実は俺、ロリコンなんだ。というメール）を信じて、

そんなお前でも親友だよ、という思いをこめて、恥を忍んで買ったそういう系の本を送ってやったというのに……

ちなみにその後尚から、バーカバーカこのロリコンめ、というメールが届いた。

「いや、春休みお互い忙しくて会えなかっただろ。だから会ったときのお楽しみということでメールしなかったんだよ」

尚の目の前の席に勝手に座りながら、とりあえず一つ目の質問には答える俺。こっちの質問はすでに答えを用意してあった。

問題は……

「なるほどなあ。でも何でニュースにならなかったかは答えてないよねえ」

ニヤニヤ笑いながら俺を追い詰める尚。あの合宿のときにもこんなことがあった気がする。

でも正直、机に顔だけ乗せてニヤニヤ笑うとか気持ち悪いと思う。

まあ、奴は変人だし仕方ないか。

「えーと、それは、そのお……」

「それは？」

顔を上げ、身体を立てて言葉に詰まる俺を催促する尚。その表情は嘘といって早く楽になれよ、と言っている。しかしこれは事実なんだ。誰がなんと言おうと。

俺は覚悟を決めて姿勢を正すと、合宿に起きた出来事の顛末を話し始めた。

「いやその後自転車と荷物が案外近くに見つかったんで、学校に帰って……」

合宿場では俺を勝手に買出しに行かせたことがばれた部員全員が帝王きねんかんに正座させられていて……

帝王にUMAに襲われたって言ったら意外にも退魔課に電話してくれたんだが、そんな天使のような「力」を持った人はうちにはいないし、登録されている能力者にもいない、UMAの発生もこちらでは確認していない、

なんて言われたらしくて、嘘つくなくそ野郎って言われて不眠で正座させられたんだ。だから一般には広がらなかったんじゃないかなあ、なんて……」

自分でも嘘くさいと思う事の顛末である。案の定、尚はニタアと笑ったと思うとため息を吐いて、

「はいはい、分かったよ。大変でしたねえ。UMAに襲われて」

また机にひじを突いてそんなことを言った。まあ自分でも、事実だが、嘘くさい話だと思うし、鬼に襲われている間はどうも現実感が無かった。ちなみに剣道部や俺の親の間では自転車で転んだことをごまかすために俺がついた嘘、ということになっている。事実は小説よりも奇なり、とはこういうことを言うのかもしれない。

まあ、誰に話しても信じてもらえない、ってのは分かった。もうこの話を他人にするのはやめよう。尚の反応を見て、俺はそう思うのであった。

「ところでさあ」

俺の思いを感じとったのか、伸びをしながら尚が話題を変えてくる。

「勇人、お前何組になると思う？」

「うん、負け組にはなりたくないな」

尚がいきなりこれからの人生の展望を聞いてきた。いくら話題を変えたと言ってもこれは変えすぎではないだろうか。小学校から付き合ってきたが、尚はやはり変な奴である。

それでも俺はお前の親友だからな！ と、尚に顔を極端に近づけながら熱い視線を尚に送っていると、尚も顔を離しながら熱い視線を俺に向けて、

「俺もお前も理系選択だから同じクラスになるといいな！」

なんて言ってくる。まったく、嬉しいことを言ってくれるじゃないか。その台詞に感動した俺はさらに顔を近づけながら、

「ああ、次も一緒にクラスだと僕、友情を超えた愛がめばえちゃいそう」

なんて返してみた。するとやはり俺の親友である。彼は俺の顔を押しのけると、席を立ち、最高の笑顔を浮かべると親指をたて、そのまま下に向けると、席に向かっていってしまったんだ。

……よし、今回は俺の勝ちだな。

尚がいなくなったので、しばらく周りの奴らと話していると、チャームが鳴った。席に着きしばらくすると、1年の時担任だった先生が入ってくる。

彼はひよろりとした顔に似合わないとても表情豊かな英語の授業（とくにvとthの発音にうるさい）をすることでも有名である。委員長が号令をかけると、先生は話を始めた。

「あゝ、1年このクラスでやってきたわけだが、あゝ、結局行事では学年で1度も1位になれなかったな。」

すると先生は顔をくしゃくしゃにしていると悲しそうな顔をする。悲しそうな顔なのにクラスから笑い声が漏れる。俺も先生の表情の

変化に笑ってしまう一人であった。

結局、俺は先生の話をするに聞かず、その表情に笑っただけで1年最後の話は終わった。なんか、もったいないことをしてしまった気がするが、それはあれだ、笑わせてきた先生が悪いに違いない。

そしていよいよ2年の新クラスの発表になる。先生がクラス分けを発表するたびにクラスのあちこちから歓声やため息が聞こえる。正直先生の話より、こっちのほうが盛り上がっている。実際、俺も先生の話よりも、こっちの方が楽しみであった。

「えー、2年6組加藤、小林、島田、田島、原田、矢口」

どうやら俺は6組のようだった。尚も一緒である。俺は唐突に尚との間に何かしら運命を感じていた。もしや、尚は俺の運命の相手！？尚のほうに視線を向けると彼もこちらを向いて親指を立てている。なので俺も精一杯可愛くウィンクしてみる。うふ。

するとなんと彼もウィンクを返してきた！まさかまさかの展開だ。奴も運命を感じているとは……

どう返していいか分からないでいると、奴はしてやったりといった感じの笑顔を向けてきた。……完敗であった。もっと修行する必要があるそうだ。

えーと、気を取り直して。あと同じクラスになったのは……

委員長に加藤さんに、筋トレマニアの島田、野球部の原田と陸上部の矢口さんか。委員長以外はあまり話したことがないな。まあ、これから友達になればいいか。それよりも新しいクラスに美少女がいるか気になる。

今年こそ彼女を作るんだ。それも尚が嫉妬するような可愛い子を彼女にするんだ。俺はひそかにそう決めていた。今年の俺の目標である。

新しいクラスに学年1可愛い篠原さんがいるといいなあ、でも委員長も矢口さんもそれなりに可愛いし、俺けっこう運がいいなあ。なんて事を考えていると先生のクラス分けの発表も終わる。クラスメイトが移動を始める中、俺もすっかり座りなれた席を離れ、意気

揚々と新しいクラスへと向かうのであった。

4月8日その1 2年生になる（後書き）

場面がやっと変わりました。これからがんばって話を進めていこうと思います。

4月8日その2 新しい友達

2年6組の教室にたどりつくと、そこでは既にいくつかのグループが出来ていた。

俺は教室の黒板に掲示されていた座席表に近づくと、その前に集まっている奴らの後ろから背伸びするように見る。

どうやら俺の席は入り口から数えて3列目の一番後ろのようだ。なかなかいい配置である。

思わずほくそ笑みながら尚の配置も見ると、奴は3列目の1番前であつた。

かなり悪い配置である。なんとなくさあみろ見たいな気分になつて自分の席に向かう。

とりあえず、自分の席についてみる。周りでは既にいくつかのグループが出来ていて入れる雰囲気がない。尚の奴は何をしているのかまだ教室に来ていない。

所在無くきよろきよろしていると、長身の顔立ちが整った男子生徒に声をかけられた。

「よお、えくと田島^{たじまゆうと}勇人、でいいんだよな」

人懐っこい笑顔を浮かべたそいつの髪は耳を完全に覆っており、学ランのボタンは第二ボタンまで外れている。

両手は勝手に俺の机に手を突いており、首からはなにやらドクロを模したデザインのネックスレスをかけていた。

……なにやらちゃらちゃらした感じで係わり合いになりたくない感じである。

「そうだけど……君は？」

若干身体を引きながら、なんだかぶつきらぼうな感じに答えてしまう。答えてしまつてまずいと思ったが、言つてしまったものはしょうがない。

怒らせたかな、なんて思っていると、そいつは笑顔を急に安堵の表

情に変えて

「よかったあ。あ、俺は石川健二いしかわけんじよろしくな」

なんて言って机に突いた手を自分の身体に戻し、手を差し出してくる。どうやら見た目ほど悪い奴ではなさそうだ。

席に座りながら差し出された手を握り、握手をするとそいつは安堵の表情をうれしそうな顔に変える。

「いやあ、1年の時から君が友達と面白そうな話をしていて仲良くなりたいな、なんて思ってたんだよ。いや、どうにも君がいい奴でよかった。これからよろしくな」

どうやらけっこういい奴のようだった。1年の頃から俺を気にしていたとはなんだかうれしいじゃないか。

「ああ、これからよろしく。俺のことは勇人でいいよ。えーと……」

「ああ、俺のことも健二でいいよ。あーよろしくな勇人！」

「ああよろしく、健二！」

初対面の奴をいきなり名前で呼びすてにするのは恥ずかしかった。でも、2年になっても楽しくやっていける気がしたんだ。

しばらく健二とお互いのことについて話をする。

健二は生徒会の書記だということだ。思わず、顔に似合わず真面目なんだ。

なんて失礼なことを言ってしまった。

しかし、すぐに謝ると健二は気にしなくていいぜなんて笑って許してくれたんだ。

やっぱりいい奴である。

そのほかには、部活は少林寺拳法部だそうだ。俺は少林寺拳法なんてまったく知らないの、なんか技を見せてくれと頼んだが、そんなに上手じゃないから、なんて笑顔で断られてしまった。

その後、健二に俺のこと（春休みのことは話さなかったが）を話していると、

なんと尚の奴が委員長と二人で教室に入ってきたんだ。

尚の奴は両手を広げながら何やら笑っているし、委員長も楽しそうに尚のほうを見て笑っているではないか！

まさか尚が女子と一緒にあんな楽しそうに来るなんて……

と、勝手にジェラシーの炎を燃やしていると、席を確認した二人が俺を見つめ、笑いながらこちらに近づいてくる。

これは一言申さなくてはいけない。もちろん尚に。

いったいなんて言えば尚を効率的に傷つけられるだろうか……

「あれ、君はもしかして小林君？」

「ああ、えーとあんたは？」

やはり委員長と来たことをからかうべきだろうか……

いや、それは奴も予想してるに違いない。もっと別の……

俺は頭を抱えながら自らの思考の中へ沈んでいく。

「あ、俺石川健二っていうんだ。できたら友達になってくれないか？」

「いいぜ。あ、俺のことは尚でいいから。俺も健二って呼んでもいいか？」

「ああいいよ。じゃあよろしく尚！」

「よろしく健二！」

ここは過去ネタでえぐるべきか？ となると奴が中学の時に好きな女子に告白する場で屁こいて振られたってのが有力だが……

委員長もいるしな、下ネタはまずいか。だとすると……

髪の毛をかきむしりながら尚の恥ずかしいネタを記憶から探す。

「あ、石川君、生徒会以来だね。」

「あ、加藤さん。よろしく。ところで勇人がさっきから黙ったまま変だけど……」

「ああ、気にしないでいいよコイツ、変だから。な、委員長」

「えー、まー少しは変だと思うね。確かに」

「そうなのか……」

ふーむやはりこれでいこう！

去年の中心街であつたお姉さんに尚がナンパしたらオカマさんだつたって話。

これならいける！！

俺は席から立ち上がると、俺が出来うる最大の不適な笑みを浮かべ、尚に声をかけた。

「ふっふっふ、おい聞け尚」

「みなさうんこういう時はシカトですよ。っーん」

「え、尚いいのか？……まあいいか。っーん」

「え」と田島君ごめん。っーん」

「な、いつの間にそんな高等コンビネーションを！くそう、いじめ、かっこわるいんだぞ！」

思わぬ展開にビックリしてしまう。まさか健二と委員長まで奴の仲間になるとは……

結局俺は三人が無視を続ける中一人勇敢にいじめかっこわるいと訴え続けたのであつた。

……嘘です。土下座して会話に入れてもらいました。三人には大笑いされました。

……覚えてろよ！！

しばらくすると予鈴がなつた。なので四人は自分の席についたのだが、驚いたのは委員長がおれの右隣だということだった。

まあ番号的に考えれば不思議なことではない。

でも俺はさっき委員長に土下座して大笑いされたばかりである。

男としてなんか気まずいじゃないか。

左を向くが、そこには誰も席についていなかった。

初日から休みとか何を考えているんだ左隣の奴！ 学校に来たら文句言つてやる！

なんて馬鹿なことを考える。なんか体の右側がむずむずするが、気にしない。

なるべく右を向かないように黒板をじっと見てみると、先生が入ってきた。

「えーとですねえ、もう知っている方もいらっしゃるかもしれませんが、今日から皆さんの担任になる細山です。よろしくお願いします」

そういつて先生はぺこりと小さくおじぎをした。

クラスのみんなから歓声があがる。細山先生――通称ほそちゃんとは50すぎの男性教師である。しかし160センチに満たないであろう身長と、その独特の柔らかい物腰、そしてあふれでる限りない優しさによりみんなの癒し系先生の座を獲得した超人気の先生なのだ！まさかほそちゃんが担任とは思わなかった。これで篠原さんがクラスメイトなら完璧なのだが、彼女は別のクラスのようなのである。

「ほそちゃんなんて、ラッキーだね」

唐突に委員長が体を寄せて話しかけてくる。

「ああ、そうだな。いやされる毎日が続きそうだ」

ビックリしたことを悟られないよう前を向きながら答えた。

続けて委員長が話す。

「そんなにさっきのこと気にしなくてもいいよ。私も調子に乗りすぎたかもね」

そんなことを言われるなんて予想外だった、さすが委員長である。俺の気持ち程度ははお見通しらしい。

でも素直に答えるのも何だかしゃくなので、

「覚えてろよ」

なんて答えてしまったんだ。

それでも委員長はどこか楽しそうにどうせ忘れるでしょなんて言っ
て、前を向いたのだった。

………またも完敗である。いや、委員長には一生かなわないのかもしれない。

「それでは皆さん。クラスが変わっていろいろと話したいこともあるかもしれませんが、そろそろ始業式なので体育館に向かっ

さいね」

ほそちゃんが微笑みながら皆にそう促す。その声に従い、クラスメイトがのそのそと廊下に出始める。

なので俺も尚をどう貶めようか考えながら、あごに手をあて教室の外に出たんだ。

4月8日その3 転人生現る

始業式は新一年生以外で行われる。

新一年生は明日の入学式から学校に通うようになるのだ。

体育館に着いた俺はほそちゃんの指示に従い、クラスの番号順に整列しながら尚の貶め方を考えていた。

やはり自己紹介のときに過去ネタでえぐってやろう。多分奴も俺の過去ネタでえぐってくるだろう。だったら死なばもろともである。

いつもの通り尚を貶めた姿を想像して、ほくそ笑む。

しかし今度はここでふと疑問が生まれた。

俺と尚は、小学校の頃からの親友、のはずである。なのに俺ら二人はいつも相手を貶めることばかり考えている。これは果たして仲がいい、のだろうか？

唐突に生まれた疑問に頭を悩ませているうちに始業式が始まる。

話など疑問のおかげでまったく聞いていないが、傍から見ると真面目に動かないで話を聞いているように見えるので、万事オツケーである。

やはり俺と尚は、喧嘩する位に仲がいいのだろう。そんな結論に至った時、周りが急にざわめくので俺も体育館の正面に目を向ける。校長のズラでも取れたのだろうか。奴は地毛だったはずだが。

そこには天使がいた。

一瞬何も考えられなかった。

壇上には、校長先生の隣に、黄金色の髪をした美少女が静かに立つ

ている。

今は俺の高校の制服を身にまとっているものの、
今壇上に立っているのは、確かにあの時俺を助けた天使だった。

あのときの夜の出来事が走馬灯のように思い出される。

俺をあの夜助けた天使は、俺の学校の、校長先生に、外国からの転
入生として紹介されていた。

俺は彼女の「力」を思い出し、知らず知らずのうちに両手を強く握
り締めていた。

周りは彼女の美貌に驚いたのか、とても騒がしかった。

でも俺はその美しさに魅せられたのではなく、何か別な理由。

自分でも良く分からないごちゃごちゃした理由で彼女から目が離せ
なかったんだ。

彼女が校長先生と共に壇上を降りる。

皆の視線が彼女に集まる中、俺は彼女とはつきり眼が会った気がし
た。

……俺はどんな顔で彼女を見つめていたのだろうか。

始業式が終わり、生徒が次々と体育館を出て教室へ向かって行く。
生徒たちは皆、あの天使のような女の子の事について話しているよ
うだった。

いろんな奴が俺に興奮した様子で話しかけてきたけど、俺は生返事
しか返せなかった。

その中には尚もいたかもしれない。

でもそんなことは気にならなかった。

意味も無く足早に教室へと向かってしまう。

俺の中ではまだあのごちゃごちゃとした感情が渦巻いていて、何も
話す気になれなかった。

そんな中教室までたどり着く。まだ中には誰もおらず、静かだった。

自分の席に着くと、そのまま乱暴にイスを引き、机に突っ伏する。大きな音がしたけど、誰もいない教室はまたすぐ静かになる。

しばらく机に突っ伏していると少しあのごちゃごちゃした感情が落ち着いた気がした。

教室に生徒が戻ってくる。無音だった教室に音が戻ってくる。

「田島君、大丈夫？ 何かおかしいけど……」

委員長が席に着きながら話しかけてくる。

大丈夫か、と聞いてくる委員長に優しさを感じて、俺はすっと気分が落ち着いた感じがした。

「ああ、大丈夫だよ。あの子に惚れちゃったかも」

身体を上げ、笑顔を浮かべながらちよっとおどけて答える。

そんな俺に彼女はちよっと笑うと、

「多分無理じゃない？ 田島君、正直あんまかつこよくないし……」なんてのたまいやがったんだ。

確かに俺はかつこよくは無いが、女子に言われるとへこんでしまう。しかしこのまま言われっぱなしでは男が廃るというものであるう。

それから俺たちは先生がくるまで軽口を叩き合ったのであった。

ほそちゃんはずつくりとドアを開けると丁寧な後ろを向いてドアを閉め、ひよこひよここと教卓の前に現れた。

彼は、やはりずつくりと生徒たちを見渡す。そしてにこにここと微笑みながら、

「皆さんも始業式で聞いたように、海外からの転入生のクリスマスさんが私たちのクラスに加わるようになりました。それではクリスマスさん、どうぞ」

ドアが静かに開く。教室の雰囲気は荘厳なものに変わった気がした。誰も身動きしない。

そんな中、彼女は美しい金髪をたなびかせながら、教卓の横まで歩き、ずつくりと俺たちの方を向く。

「カナダからきました。クリス・ジェファースンです。よろしくおねがいします」

彼女がゆっくりとお辞儀をすると、誰かが息を呑んだ音が聞こえた気がした。

それくらい彼女は神秘的で、優雅だった。

「それでは、クリスさんは四列目の一番後ろ、あの空いた席に座ってくださいね。」

それでは最初のホームルームを始めましょう」

ほそちゃんの声が教室の荘厳な雰囲気を買った。

彼女はほそちゃんの指示に従い、ゆっくりと俺の左隣に座ったんだ。

「よろしくおねがいします」

彼女が挨拶をしてくる。

その姿はどこまでも優雅で、それでいて完成された彫刻のようであった。

俺は不思議と体育館で感じたような感情はわからず、普通に

「俺は田島勇人。よろしく」

なんて挨拶することができた。

しかし、まさか俺の隣にくるとは思わなかった。

朝、隣の席が空いていたのはそういうことだったのかと、一人合点する。

そういえば朝、左隣の奴に文句を言おうと決めたんだっけ。

彼女には悪いが、俺の文句の餌食になってもらおう。

俺はその天使のような顔が困ったようになるのを想像し、

自分でもわかるいやな笑みを浮かべながら、

「なんで朝からこなかったんだ？ おかげで恥ずかしい思いをしたじゃないか」

と、文句を言ってみた。

すると、彼女は表情一つ変えず、ゆっくりとこちらを向くと、あの夜に聞いたのと同じ調子で

「……。なにかいいましたか？」

なんて言い放ったんだ。

……どうやら敵はかなりの強敵のようだ。

俺は隣のクリスさんを自らの天敵とインプットしたのであった。

あの子が俺のクラスに転入してきたことについては自分でも変なくらいに驚かなかった。

と、いうより俺はどこかで期待していたのかもしれない。

「平凡」な俺が「特別」になれるきっかけがくることを……

4月8日その3 転人生現る（後書き）

今回も難産です。どうすればもっと面白くなるかなどをアドバイスしていただけると幸いです。

4月8日その4 忠告と告白と

ホームルームでは、ほそちゃんがその癒し系な話し方でこれからの予定を話してくれた。

しかし、クラスの皆はほそちゃんの話などろくに聞かず、ひそひそと雑談ばかりしてる。

ふと左をみる。そこには皆の雑談の原因がずっと背筋を伸ばしてほそちゃんの話聞いていた。

クリス・ジェファースン。春休みの合宿の夜、俺をUMAから救った天使の様な女の子。

あの時はもうかわら無いだろうと思っていた少女は、カナダから来た転校生として俺の隣に座っていた。

そういえばUMAに助けられたことのお礼を言っていなかった。放課後にお礼を言わなくてはいけないな。

「それでは皆さん、自己紹介でもしましょうか」

ほそちゃんが気をきかせたのか、予定より早くクラスメイト同士の自己紹介をするように告げる。

クラスの男子の雰囲気が変わった気がした。

男子の雑談がずっと止み、クラスが獲物を狩るような緊迫感に包まれる。

「では、番号順に……赤石君から前に出てどうぞ」

男子の気合が明らかに違う。女子の自己紹介は1分かららずに終わるのに、男子の自己紹介はあのほそちゃんが止めに入るほど長い。

そんな皆の気迫に圧倒されたのか、健二や尚の自己紹介は予想外に短かった。

そして俺も、壇上に上がった瞬間に感じた殺気に負け、無難な自己紹介しかできなかったのである。

俺とあろうものが失態であった。

殺気に負けず面白い自己紹介をしてこそ、真の男だろうに……

皆の自己紹介が終わると、ほそちゃんはクラスメイトを見回してうんうんと頷き、

「これから一年よろしくお願いしますね。それでは皆さんさようなら」

こう、ホームルームを締めくくったのであった。

ホームルームが終わると、クラスメイトは 크리스さんの元へ集まり始める。

皆身体を動かしながら、必死に自己アピールしたり、質問したりしていた。

しかし、俺はそんな輪に入る気にはなれず、とりあえず人が集まってきた俺の席を離れて、廊下に出たのであった。

廊下に出ると、尚が話しかけてきた。予想外である。

コイツは 크리스さんの元に行ったと思ったのに……

「お前 크리스さんのとこ行かないの？」

廊下の壁に寄りかかりながら、純粹に疑問に思っ て尚に聞く。

すると尚は深刻そうな表情をしながら俺に顔を寄せ、眉をひそめながら、

「なあ、もしかしてお前を U M A から助けた女の子って、あの子かなんて質問を質問で返してきやがった？」

なんて質問を質問で返してきやがった。

からかおうとも思ったが、尚が真面目な顔をしているのでやめることにする。

「ああ、そうだけど……。だから言っ たろ、嘘じゃないって」

もしかして俺の話が本当だったと思っ て謝りにきたのだろうか。

それならわが親友ながら殊勝な奴である。俺が妙に感心しながら頷いていると、尚はもっと深刻そうな顔になり、こういったんだ。

「おい、それならあの子、やばいかもしれないぞ」

「どうしてだよ。確かに〔力〕がある人間は珍しいけど、それで差別するなんて古いぞ、お前」

非難の意味をこめて口調が強くなってしまった。

確かに昔は能力者に対する差別は激しかった。一部地域では命を奪うほどの迫害がおこなわれたらしい。でも今はそんな古い思想は流れていない。

しかし今でも能力者が自分の能力を隠す事は多いそう。

やはり差別感情などは残っているのだろう。

でも、能力者だからって人を差別するのは俺は間違っていると思った。

その能力によって俺たち一般人は救われているのだから。

「違うって。あの子犯罪者かもしれないって事！」

「は？ それってどういうことだよ？」

「彼女、退魔課せいふの能力者リストに未登録だったんだろ、ってことはやばい連中かもしれないじゃないか」

尚は顔をさらに引きつらせながらそう主張する。

この国の能力者は全員行政の登録管理下に置かれることになっている。

もちろん、能力による犯罪を防止するためである。しかし、UMAの発生が減ってきた現代、UMA自体よりも能力者による犯罪のほうが社会問題として表面化してきていた。

外国から来た能力者も、もちろん政府によって把握されている。

そんな中で自分の能力を登録しないってことは……

「……やばい連中なら高校に転校してきたりこないだろ。きっと何か退魔課で問題があったんじゃないか？ いや、きっとそうだろう。俺たちがあんま気にしてもしょうがないぜ」

「……そうだな」

尚にはそう言ったものの、俺としてもクリスさんに対する不安はぬぐえなかった。

能力者として未登録、という時点で俺たちからすればかなりのパチ

モンである。

でも、だからこそ彼女に何かを期待している自分がいることにもう俺は気づいていた。

「お前これからどうする？ 今日はお前も部活休みだろ、一緒に帰ろうぜ」

尚が話題を変えてこれからの予定を聞いてくる。

もう、俺の予定は決まっていた。

「あゝ今日はクリスマスさんにお礼言ってから帰るよ、悪いけど校門で待っててくれないか？」

「勇人……」

尚が苦い顔をする。それでも俺が譲らないと分かると、気をつけろよなんて言っただけは先に校門へと向かっていったのだった。

とりあえず廊下でクリスマスさんが出てくるのを待つ。教室からは幾人かの生徒が何回か出てくるものの、なかなかクリスマスさんが出てこない。

教室の様子も廊下側の窓も教室のドアも閉まっているので確認できない。

出てくる生徒に、クリスマスさんは？ なんて聞いても、中で話している、の一点張りでまったく参考にならなかった。

暇なので素数を数えながら待つことにする。数を数えるたびに数えるのがゆっくりになり、ついに頭の中が意味不明になってしまふ。痺れを切らして教室に突入しようとした決めたとき、やっとクリスマスさんが教室から出てくる。

が……

「げっ……」

「何がげっ、なの田島君？ 失礼だと思っただけです」

彼女は委員長を含むクラスの女子数人と一緒だったのである。思わ

ず気後れしてしまう。

数人の女子の前でその中の一人の女子に話があるなんていうのは恥ずかしいじゃないか。

どうしよう、どうしようなんて考えているうちに、がやがやと話しながら彼女たちが行ってしまいそうになる。

ええい！　ここは言うしかない！　俺は覚悟を決めこういったんだ。「クリスさん、ちょっと話があるんだが……」

その時時間が止まる。

女子の話が止まり、

俺の方を見ながらえく、とかうそく、とか初日からくとか身の程考えたらくとか言っている。

……おい、最後の奴出て来い、でなくて俺のほうも大パニックである。

まずい、これはまずい方にとらえられた！

「いや違う！　違うんだ！」

そう違うんだ。

たしかにクリスさんは可愛いし綺麗だし正直俺の好みのストライクだったりちようど彼女ほしいなんて思ってたけど違うんだ。もうあたふたしてどうにもなくなっていた俺だった。

そして委員長がいやらしい笑みを浮かべながら俺を追い詰めるようにこう言ったんだ。

「じゃあ教室でふ・た・り・で話してきたら？　今教室には誰もいないよ」

また女子の中からまた甲高い声があがる。えく理恵（委員長の名前だ）いいのくなんて言っている。

委員長はそんな女子の声を大丈夫だから、なんて言って両手で静め

ると、俺とクリスさんを教室に押し込んだのであった。

4月8日その4 忠告と告白と（後書き）

もし私の小説を楽しく読んでいただいている方がいらっしやいましたら、感想、評価等をいただけると、とても勇気づけられます。

4月8日その5 お礼を言おう

ところで、俺の人生は女子とは無縁のものだった。

小学校の頃は尚などの悪友たちと女子のスカート捲りにいそしんだため、女子からは最終変態兵器と呼ばれ、忌み嫌われていた。

中学生の頃は急に男らしくなった悪友たちがもて始める中、成長してもぱっとしない顔だった俺は、女子と友達以上の関係にはなれなかった。

それでも高校生、人生で一番輝く青春の時代に俺は希望を持っていた。

何がいいたいか、というと。

俺はついに女子と二人っきりになったぞ！！、ということである。

苦節16年ついに女子と二人っきりになったのである。

……ムードも何も無いし、目的は命の危機を救ってくれたことに対するお礼だが。

と、いう事で俺は教室の後ろのスペースでクリスさんと向かい会おうと、しばらくこの状況を楽しもうと、黙ってみるのだった。

もしかしたらこのままいいムードになるのかもしれない。

そんな期待もあったが、彼女は俺が何も話さないとみると、すぐにきびすを返して教室のドアへと向かい始めるのだった。

「ちよっ、待ってくれ！」

手を伸ばして彼女を引き止める。伸ばした手は彼女の肩に触れようとしていたが、彼女が振り返るとすぐ、俺の元へと戻ってきてしまう。

振り返った彼女は俺をしつかりと正面に見据えると色の無い表情を一つも変えないまま、

「なんですか」

なんていった。

……何かとてつもなく悔しい。無表情なんて俺の事は眼中にない、ということだろうか。

それでも俺は頑張って口角を吊り上げて、彼女にお礼を言った。

「あゝ、春休みのときに俺を助けてくれてありがとな。あのままだったら俺死んでたよ。」

その代わりと言っちゃ何だけど、困ってたら何でも言ってくれよな」ふう。どうやら嘯まずに言えたようだ。彼女は無表情のままじっと動かない。

沈黙が教室を包み込む。

たっぷり10秒はかかっただろうか、俺はその間じっと彼女を見つめていた。

やっぱり綺麗な顔だなあ、なんて思っていると

彼女は整った眉をほんの少し、じっと見てなかったら分からないくらいひそめると、

「よくわかりません。こまっっているときはどんなときですか」なんて言ってきた。

俺の中で何か凍りついた気がする。

彼女は困ったことは無いのだろうか？

「力」がある人間は、「特別」な人間は困らないと言うのか。

困ったということが理解できない。

そんな彼女に俺と彼女の間に何か大きな溝を感じ、また体育館で感じたあの感情が首をもたげ始めた。

焦点がぐつと目の前の「天使」に集中し、心の奥から何かが湧き出そうになる。

それでも何とか自制する。

そう、勘違いしてはいけない。彼女は外国人だからたまたま単語の意味がつかめなかっただけかも知れないじゃないか。

俺は彼女から一步離れると、ゆっくりと論す様に言葉を紡ぐ。

「困っている、というのはそうだな。自分ではどうしようもなくなつて、どうすればいいか分からなくなっている状態のことだな。分かるかな？」

身振り手振りを交え、貧弱な俺の日本語力を駆使して困るという単語の意味の俺なりの解釈を彼女に説明した。分かってもらえたか不安だったが、

彼女は人形のようにこくんと小さく首を縦に振ると、

「わかりました。おはなしはおわりですか」

なんて言つて話を切りあげ、教室の外へ出ようとする。

彼女は俺とは話がしたくないのだろうか。実際もう話す事は無かったが、このまま話を終わらせるのもなんか惜しく、思わず

「日本語上手なんだな」

なんて声をかけていた。

するとやはり彼女はそんな天使のような顔をピクリとも動かさず、

「べんきょうしましたから」

なんて答え、そのまま教室の外へ出て行ってしまったんだ。

教室を出て、ドアを閉め廊下に目をやると、先ほどクリスマスさん一緒にいたと女子たちがニヤニヤ笑いながら俺の方を見つめていた。

クリスマスさんはそんな女子たちの奥でやっぱり無表情で立って、委員長と何やら話している。

「失敗しちゃった？」

ニヤニヤ笑う女子の一人、確か……佐藤さんだったか。

が、詰め寄りながら俺を追いつめるかのようにたずねてきた。

俺は教室のドアを後ろでに、出来るだけ身体を引きつつ、できるだけ男の威厳が保てるよう、

こう答えた。

「失敗も何も告白なんてしてないしな。それに好きな異性もない！
　　なんたって俺は漢おとこだからな」

「じゃあ二人っきりで何はなしてたの？」

佐藤さんはすぐに切り返してくる。さすがに一筋縄ではいかないようだ。

「あゝ、それはだなあ」

とりあえず俺は考え込むふりをしながら逃げ道を探す。

周囲は女子がいて逃げられそうにない。

と、いかここで物理的に逃げるとか一番まずい気がする。

正直には答えられるわけ無いだろう。

命の危機を助けられたので、お礼を言っていました。なんてかなり嘘くさい。

といっても女子たちが納得するような言い訳なんてあるのだろうか。佐藤さんを含む周りの女子たちが早く楽になっちゃいなよなんて迫ってきて、

いよいよ進退極まった時、救世主いいんちようが現れた。

「そのくらいにしといてあげたら？　田島君はクリスマスさんに困ったことがあったら何でも言え、って言いたかったんだって。ね、クリスマスさん」

「はい」

委員長の言葉に頷くクリスマスさん。それでも周りの女子は引き下がろうとしない。

そんな女子達を、委員長は私が勝手に二人っきりにしたのが悪かったからなんて言って無理やりいさめると、

「じゃあね、ごめんね田島君」

なんて言って女子達を連れて帰っていつてしまった。

……かなり苦しい感じだったがこれで上手く収まったのだろうか。

まあ、委員長にはお礼を言わなくてはいけないな、なんて思いながら俺も校門に向かい始めるのであった。

4月8日その5 お礼を言おう（後書き）

なかなか話が進みませんね、それでも頑張って構成しているので、
温かい目で見守っていただけるとうれしいです。
長い4月8日ももうすぐ終わると思います。

4月8日その6 帰りましょ

そういえば最近女子に助けられるって多いな……

それって男としてどうなんだろうか。そんなことを考えながら駐輪場に向かう。

自転車にまたがって校門に向かうと、そこでは自転車に乗った尚が待ってくれていた。

「さっき 크리스さんが女子と集団で出て行ったが大丈夫だったのか、勇者？」

尚が心配ともからかいとも判断がつかない微妙な表情で話しかけてくる。

「まあな、一応大丈夫だった」

俺もおそらく微妙な表情で答えているのだと思う。

俺たちはなんとなく自転車を一緒に発進させると、街の中心へと続く長い長いあぜ道を進み始めるのであった。

いつもは自転車をこぎながら尚との会話が弾むのに、今日の俺たちは無言だった。

あぜ道を並進しながら進んでいく。

俺はなんとなく尚の方を向かないようにしながら、あたりを見回してみた。

本当に何も無かった。周りの田んぼにはまだ何も植わっておらず、

遠くには裾野が広い山が見えた。

「なあ、山が綺麗に見えるぞ」

俺はなんとなく尚に話しかける。

尚は正面に向けていた視線を俺の方に向けて、遠くに視線を向けると、適当な感じに相槌を打つ。

そうすると、尚は再び視線を正面に向けた。

俺も正面を見ると、少しずつ近づいている中心街の建物と、無駄に大きい県庁が見えた。

「なあ、勇人。お前こころ辺でUMAに襲われたのか？」

しばらくぼおっと自転車をこいでいると、突然尚が話しかけてきた。尚の方を見るが、奴は正面を向いたままだった。

俺も再び正面を見ると、ゆっくりと奴の問いに答える。

「どうかな、暗かったし。それにこころ何も無いからどこで襲われたのかなんてわかんねえよ」

奴はそれを聞くとゆっくりと自転車のスピードを緩め始めた。

俺もそれに合わせてスピードを緩める。

尚は両手を籠にかけて、あごがハンドルに乗りそうになるくらい下げた。

まったくもってだらしなく自転車をこぎ始めている。まったくけしからん奴である。

しかし、結局俺も尚と同じような格好で自転車をこぎ始めた。

尚は視線だけこちらに向けながら俺に話しかけてくる。

「なあ、何であの子はここにいたんだろうな……」

やはり尚はクリスさんのことが気になるようだ。

確かにここいらには何にも無い。

クリスさんが偶然田んぼの真ん中にいて、俺がUMAに襲われていたのを助けた。

というのは、偶然にしては出来すぎだと思う。

それでも、俺は命を助けてくれた恩があるからだろうか、尚ほどにはクリスさんの事は気にならなかった。

「……そんな理由考えたってしかたないぜ。とにかく俺は助けられたんだから、それでいいじゃないか」

尚の方へ顔を向け、身体を起こしながらそう諭す。

「何でお前はそんな樂觀的なんだよ……」

尚も呆れた顔をしながら身体を起こす。

「まあ、クリスさんが犯罪を犯したところを見たというわけでなし、そんな気にするなよ」

尚より先に身体を起こした俺は、もう話は終わりだ、とばかりに自

転車を急に加速させる。

尚はどこか納得しないような顔をしながら、俺についてきたのであった。

しばらくすると中心通りに自転車が入っていく。

駅を基点としたその通りは、車もまばらで歩行者も少ない。

それでも歩道と車道は綺麗に舗装されていた。

人が五人並んでも余裕で通れそうな歩道を尚と自転車をこいでいく。道端には大きなケヤキの木が植えてあり、それによってできた日陰が自転車をこいできた身体に心地よかった。

「なあ、どっか寄ってくか？ 飯食いたいし」

尚が唐突に話しかけてきた。

「どこか、ってどこよ？」

思わず反射的にそう返してしまう。

小山原市は北関東の県の県庁所在地であるものの、新幹線が通っておらず、高校生が楽しめそうな娯楽施設が少ないことで地元民の間では有名だった。

「ヨッコモールにでも行くか？」

尚は悩む様子も無く、そういわれることを予想していたかのように、即答した。

ヨッコモール。5年ほど前に街の中心にあった自動車工場の跡地に出来たたたくさんのお店が集まったモール。

ゲームセンターや市内唯一の映画館があることもあり、市内の高校生の憩いの場でもあった。

「そこしか行くとこないだろ。……そうだなじゃあ、行くか」

月初めということもあり、懐が暖かった俺は尚の提案に賛成し、二人ヨッコモールへと自転車を向けるのだった。

「じゃあな」

フードコートで腹を満たし、ゲーセンで散財して楽しんだ俺たちは夕方になってきたこともあり、別れてそれぞれの家へと向かう。

住宅が並ぶ中を一人、自転車でこいでいった。道には歩行者はおらず、車も通らない。

なんとなく道を独り占めした気になって車道の真ん中を自転車で進んでいく。

住宅の間から夕日が差し込んで、なかなか幻想的だった。

夕日に照らされて自転車を一人こぐ高校生……

なんとなくポエミーな気分になりながら家路につく。

この角を曲がれば自宅だ、というところで初めて歩行者に出会った。春先なのに真っ黒なコートと黒いシルクハットというとても暑そうな格好をしたそいつは道の真ん中を歩いていた。

目の前から自転車が来るというのに、そいつは避けようもしない。仕方が無いので避けていくと、すれ違いざまにそいつに声をかけられた気がした。

「君は、何を望んだんだい？」

確かにそう聞こえた。何だ、と思って振り向いたけれど、そこには誰もいない。

なんだか気味悪かったけれど、気のせいだろうと思ってそのまま家へ入っていく。

だって俺は何かを誰かに望んだ覚えなんて無い。だからあんな質問をされる理由なんて無いんだ。

そう思いながらも、俺の脳裏には春休みに鬼に殺されかけたこと、そしてあの天使の^{クリスさん}〔力〕のことがぐるぐる回って離れなかった。

2008年4月8日。

高校2年生になったその日、俺の周りは急激に変化し始める。

その日、「平凡」な学生の俺の運命は果たして「特別」な物に変わったのだろうか……

4月8日その6 帰りましょ（後書き）

4月8日はこれで終了です。

連休中の更新はこれで最後です。

これからは2〜3日に一度の更新を目標に執筆していこうと思います。

幕間 誰かの日記帳その1 (前書き)

幕間です。主人公視点ではありません。

幕間 誰かの日記帳その1

彼は仲間内では異端という認識をされている。

彼が所属する組織の構成員は、基本的に彼らの自身の目的以外にはこの世界に執着を持っていない。

しかし彼には異常ともいえるほどの「黒」への執着があった。

身に纏うもの、自らが暮らす場所、自らが口にするもの、そして周囲の存在でさえ、黒でなくては我慢できなかった。

それは彼の組織にとって異端であり、彼の同族から見ても異常であった。

彼の黒への執着はどこから来たのだろうか。

彼は自身の「心」を満たすために今日も「黒」を求め続ける……

彼は退屈していた。面白いことがない。この世界は停滞していた。

「人類」の力は強力であり、有力なデータは集まっている。

しかし自らの組織の目的にかなうようなデータは、まだない。

そして、かつて存在した、彼が興味を持つような「黒い」人間はどこにもいなかった。

そこで彼は暇つぶしをすることにした。暇だから、退屈だから暇つぶしをする。

そういう思考をすること自体、「彼ら」の間では異端なのだが、彼は気にも留めなかった。

彼は様々な場所をぶらぶらと転移する。人類が地球、と呼んでいる

惑星のありとあらゆる場所に、彼は一瞬で転移することが出来た。
一瞬で離れた場所へ転移する。

人間では考えられない所業も彼、いや彼らにとっては当たり前のことであつた。

そうしながら、暇をつぶすのに値する「面白い物」を探すのである。偶然、彼の目に彼と同じような真つ黒な格好をした人間の姿が映る。それだけなら珍しくは無い。

彼が今いる場所。人類が定めた国という定義に従うなら日本という国。

その国では若い人類、特に学生やサラリーマンと呼ばれる人間の中にはこのような格好をする者が多いということを知っていた。しかし、人間は黒い髪を生やし、荒い、黒い舗装の道を黒い夜の闇の中、黒い服を纏い、2輪の乗り物にまたがって1人で進んでいた。黒が4つ。なかなかである。これなら少し楽しめるかもしれない。そう考えた彼は、暗闇の中を進む人間のためだけに、「実験体」を解き放つた。

人間の「心」を分析する^{のぞく}ような真似はしない。それをするのは人間が死に掛けたときだと彼は決めていた。

解き放たれた実験体が、道を進む人間を追い始める。

最初、少し驚いたような表情をした人間は、何やら自分の考えを否定するかのよう^にに、苦笑していた。

しかし、実験体が近づいていくたびに、人間の表情が緊迫したものに変わっていく。

彼はそれを見逃さないように観察していた。果たしてこの人間はどれだけ「黒い」のだろう。

人間の周りにあつた黒は4つ。それならきつとこの人間は自分を樂しませてくれるのだろう。

常人には、いや、彼以外には理解できない思考のなか、彼は必死に逃げ始めた人間に期待していた。

人間は2輪の乗り物から投げ出される。どうやら速度を出しすぎた

らしい。それでも人間は自らの足を動かし続けることで、いまだ確認できていないであろう実験体から逃げていた。

そこでふと、彼は力の発現を確認する。どうやら今自分が観察している人間は「力」ある者らしい。

彼はいつそう興味を持って人間を観察する。「力」を持っている人間は特に「黒い」からだ。

そう「黒い」のである。目の前に「黒い」人間がいる。

彼は自らの欲望が高まってきているのを感じていた。早く見たい、感じたい。

黒さを感じたい！

ついに彼は欲望に逆らえなくなり、自ら定めた禁を破って彼は人間が死に掛ける前に、その「心」をのぞいてしまったのである。

その瞬間彼は失望した。

人間の心はあくまでも平凡だった。

特筆するような特性もなく、自分が期待したような黒さが感じられない。

あくまで普通の人間。その人間は「力」ある者であるはずであったのに、平凡な心を持っていた。

はずれ、か。彼はあふれ出てくる失望を隠しきれずそう感じた。

そういえば人間の能力は発現しているはずなのに、周囲には何の変化も無い。

大して黒くも無い人間が「力」を発現させるところになってしまう。

こんな奴は存在させる価値も無い。

実験体が人間の身体を捕らえる。

ぎりぎりの実験体が人間の身体を締め付け、その命を奪おうとしていた。

その様子を片目で見ながら、彼は次はどんな暇つぶしをしようかと考える。

そして人間の命が消えかかったその時だった。

彼は一瞬ではあったが今まで感じたことのないような黒さを感じた。と、同時に力の発現を顕著に感じる。

そして実験体の傍の空間が歪み、振れるように穴が開くと、そこから何か現れたようだった。

だが、彼にとってはそんなことはどうでも良かった。

力の予想外の発現よりも、空間が振れたことよりも「黒い」事が重要だった。

平凡な「心」の持ち主が今まで自分が感じたことの無い「黒い」人間だった。

彼にとってこれほど興味深く、面白いことはない。

黒は、「力」は望みから生まれる。

「平凡」な人間が一瞬ではあったがあれほど黒くなる。いったいどんな望みなのだろう。

彼は久しぶりに自分が充実していることを感じ、一人ほくそ笑むのであった。

実験体はいつの間にか消失し、人間は再び「平凡」に戻ると暗い夜道を歩き始めている。

彼はそれを確認し、人類では絶対に認識できないところからその人間の観察を始める。

それは神の子と呼ばれた人間が誕生してから地球が2008回目の公転を始め、人類が太陽暦と呼ぶ暦に従うならば、3月27日のことであった

幕間 誰かの日記帳その1（後書き）

今までとは違う感じで難しかったです。

4月28日その1 こまりました(前書き)

あらすじを修正しました。どう見てもこれはラブコメでないの…
…。

ラブコメではないですが、ファンタジーだとは思うのでこれからも見捨てないでいただけるとうれしいです。

4月28日その1 こまりました

人に物を頼むときは、その人の能力をよく考えるべきだと思う。

その日、いつもと同じように（いっても学校が始まってまだ3週間ほどしか経っていないが）にこにこ微笑みながら、教壇にたったほそちゃんは、やはりいつも変わらない柔らかい表情でこう告げた。「今日から生徒会選挙の候補者募集が始まります。興味のある人は、私まで申し出て下さいね」

生徒会選挙。生徒たちによって学校を運営する組織のエージェントを選ぶ行事。

俺には全く持って関係ない。だが俺のクラスから誰がでるかは気になる。

とりあえず近いところで、優等生代表の委員長なんかはどうするのだろうか。

ちなみに、1年の時も俺のクラスの委員長だった彼女は、2年生になってもクラスの委員長を務めている。あだ名を変える必要がなくてありがたいことである。

「なあ、委員長ってさ、選挙に出馬したりするの？」

朝のホームルームが終了し、ほそちゃんが職員室へ去っていったところで委員長に聞いてみる。

「あゝクラスの委員長とか部活の部長やっている人は選挙に出れないんだって。

もしかして私に出てほしかった？」

委員長は次の授業の準備をしていた手を止めると、何やらそう聞かれるのが分かっていたような口振りで俺の質問に答えた。

「いやそうじゃないけど……」

「石川君とか出るんじゃない？ 前回も書記やってたし」

みなまで言わない内に委員長に俺の聞きたいことを答えられてビツクリする。

恐るべし委員長。俺の心は筒抜けか！ いや、これ以上はさせんぞ！
彼女に驚いた事を悟られないよう、適当に相槌をうつ。

しかし彼女はいたずらっぽく笑うと授業の準備を再開しながら、こう言ったのである。

「何ビツクリしてるの？ バレバレだよ」

……委員長恐ろしい子。

「なあ、俺って何考えてるか分かりやすいか？」

「ああ、なぜそんなこと思ったかは理解できんが、いつも考えていることはバレバレだぞ。

なあ、健二」

「そう？ 俺には良く分かんないけど……」

昼休み、健二の近くの人の机を勝手に拝借して、健二と尚と3人で飯を食っていた。

ちなみに3人ともお母さんの手作り弁当だ。

そこでふと箸を止め、尚にさっきのような事を聞くと、そんな答えが返ってきたのである。

どうやら俺の考えは尚にも筒抜けらしい。さすが長年の親友である。俺の事は良く分かっているようだ。

妙な感動を覚えつつ、しかしこれからは下手なこと考えないようにしようなんて思っていると。

「実はな健二。コイツ嘘をつくとき耳を触るんだぜ」

「そうなのか！ 参考になるなあ」

尚は不適な笑みを浮かべ、こちらを見ながら健二になにやら吹き込んでいた。

ちよつと待て、そんな癖があるなんて初耳である。嘘をついたことは数え切れないほどあるが、そんな癖があるなんて自覚したことは無い。と、いうかこれまで尚についた嘘は（ほとんどがほら話だが）嘘だとバレバレだったらしい。

「おい、俺にそんな癖があるなんて本当か？」

思わず身を乗り出しながら尚に詰め寄ってしまう。本当ならこれらの俺の人生にとっても有益な情報になる。

「いや嘘だけど」

しかし尚は何事も無かったかのようにあっさりと否定したのである。なんだか置いて行かれたような気分になる。尚と健二は既に再び黙々と弁当を食べ始めていた。俺は何か文句でも言いたかったが、思いつかなかったもので、とりあえず弁当にやりきれないこの気持ちをぶつけたのであった。

「なあ、健二って生徒会選挙出るのか？」

3人とも弁当を平らげ、俺はなんとなく手持ちぶさたな感じになったので、健二に話しかける。

すぐ後ろの席でカードゲームをしている連中を尚と眺めていた健二は振り向くと、頷いた。

そうなんだ、なんてなんとなく感心して、俺もカードゲーム観戦に加わろうと身体を伸ばすと、付け加えたように健二が話かけてくる。「そういえばさ、クリスさんも選挙でるらしいよ」

彼女も選挙に出るのか。まあ、あんまり興味が無かった俺は適当に返事を返し、いろいろと突っ込もうとする健二をかわしながら、佳境を迎えていたカードゲームに横槍を入れ始めるのであった。

クリスさんは当初、男子の奪い合いの対象になると予想されていた

が、そうはならなかった。

それは彼女が無愛想だからである。いや、話しかければ会話は成立するし、別にいやな性格をしているわけでもない。正確に言えば、無表情であるから、男子にそれほど人気が出なかったのである。確かに容姿は飛びぬけているが、いくら話しかけても表情一つ変えない、というのは気分が悪いだろう。

そんな彼女は女子の友達も少ないようだった。それでも性格は悪くないためか、幾人かは仲のいい子ができているようである。

彼女のことで一番驚いたのは、委員長が彼女を避けていることだった。委員長はどんな人とも仲良くできるすばらしい人間であると俺は認識しており、そんな彼女であったからこそクラスの委員長をしつかりと務めていると思ったのだが。さすがの委員長もクリスさんのようなタイプは苦手、ということらしい。

俺個人としてもクリスさんはあまり得意なタイプではなかった。しかし、クラスの皆からは俺はクリスさんの世話係のような認識をされている。

原因はもちろん、始業式の日に俺がクリスさんに命を助けられたお礼に困ったことがあったら何でも言えなんていったことにある。

さすがに俺の命を助けたことは言わなかったクリスさんだが、「お前が困ったら助けるぜ」発言はクラス、いや学年全体に波紋を呼び、ついには俺はほそちゃんにまでクリスさんをよろしくお願いしますね、なんて言われたのである。

まあ、俺としても彼女に約束した以上、なにかあったら彼女を助けるのはやぶさかではなかった。

しかし、彼女はとても優秀な人物で、学校が始まって3週間、特に困ったような思いはしていないようである。

日本語はとても上手で、聞くも話すも自由自在。記憶力も抜群で、校内で迷ったなんて話なんかも聞いたことはなかった。もちろん、授業の様子を見る限り、成績が悪いなんて事も無いようである。

まさに「完璧」であった。

健二なんかは、あのパーフェクト生徒会長に勝るとも劣らない完璧ぶりだなんて驚いていたくらいである。

そんな彼女だったので、俺の「世話係」も名ばかりのものであったが、ついにその役目を全うする日が来てしまったんだ。

「たじまさん、わたしこまっているのですが……」

ほそちゃんが生徒会選挙の告知をした日、つまり今日の放課後。

早く部活へ行こうと慌しく準備をしていた俺に、やはり無表情で彼女はそう話しかけたのであった。

4月28日その2 たすけます

「たじまさん、わたしこまっているのですが……」

「いやごめん。俺早く部活いけないといけないんだ」

そういった彼女はやはり無表情で、あんまり困ってる風には見えな
い。と、というか早く部活に行かないと俺は帝王こもんに何をされるか分
からない。

困っているというクリスさんを見捨てるのは気が引けたが、自分の
命には代えられないと、俺の正面に立っていたクリスさんを避ける
ようにして部活に向かった。

いや、向かおうとしたのだが……

「たじまさん、わたしこまっているのです」

そんな俺の正面に回りこむように再び現れたクリスさんはどこまで
も無表情で語る。

表情からはまったく分からないが、どうやら本当に困っているらし
い。

しかし俺も早く部活に行かないと困ってしまうのである。今度は何
も言わずに彼女の横を通り抜けようとする。しかし、彼女はすばや
く手を伸ばすと、俺の身体をつかむのであった。

身体を触られて思わずドキドキしてしまう。

しかし、今はそんなときではない、部活に行かないと……

「たじまさんは、たすけてくれるとやくそくしてくれたのではない
のですか？」

「田島さあ、クリスさんにそこまで言われて助けられないなんてひどい
んじゃない？」

いつの間にか集まっていたクラスメイトにも責められてしまう。ど
うやらクラスの皆はクリスさんの味方の方ようだった。

彼らは帝王こもんの恐ろしさを知らないからそんなことが言えるのである。
あいにく帝王は倫理担当で、理系クラスの6組にはその授業を受け

た者はおらず、剣道部員もクラスにはいなかった。

無知は恐ろしい。クラスメイトは次々とクリスマスさんの方に立つと次々と俺に非難の言葉を浴びせてくる。その迫力に負けた俺は、ついにクリスマスさんを助けることを了承してしまったんだ。

「それで、困っていることって？」

俺が了承したと分かるとクラスの連中はすぐにどっか消えてしまった。もうクラスに残っているのは帰宅部の暇な連中くらいである。どうにも恨めしいが、ここで逃げて明日からの学校生活に支障をきたしそうだ。

部活に遅れても理由があって少しくらいなら、許してもらえるかもしれない。

とりあえず俺は5組の西山^{ふいん}に遅れると一声かけ、クリスマスさんの悩みを聞いてから部活に行くことにしたのである。

「せいとかいせんきよのことなのですが……」

「選挙？ 出馬登録のことならほそちゃんに聞けば一発だぞ」

お互い自分の席に着きながら、俺は彼女が困っていることについて聞くことにした。

どうやら彼女は生徒会選挙について困っているらしい。あんまりたいたしたことではなくて良かった。

とりあえずほそちゃんに押し付けてしまえばいいのである。そういうことは先生に聞くほうが確かであろう。

しかし彼女はゆっくりと首を横に振ると、

「そうではなくて、たじまさんにこうけんにんになってほしいのです」

確かにそうだったのであった。

後見人。法律用語では簡単に言うとなんと財産等の管理の際に未成年の代理となつて手続き等をおこなう人間……であつたと思う。

もちろん、うちの生徒会選挙では意味が違う。

その人が選挙に出ると値する人間であると保障し、共に選挙運動を行い、推薦演説を候補者の決意表明と共にこなう人物。である。本来後見人とは、そのクラスの委員長や、候補者の親友といった人物がなるものである。とりあえず、尚によると既に変人としてクラスに通っているらしい俺がなるものではないと思う。

「なあ、今後見人になって欲しい、っていったんだよな。」

「はい、そうです」

思わず彼女に詰め寄る形になりながら確認してしまう。それほどまでに彼女の発言は信じられなかった。でも彼女は驚いた様子も無く答える。

むしろ教室にまばらに残ったクラスメイトの視線が俺たちに集まってしまう。

とても恥ずかしくなった俺がゆつくりと自分の席に戻ると、視線は離れた。

「なあ、どうして俺なんだ？」

彼女には友達もいるし、うちのクラスには皆からの信頼が厚い委員長もいる。

少し落ち着いた俺は、彼女に俺を選んだ理由を問うてみたのであった。

「はい、それは……」

彼女がゆつくりと話してくれたことを箇条書き的にまとめると、ほそちゃんに出馬することを告げたら、後見人が必要だと言われた。友達に後見人になってくれるかと聞いたら、委員長がふさわしいと言われた。

委員長に後見人になってくれるかと聞いたら、私には無理だと言われた。

後見人になってくれる人がいないのでどうすればいいか分からなくなった。

そういえばどうすればいいか分からなくなったら、いつでも助ける

と俺に言われた。

俺に後見人になってもらおう。

と、いうことらしい。

「こうけんにん、なってくれますか」

彼女はあいかわらず無表情であったが、それでも俺は彼女が俺を頼ってきていると感じていた。

ここで彼女の後見人になることを断ってしまうと、それこそ彼女は本当に困ってしまう。

いつも無表情で、感情の変化が感じられない彼女。

外国からやってきた転校生で、俺にとっては命の恩人。

そんな彼女が異国の地で生徒会選挙に出ようと決意した。そこにはきつと俺には理解できないような深い理由があるのだと思う。

感情を見せない彼女だが、それでもきつとうちの学校について彼女なりに何か思うところがあるのだろう。

俺は約束したからでなく、男としてクリスさんに何か深い感銘を受けていた。

後見人。それは面倒なことだと十分理解していた。

俺は後見人にふさわしくない「平凡」な人間だとも分かっていた。それでも彼女に向かって精一杯の笑顔を浮かべ親指を立てながら、

「ああ、後見人になるよ！ 絶対当選しようぜ！」

なんて言ってしまったのである。

4月28日その3 帝王現る

「しつれいします」

クリスさんは凜とした態度で、職員室へ入っていく。クリスさんの後見人になることを了承した俺は、彼女と共に職員室の先生に報告へ来ていた。

「失礼します……」

クリスさんは職員室をほそちゃんに向かってどんどん進んでいく。それに対して俺は戦々恐々としていた。周りをきよろきよろと見回し、微妙に腰を引かせながら職員室を進んでいく。

帝王はもう部活へ行ったよな。もう、職員室にいないよな。

もし彼が職員室にいた場合、俺としてはとても気まずいことになってしまう。無駄に心臓を高鳴らせ、胸に何か詰まったような気分になる。

出来るだけ職員室にいる人間を見逃さないように進んでいった。見渡した限り、帝王はいないようだった。とりあえず一安心である。

ふとクリスさんの方を見ると、彼女は既にほそちゃんと話し始めていた。

ちよっと焦った俺は、小走りに彼女の元へ駆け寄ったのである。

「細山先生。クリスさんの後見人になることに決めました。田島です」

彼女の横に並び、ほそちゃんに挨拶をすると、彼はやさしい笑顔で迎えてくれた。やっぱほそちゃんは癒される。なんだか胸のつかえがとれたようだ。先ほどの緊張を忘れ、ほそちゃんと話していると、後ろからいやになるほど身体に沁みこんだ声があった。

「田島、部活はどうしたんだ……」

その瞬間、もう終わりだと思った。

体中の筋肉がこわばったようになって、なぜか身体が震えてしまう。しっかりと地に足をつけているのに、薄氷の上を進んでいるような気分になる。

俺は後ろに立っている人物に静かに挨拶しているクリスさんを尻目に、ゆっくりと後ろを向きながら、出来るだけ角の立たない言い訳を考えていた。

「田島……」

どうやら何も言わない俺に少しイラついたらしい。先ほど俺に声をかけたお方は、ドスの効いた声で俺の名を呼ぶ。

もう、その人物は俺の正面に来ていた。

俺は歯が浮いたような感覚を必死に押さえつけながら、その人物に話しかけた。

「近藤先生。あの、俺クリスさんの後見人になること決めてその、西山に言っただけですけど……」

結局、口を開くとすべるように言葉が紡ぎ出されて、意味不明な言い訳になってしまった。

正面の人物——剣道部顧問の近藤先生は俺の言い訳にすぐには返事は返さず、俺の横を通り過ぎる。

帝王はほそちゃんの奥の机に腰を下ろすと、机の引き出しからなやら書類を取り出した。

俺はそれを魔王を目前にした一般人のように怯えながら見つめていた。

横ではなにやらクリスさんとはそちゃんが話しているが、まったく気にならない。

と、というか俺の周りの世界には既に帝王と俺だけしかいなかった。書類を取り出した帝王はそれを片手に俺の方に目をやる。

ついにきたか。その瞬間全身の筋肉に意図せず力が入る。頭の中では意味のない空想が頭を駆け巡っていた。

怒鳴り散らされてしまうのか。殴られてしまうのか。許可が出るま

でランニングさせられるのか。いや、あの書類はなんだ。もしかしたら退部届けか？

俺は剣道部をやめさせられてしまうのだろうか……

緊張が限界まで高まり、どうしようもなくなった頃、帝王はため息を吐くと、何も言わずに俺から目を離してしまったのである。その瞬間風船から空気が抜けたように、身体から力が抜けた。

とりあえず今、目の前の危機を乗り越えたことに対して安堵する。

しかし、まだ俺の世界には二人しかない。

そう、まだ何も終わっていないのだ。彼が何も言わない、ということとは後で何かしらの制裁が下されるということであろう。

そうだと分かってはいたが、帝王が何も話さないことがかえって未知の不安を俺に与え、俺は彼に声をかけてしまったのである。

「あの……」

すると事務仕事を始めていた彼はこちらに目も向けず、やはりドスの効いた声で

「用が済んだら早く部活行け」

とおっしゃったのであった。それに反射的に元気よくはい！ と答えてしまった俺の気持ちは、きつとうちの剣道部員なら全員が理解してくれるだろう。

先に大きな不安が出来てしまったが、とりあえずは大丈夫そうである。

そう思うと急に俺の世界が開けてくる。

横を見ると、ほそちゃんが笑顔でお話は済みましたか、なんて話しかけてきた。

なんとなくほそちゃんの奥を気にしながらほそちゃんの問いに肯定する。

すると彼はうなずきながら、

「それでは二人とも、生徒会長目指して頑張ってくださいね」
なんていったのであった。

「へ？」

思わず変な声が出てしまった。

ほそちゃんの発言が、一瞬宇宙人の言語であるかのように感じる。が、ほそちゃんの奥からの冷たい視線を感じ、すぐに我に返る。そういうばクリスさんにどんな役職で選挙に出るか聞いてなかったなあ。なんて思った。

そしてすぐ、安請け合いました俺の決断を、深く後悔したんだ。

「それではたじまさん、いきましよう」

クリスさんが、俺の気持ちを知ってか知らずか、クリスさんが職員室を出るよう俺のことを促す。それに相槌を打ちながらも、彼女を恨めしい目で見てしまう。

しかし、彼女は俺の目をまったく気にしない様子で、そのまま職員室を出てしまった。

なので俺も、ほそちゃんと帝王に会釈すると、小走りで職員室を出たのであった。

「たじまさん、せんきよのことで……」

職員室を出るとクリスさんがすぐに話しかけてきた。しかし、先ほど帝王の勅命を受けた俺は彼女に構っている暇はもう無かった。早く行かないと俺は本当に大変な目にあってしまうのである。こうしている間にも、俺の運命の天秤は、悪いほうに傾いてきている気がした。

「すまん、その話はまた今度でいいか？　俺部活行かないとやばいんだ」

話を続ける彼女をさえぎって駆け足で部活に向かう。

彼女には色々と言いたい事があったし、聞きたいことがあった。だけれども俺は、とりあえず目の前の危機を軽くすることに全力を

注ぐのであった。

4月28日その3 帝王現る（後書き）

4月28日はこれで終わりです。

作品についてご意見感想いただけると、とてもうれしいです。

4月29日その1 朝の出来事

どんなに俺の周囲が、俺の立場が変わっても、俺は「平凡」その事実は変わらない。

何か、いやな夢をみた気がした。

目覚まし時計のベルの音が聞こえる。でも体も頭も重くて動きたくない。

とにかく眠くて、機械的なベルの音が耳から入ってただ抜けていってしまふ。

それでも主人の意志を無視して鳴り続ける目覚ましは俺の意識を無理矢理引っ張り上げていく。

意識がはっきりしてくるとともに、先ほどから鳴り続けているベルが、とてもうざったい物に感じてくる。止めなければ。

そう思っただけで急に急かされるように身体を起こそうとした瞬間、

「っ！　いってえ」

全身に激痛が走ったのであった。うわあ、やっぱりか……

朝からげんなりとしてしまう。これじゃあ部活なんてできねえよ。

そんなことを考えている内にも、ベルは無情に朝を告げ続ける。

今度はゆっくりと、身体が痛くないよう慎重におきあがると、俺はやっとベルを止めたのであった。

昨日、俺はクリスさんと別れてすぐに部活に向かった。

剣道場に着いた時には既に部活は始まっていた。あらかじめ西山に伝えておいたこともあり、部員達には特に何も言われなかった。

さらに、帝王はまだ剣道場にいなかったもので、怒られずに済むかと思っただけだ……

俺から少し遅れて現れた帝王は、俺を見つけると開口一番、

「外周走ってこい」

なんて言いやがったんだ。奴の「外周走ってこい」とはつまり、部活終わるまで走ってろ。ということであり、俺は部員たちの同情の視線を受けながら剣道場の外に出ると、結局部活が終わるまで約2時間、走り続けたのであった。

おかげで今筋肉痛で死にそうである。一応昨日の夜湿布を貼ったのだが、効果はなかったようだ。

帝王、交通事故とかに逢わないかな、なんて勝手な事を考えながらゆっくり、ゆっくり制服に着替える。

少しづつ身体を動かしている内に、少しは痛みがましになる。

どうにかして部活をサボれないか考えながら、俺は寝起きよりかは速いスピードで階下の食卓兼リビングへ向かったのだった。

「おはよ〜」

下に行くともう親は二人とも朝食を食べていた。俺は二人に挨拶をすると、ゆっくりと朝食の準備を始める。

「なあ、何か身体の動きが変だぞ、どうした？」

食パンをほおばりながら新聞を読んでいた父さんが話しかけてくる。親には昨日帝王にしごかれたことは言っていない。と、というか気まずくて言えるわけなかった。

「ああ、部活激しくて……」

なんとなくはぐらかしながら答えてしまう。だけど父さんは、たいして気にしてなかったのか、そうかなんて相槌をうつと、また新聞に顔を埋めてしまった。

「あんた、軟弱なんじゃないの？」

冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注ぐ。テーブルにあった食パンにジャムとマーガリンを塗り始めたところで、テレビのニュースを見ていた母さんがからかうように話しかけてきた。

「母さんもあれやればこうなるって！」

軟弱なんていわれてちよつとむつとしてしまう。ろくに運動してない専業主婦が2時間ぶっ続けで走ったら次の日動けないだろう。

それに比べたら俺の方がましに違いない。

なんて、喧嘩腰になってしまったが、母さんはいはいなんて両手を振って

「このニュースみたいに学校に耐えられなくなって家出なんてしないでよ」

なんてまたからかってきたのであった。

「そりゃ都会の出来事だろ……」

さすがに毒気を抜かれて食パンをほおぼる。テレビでは、若者の家出、失踪が社会問題になってきていると報じられていた。それをなんとなく流し見しながら朝食を片付ける。

俺は朝食が片付くと母さんに冷やかされながらも、一縷の望みを託して全身に再び湿布を貼った。

ニュースの内容が毎朝恒例のUMAについての話題になったところで、登校の準備を済ませた俺は、全身を痛みと不自然な清涼感に包まれながら、家を出て学校へ向かったのである。

学校に着くと、筋肉痛は思ったよりましになっていた。どうやら湿布と自転車をこいだのが効をそうしたらしい。俺は周囲にメンソールの香りをふりまきつつ、なんとなくスキップしながら俺は教室へ向かうのであった。

「よう、今日も元氣に変人だな」

「おはよう勇者。……なんか臭いけどどうしたんだ？」

教室に入ると、もう健二と尚が来ていた。二人に挨拶をすると、俺も席に着く。

だけれども、筋肉痛が気になってどうもじつとしてられない。動いたら痛いとは分かっているのだが、動かさないと良くならないとも分かっていた。

ついに我慢できなくなった俺は、朝のホームルームまで、事情を知った尚に馬鹿にされ、健二に同情の目で見られながら、教室の後ろ

でストレッチをしようと決めたのである。

「たじまさん、きのうのおはなしのつづきがしたいのですが」

教室の後ろでストレッチという奇行にクラスメイトの皆は、俺がいないかのように朝の時間を友人たちと過ごしていた。

しかし、さすがもう既にクラスの皆に鉄仮面の女王として知られるクリスさんである。彼女は教室に現れると、俺の奇行もなんのその、まったく気にしてない様子で話しかけてきたのであった。

「あゝ、うん生徒会長に、立候補、した、んだよな」

床に腰を下ろし、両足を広げ、左足から伸ばし始める。もともと身体は柔らかい方ではないが、今日は筋肉痛のおかげでさらに伸びなかった。

立ったままクリスさんは俺を見下ろすようにさらに話しかける。

「はい。それで、せいとかいちょうとはどのようなことをするのですか？」

「あゝ……」

クリスさんの言葉を適当に聞き流しながらストレッチを続ける。

しばらくゆっくりと伸ばし続けているうちに痛みは楽になる。もしかしたら意外と部活には影響しないかもな……

「……は？」

今、何か信じられないせりふを聞いた気がする。俺は思わずストレッチをやめ、クリスさんの彫刻のような顔を下からまじまじと見つめてしまうのであった。

あ、スカートの中が見えそう。突然気恥ずかしくなった俺は立ち上がると、クリスさんの方を見ないように話しかける。

「なあ、今なんて言った？」

俺はとりあえず彼女が何て言ったかもう一度確認したかった。

生徒会選挙に出る人物にあるまじき発言をクリスさんが言い放った気がする。

クリスさんは立ち上がった俺にゆっくりと視線を合わせる。彼女は先ほどと変わらない調子でやっぱり、

「せいとかいちゃうとはどのようなことをするのですか」
と言ったのであった。

4月29日その1 朝の出来事（後書き）

第16話にしてやっと主人公の両親が出ました。
こんな小説ですがご意見ご感想いただけるとうれしいです。

4月29日その2 午前中の出来事

「クリスマスさん、冗談だよな？」

あゝ、クリスマスさんって意外とお茶目なんだなあ。いくら外国からの転校生だからって、まさか何にも知らずに生徒会長に立候補したなんて事はないよな。

きつと彼女なりの冗談に違いない。

俺はそう結論づけて、彼女に「一応」確認をとったのだが……

「……いえ、じょうだんではありません」

俺の言葉の意味を噛み砕いていたのだろうか。彼女は、顔の筋肉を少しも動かさず何秒か黙ると、見事に俺の予想をぶち砕いてくれたのであった。

オーマイゴット！ああかみよ あなたが使わした天使くりすさんは何ということをしでかしたのであるか。

生徒会会長の意味も知らず立候補する。ある意味伝説だが、それにかかわってしまったっている俺にとっては堕天使がもたらした災厄に過ぎない。

ほそちゃんに頼んで立候補を取り消してもらおう。うん、それがいい。幸運なことに選挙の公示は来週の月曜なんだ。今のうちならまだ何も問題にならないだろう。

よし、そのためにはこの堕天使を説得しなきゃな。俺は自分でも分かる引きつった表情で、目の前の堕天使に自らの行いを取りやめるよう、交渉たたかいを挑むのであった。

「終わった……」

俺の高校生活は終わった。もう学校に来ることもないだろう。

「平凡」な俺が堕天使に挑むなんて無謀だった。

信じていた者にも裏切られた。

心に深い傷を負った俺は、昼休みの喧騒を尻目に学校を後にするのであった。

さようなら、みんな。

うららかな春の陽気が、逆に心に沁みた……

「で、何が終わったんだ？」

昼休みが始まり、現実逃避をしていた俺に、尚が話しかけてくる。机に突っ伏し、高校を辞めた後の生活を夢想していた俺は、現実に戻ってくると、

「後見人、替わってくれ！」

尚に懇願したのであった。

結局俺は、クリスさんの後見人として生徒会選挙に出ることになった。ちまった。

クリスさんは、俺の必死の説得にもかかわらず、私は選挙に出なくてはいいけないのです。の一点張り。

最後の希望であったほそちゃん。彼に朝のホームルームが終わった瞬間、事情を話そうと思っていたんだけど……

「クリスさんが田島君を後見人に生徒会長に立候補しました。みなさん、応援していきましょうね」

なんてオフレコ情報を暴露しやがったのである。クラスは大騒ぎであった。

あの完璧会長に挑む人間が現れた、それはもちろん大ニュースである。

俺も部外者だったらどんなにか楽しめたことだろうに……

クラスがお祭り騒ぎになっているのを笑顔で収めていたほそちゃん。でも俺にはその笑顔は悪魔の薄ら笑いにしか見えなかった。

俺は一応ホームルームの後、ほそちゃんに事情を話した。だけれども彼は柔らかに微笑んで、

「彼女の意志を尊重しましょう」

なんて言って、クラスメイトに質問攻めにあい始めた俺を尻目に悠々と職員室へ行っちゃまいやがったのである。

「やだ、そんな面倒くさいこと出来るか。まあ、選挙期待してるかな」

時は進み、昼休み。尚は、そんな俺の懇願を一刀両断したどころか、さらに俺を追いついでいくのであった。

俺はどうしたらいいんだ。俺は、周囲の皆によってどんどんのっぴきならない状況へと追い込まれていると感じていた。

「やるしかないか……」

尚、健二といういつものメンバーと昼飯を食った俺は、一人決意を固める。

いや、本当はやりたくない。けどどこまで来てしまったらもう後には引けないじゃないか。

それに、今までこういうイベントにはかかわってこなかったんだ。

失敗しても一発やらかす、というのも面白いかもしれないな。

半分やけになって決意を固めた俺は、隣で静かに読書していたクリスさんに声をかけた。

「クリスさん、作戦会議だ！」

「早速だがクリスさん、何で立候補しようと思った？」

作戦会議を行う事を決めた俺は、クリスさんを強引に講義室あききょうしつに連れ込んでいた。

……なんかそこはかたなくエロい響きだが、気にしない。俺はもう決めたんだ。どんな恥をかこうともクリスさんを当選させてやると！と、一人盛り上がった俺を尻目に彼女は静かに俺の問いに答える。

「せんきよにでろ、といわれたので」

「誰に！」

反射的に大きな声で叫んでしまう。まさか誰かに言われたから選挙

に出ようと思ったとは……

昨日、勝手にクリスマスさんの思いとやらに感激した奴はだれだろう？

……俺じゃん。

彼女は、俺の大きな声にも驚いた様子はなく、

「すぎやまようすけさんです」

静かに俺をこんな状況に追い込んだ悪魔の名前を告げたのであった。
杉山陽介。うちの高校の現生徒会長。別名完璧会長。パーフェクトマン

別名が示す通り、テストではいつも学年トップクラス、所属するサッカー部ではエースストライカーで県の選拔選手。容姿端麗で、素行も優秀。性格も良し。と、まったく非の付け所の無い人間なのである。

まさかあの会長がクリスマスさんに立候補を薦めたとは……

くそ、完璧会長め、面識はないが今度会ったら覚えてろよ。

「そもそもだ。なんで会長に立候補を薦められたんだ？」

少し冷静になると、疑問がわいてきた。会長とクリスマスさんに面識なんてあったのか。同じクラスで過ごしている俺が見た限り、そんなそぶりは無かったはずだが……

それにたとえ面識があったとしても、どうして外国から来たばかりの彼女に生徒会長の立候補など薦めたのだろう。

基本良い人間で通っている会長がそんなことをするなんて……

クリスマスさんは彫刻のようにしばらく黙ると、ゆっくりと口を開く。

「それは……」

「それは？」

身を乗り出して彼女の答えを待つ。

鉄仮面の女王が立候補を決意した理由が今、明らかに！
なんてことを考えていたことは、彼女には秘密だ。

4月29日その3 真昼の出来事

「……いえません」

さんざんためた結果、 크리스さんが放った言葉はこれだった。

「言えないって、どういうこと？」

納得が出来なかった。会長に立候補を薦められるなんてよほどのことがないとありえないことだと思う。それなのに、その理由が言えない。後見人である俺にも言えない。どうしてなのか、会長と彼女の間の秘密なのか。

「特別」な人間同士の秘密なのか。

だから、「平凡」な俺には伝えることが出来ないのか。

俺は、彼女の態度が納得できないだけだったはずだった。

なのに、いつの間にかいろいろな事が頭をよぎって、目の前の「天使」のことをにらみつけてしまっていた。

頭の中がぐちゃぐちゃする。「平凡」とか「特別」とか俺にとってはどうでもいいはずの事が頭に染み付いて離れない。

いや、本当にどうでもいい事なのだろうか。

あのUMAに襲われた夜、彼女に言われた言葉が、また頭をぐるぐる回っていた。

あなたに、ちからはないのでですか？

「たじまんさん？」

「あ、 크리스さん。……すまんばおっとしてた」

크리스さんに声をかけられて我に返る。一つ席をはさんで俺と話

していたはずの彼女は、いつの間にか俺の正面に来ていた。

「それで、立候補を薦められた理由はどうしても話せないのか？」

「はい、いえません」

もう一度、答えは分かっていたが、念を押すように彼女に確認をとる。

やはり彼女は、予想したとおりの答えを返すのであった。

……彼女がどうしても言えない、というならあまり気にしてもしようがないじゃないか。

俺だって 크리스さんに俺の全てを話しているわけじゃない。 크리스さんの話せないことがたまたまそれだっただけのことだろう。

俺は自らにそう言い聞かせて、自分を納得させた。いや、これ以上彼女の秘密について考えると、自分が自分でなくなってしまいそうで怖かった。

「それでだ、 크리스さんは選挙をどう戦う？」

これまでの雰囲気打ち破るよう、少し声を大きくして彼女に話しかける。

そう、そもその本題はこれなのだ。俺は 크리스さんの後見人になった以上、どうしても彼女を当選させてやりたかった。

彼女は、俺のすぐ隣の席で少し押し黙る。

すぐ近くなので彼女の顔が良く見える。うーん、やっぱりかなり綺麗な顔である。天使のような、という言葉がぴったりだ。これで笑顔とか浮かべちゃったら男子は一発 K・O なんだけどなあ。

크리스さんは、ほんの少し、俺が彼女の顔を見ていなかったら分からなかったくらい少し眉をひそめると、

「わかりません」

なんて言い放ったのである。

俺の中で何かが凍りついた気がする。

……何か前にも同じような事があった気がするなあ。

いや、少し考えれば分かることじゃないか。そもそも会長に推薦されて、何も分からないまま立候補したんだ。選挙の戦い方なんて知らなくても不思議じゃない。

しかし、これは困った。俺だって生徒会選挙の戦い方なんて知らない。何しろそれまでの選挙で、選挙活動などじっくり見たことなんて無い。いや、じっくり見た奴がいたら、逆にこっちが聞きたいくらいである。なんとなくのイメージはあっても、選挙活動の詳しいやり方なんて知るわけないじゃないか。

「まあ、これから考えていくか」

先行きには大きな不安があったが、あんまり気にしても仕方が無いか。ほそちゃんにでも聞けばいろいろと教えてくれるだろう。俺は、とりあえずほそちゃんのところへ行くか、なんて決めて、クリスさんと講義室の外へ出ようとした。

すると唐突に講義室のドアが開いたんだ。そこから見覚えのある男子生徒が飛び込んでくる。と、というか飛び込んできたのは尚だ。

奴は何がしたいんだよ……

「お主ら、困っておるな」

飛び込んできた尚は、教壇に立つと、俺たちを見るなりなんかほざいてきた。まあ、ああいう時の奴は無視するのが一番。触らぬ神に祟り無しってね。

俺はこんにちは、なんて挨拶しようとしていたクリスさんを引っ張って職員室へ向かおうとする。後ろで、あいさつはたいせつです、とか無視するな、とか聞こえるけど気にしない。

気にしないはずだったんだけど、クリスさんは俺の手を振り切って教壇の奇人しやうじんの元へ挨拶しに行ってしまったのである。……やっぱクリスさんは堕天使だと思う。

「こんにちは、こばやしさん」

「こんにちはクリスさん。君はどっかの誰かとは大違いだね」

教壇でなにやら会話を始める尚たち。尚はクリスさんと話しながら、勝ち誇ったような笑みを俺の方に向けてきていた。くそ、奴のペースになってしまった。

これは面倒くさいことになるぞ、なんて思いながら結局俺も尚との会話に加わるために、教壇へ向かう。ふと、教室の前方にかかっている時計を見る。昼休みはまだ30分は残っている。

「助っ人を連れて来た？」

「うむ、ありがたく思うがいい」

教壇で話していた二人の元へ向かうなり、尚はそんな事を言ってきた。助っ人。今の俺たちにとってはありがたい話である。でもいまいち信用できないんだよな。

もちろんそれは提案者が尚だから。長年の付き合いで分かっている。こいつの俺に対する基本行動原理は俺を貶めることだと！ まあ、俺もそうなんだけどな。

「さあ、助っ人さんどうぞ！」

どうせ大した奴ではないだろう。多分茶化されて終わるんだろうな。あんまり期待しないで、再び開いた教室のドアへ目を向ける。するとそこには。

「どうも、助っ人でーす。なんてね……」

委員長がいた。予想外です。彼女は身をかがめながら、何かものすごく恥ずかしそうにこちらへ向かってくる。彼女の気持ちはなんとなく分からんでもない。でも、それよりも、尚がまともな人材を連れて来たことに俺はビックリ仰天だった。

「委員長、クリスさんの後見人断ったんだよね」

俺は委員長が来るなりそんな質問をぶつける。彼女が後見人になっただけなら俺はこんな苦勞を背負わずに済んだのに……

多分今、俺はとても恨みがましい表情をしているだろう。委員長

はそんな俺にもものすごく申し訳なさそうな表情をしながら、謝ってきたのである。

「生徒会長の推薦演説なんて無理だと思ったの。その、私のせいで後見人になったみたいで本当にごめんね。代わりといったらあれかもしれないけど、その、選挙私なりに協力させてもらうから」

むう、ものすごい申し訳なさそうである。怒る気にも、からかう気にもなれないじゃないか。俺は表情を緩めると、委員長に協力を要請したのであった。

4月29日その4 午後の出来事

加藤理恵。県立小山原高校2年6組のクラス委員長。飛び切りの美少女ではないが、親しみやすい性格。よく気がきくのでクラスの皆からの信頼が厚い。

何が言いたいか、というと。

「委員長ほんとに頼りになるわ」

と、いうことである。尚の奴は、俺たち3人が真面目な話に入ったところで、やることがあるなんていつて教室に戻ってしまった。尚はほんとに頼りにならない。

クリスさんの生徒会選挙の協力を承諾した委員長は、クリスさんにまずいくつかの指摘をした。

まず、嘘でもいいから選挙に出た理由を考えること。クリスさんが、現生徒会長に薦められて立候補した、と聞いた委員長はさすがに哑然としていたが、すぐ彼女にそういったのである。

次に何でもいいから文化祭を盛り上げるアイデアを考えること。

委員長が言うには、とりあえず行事を盛り上げるようなアイデアが出せれば、選挙は有利に進められる、らしい。うちの学校で一番大きい行事は文化祭だから、それを盛り上げるアイデアを考えろ、ということだそうだ。

そして最後に、委員長はなぜかためらいながら、

「クリスさん、笑うことって出来る？」

こう、指摘したのであった。

まあ、委員長の言わんとすることは、俺にも理解できた。クリスさんは誰かが認める飛び切りの美少女である。でも、今まで彼女の表情が大きく変わった時なんてなかった。もし、そんな彼女が飛び切りの笑顔を振りまいたらどうなるんだろう。少なくとも俺は、彼女にノックアウトされちまうと思う。俺みたいな奴がふらふらとクリスさんに投票することを委員長は狙っているのだろう。

クリスさんは、委員長の言葉を聞くと、彫刻のようにしばらく動かなかった。そして、最低限の筋肉の動きで、こう告げたのであった。

「わかりません」

どうやらクリスさんは笑い方が分からないらしい。あゝだからクリスさんは表情を変えたことがなかったんだなあ……ははは。納得、納得。

と、まあ俺はクリスさんの発言に少し哑然としていたわけだが、委員長はそう言われる事を予想していたかのように、笑顔で切り返すのであった。

「大丈夫。田島君が笑わせてくれるから！」

……え？

「疲れた……」

部活が始まってもないのに、帰りのホームルームが終わった瞬間俺はそんなことをつぶやいていた。まさか、委員長があんなことを言うなんて……

昼休み、委員長がクリスさんに笑い方を教えるために用意した策。それは、俺がひたすらギャグをクリスさんの前で連発する、というものであった。……それはもう突っ込みどころ満載じゃないか。笑い方を教えるなら、表情の動かし方を教えるとかもっと他にやることがあると思う。

それなのに委員長は、まあ田島君はギャグを言い放ってればいいから、なんて言って、まったく俺の主張を聞き入れてくれなかったのである。

結局、俺は昼休みが終わるまで、果たして面白いのかも分からないギャグを女子二人の前で連発したのであった。しかも、昼休みが終わっても何をとち狂ったのか、クリスさんは、笑わせてください、なんて事あるごとにギャグを要求してきた。そのたびに委員長が俺

を煽るので、午後の授業と授業の間いっぱい、まったく遺憾ながら俺はクラスのみんなの前でギャグを披露し続けたのである。

「疲れた……」

いや、まったく疲れた。クリスさんには俺の部活事情は話しておいたので、今日は部活に遅れる心配は無い。バックに教科書等をまとめ、持ち上げると腕の筋肉が痛んだ。ああ、そういえば今日筋肉痛がひどかったんだなあ。なんて思いながら、俺はだらだらと部活へ向かったのである。

「ありがとうございます!」

竹刀を左手に持ち、それを腰に当てると姿勢を正す。声を張って元気よく挨拶し、深々と礼をした。剣道部員約30名からいっせいに礼を受けた帝王は、軽く礼をすると、無言で剣道場の入り口へと向かっていく。

それを俺たちは直立不動で見送っていた。みっちり2時間の練習。やっと部活が終わった。俺の中には帝王が居ることにより生じる緊迫感の中にも、どこか安堵のような感じがあった。

「田島……」

入り口へと向かっていた帝王が唐突に俺に声をかけてきた。剣道場がまた、戦場のような緊迫感に包まれる。何だ、帝王は何が言いたい。俺は何もしてないはずだ。

「はい!」

心の中は焦りや恐れでいっぱいだったけれど、それを表に出さずに元気よく返事をする。そうしないと、余計な面倒を引き起こしてしまう事は俺の身体に深く刻み込まれていた。

「……生徒会選挙の後見人なら、公示が終わると部活に遅れる事もあるはずだ。だったら、分かっているな」

「……はい!」

一瞬、何を言っているか分からなかったが、理解すると同時に返事をする。帝王はそれを聞くと、すぐ剣道場の外へ出て行ってしまった。

「はぁ……」

剣道場が生き返ったかのように喧騒に包まれた。部員達が俺にいろいろと話しかけようとしてくる。それを部長が収めると、西山が部員全員の疑問を代弁するかのように話しかけてきた。

「なあ、後見人ってどういうことだ？　というか帝王はなんて言ったんだ？」

後輩達が剣道場の掃除を始めるのを横目で見ながら、剣道場の隅にある更衣室に向かう。歩きながら俺は西山と話を続ける。

「ああ、あの転校生くりすさんが生徒会長に立候補するんだ。俺はその後見人になったわけ。帝王は多分、それで部活に遅れた分を自主練しろって言いたかったんだと思う」

更衣室へたどり着くと、まず防具をしまう。胴衣を脱ぎ始めたところで、俺の説明が終わった。

「で、どうするんだ？」

「まあ、家にも木刀はあるけど……一応木刀を持ち帰っておくよ。多分それなら何も文句言われないだろ」

「ま、それが無難だな」

西山に今後の方針を問われる。それに答えながら胴衣から制服に着替え終わったところで、竹刀入れを取り出す。それに木刀を突っ込んで、俺の帰りの準備は完了した。

西山は俺との話を切り上げると、着替えを終えて更衣室へ出て行く。俺もそれについていく。

「ねえねえ、田島君」

「いやいや、それは俺から説明させてもらうよ」

更衣室の外では女子部員が待ち構えていた。西山は俺に話を聞こうと待ち構えていたであろう女子部員に、なぜか俺の代わりに話をし始めるのである。奴め、これを狙っていたのか。……やりおるな

「……早く帰れよ」

楽しそうに話をする西山に、なんとなく負けたような気分になりながらも、俺は木刀を背負って剣道場を後にしたのであった。剣道場を出る直前に時計に目をやる。時刻は午後6時すぎを指していた。

4月29日その4 午後の出来事（後書き）

私事で誠に申し訳ないのですが、来週から二週間は高校総体、定期
考査の準備期間と行事が立て込んでいます。ですので、今までのよ
うに更新できないかもしれませんがご理解いただけるとうれし
いです。

4月29日その5 非日常な出来事（前書き）

難産でした。題名に期待しないでください。

4月29日その5 非日常な出来事

剣道場のすぐ近くに停めた自転車の籠に、バックを突っ込む。竹刀入れを背負うと、俺は自転車にまたがり、校門へ向かう。少し前は6時だと真っ暗だったのに、まだ外は薄暗く、なんとなく時間の流れというものを感じてしまう。校門までたどり着くと、いつもの通り当番の先生が立っていた。

「さようなら」

「おい」

自転車をこぎながら挨拶をして通り過ぎようとすると、先生に声をかけられた。前輪を先生に向けるように自転車を停める。この人は……1年の担任だったろうか。あまりよく知らないんだけど。少し戸惑いながら、俺は先生と目を合わせた。

「剣道部は終わったのか？」

先生は俺の竹刀袋に目を向けながらそう言ってくる。俺がそれに肯定すると、近藤先生はホントきっちりやるなあ、なんて言って校舎の方へ歩いていってしまった。多分、剣道場の奴らに釘を刺しに行くのだろう。完全下校時刻にはあと30分もないし。まあ、ほとんどの生徒はそんなのはうざったい決まりくらいにしか考えてなさそうだけど。

実際にUMAに会ってしまった俺からすれば、早く帰ることに越したことはないぜ、なんて事を考えながら、俺は自転車を外の世界へと向けるのであった。

自転車はいつもどおり、何にもないあぜ道をガタゴトと進んでいく。なぜだろうか、部活帰りこういう薄暗い道を一人で進んでいくと、どうでもいい事がいろいろ頭をよぎっていく。

今日の練習あそこで籠手にこだわりすぎたなあ、委員長はなんで

俺にあんな指令を出したんだ？ 実は委員長は尚からの刺客だった
りして。あれで委員長けっこうノリがいい人だからなあ。

クリスマスさんは笑い方が分からないだけ、笑い方が分からない
だから表情の動きが少ないんだよなあ。もしかして感情がないから
表情が出なかったりして……なんて彼女に失礼か。

……クリスマスさんは「力」ある人間なんだよな。そういえばどうし
て彼女は「力」を持っていることを皆に言っていないんだろう。彼女
なりの事情があるのかな。けっこう前、尚にクリスマスさんはやばいか
もしれない、なんて言われたっけ。あれから尚はあんまり気にして
ないみたいだけど……、まさか本当にやばい人だったりして。

ぼおっとしながら自転車をこいでいたら、いつの間にか自転車は、
中心街に入っていた。約1年通いつめた道は、意識しなくても俺の
ことを自宅へといざなってくれる。街頭によって明るくなった道を、
いつもどおりに通って中心街から住宅街に入って行った。

住宅街の細い路地はどこどころ街頭によって不自然に明るくな
っていた。まだら模様の道を無意識に右に曲がる。右に曲がると、
一区画先に公園がある。公園には街頭がたくさんあるのだろうか、
ひとときわ明るい光が漏れていた。その公園は俺の家から一番近いの
で、小さい頃はそこでよく遊んだり、友達と待ち合わせたりしたも
のである。それにしても、公園ってあんな明るかったけ。

そんな公園をなんとなく見やりながら、俺は自転車で自宅へと急
いだ。

いや、正確には急ぎょうとした。

その瞬間、俺の全てが止まった。

順調に進んでいたはずの自転車、物理法則を無視して急に停車する。慣性の法則も、エネルギー保存の法則も無視して、空間ごと固められたかのように唐突に静止してしまった。それは俺の身体も同様である。惰性で自転車をこいでいた足はサイドブレーキをかけたかのようにピタリと停止した。意識して動かしていなかった頭も、顔も、肩も、腕も、体幹も、身体の間もかも全ての時が止まってしまった。

そうならば、当然自転車は倒れてしまうはずであった。それなのに、自転車はまるで俺がバランス芸を披露しているかのように、その二輪はしっかりと地面に垂直に立っていたのである。

明らかな異常であった。自転車が急に静止し、俺の身体の間も利かない。日常では決して体験できない出来事。当然、「平凡」な俺はパニックに陥るはずだった。そう、陥るはずだったんだ。

俺は思考さえも停止していた。いや、この「異常」のせいではない。もし本当に思考が「停止」していたのなら、現状なんて把握できない。俺は圧倒されていたんだ。自らの「異常」がどうでもいいと思ってしまうような目の前の光景に……

俺が小さい頃から慣れ親しんでいた公園。遊具はブランコが端っこに申し訳程度にあるだけという簡素な物。しかし、何も無い広い砂の大地は、小さい俺にとっては無限の可能性を秘めた遊具だった。その中心部、幼少の俺にとって「日常」だった公園の中心部には、三つの「非日常」がいた。

ひととき目を引くのが、巨大な四つ足の化け物。猿のような顔に、狸のようなずんぐりとした身体。4つの足は猛獣のように筋肉が盛

り上がっており、そこだけ不自然に虎柄であった。化け物の尾には意志があるのだろうか。鱗がついているのか時折光を反射して光るそれは、生きているかのように動いている。いろいろな生き物を合体させたかのようなその化け物は、気味の悪いとしか形容できない異様な声を上げ、自らの眼前に存在する二つの「非日常」に襲い掛かっていた。

だが、化け物の攻撃は、相対する「非日常」達には届かない。

化け物に敵対する「非日常」は人の形をしていた。小柄なほうのそれが、化け物の攻撃に対し、両手をかざす。するとどうしたことだろう、まっすぐと小柄なそれに届くはずであった化け物の攻撃は、まるでレールに乗ったかのように見当違いの場所へ放たれてしまう。公園の地面をえぐるはずであったその攻撃は、地面に対してなんの効果もしめさなかった。

化け物が無理な攻撃により、体勢を崩す。しかし、化け物はそれを隙とさせない。鋭い牙が生えた口、強靱な4つの足、そして縦横無尽に動く尻尾。全てを駆使して体勢を崩しながらも小柄な人型に攻撃を加え続ける。

それでも、その攻撃は届かない。化け物がいくら攻撃しようと、小柄な人型が手をかざすだけで、なぜかその攻撃は見当違いの方向へ向かう。そのたびに化け物は体勢を崩し、ついには倒れてしまった。

その瞬間、後方で待機していた大きい方の人型が前に出る。

そして世界は光に包まれた。

まぶしくて目がくらんでしまう。反射的に目を閉じようとしたが、身体が動かないので、それもかなわない。薄く、影のようになった世界の中で、光を纏った棒のような物を持った何かが、巨大な何かを殴ろうとしていた。

「ヒヨオオオオ！」

何かが叫び声をあげている。光を纏った棒で殴られた何かから、物体がはじけ飛んでいた。巨大な何かと、輝く何かの戦いは続く。

あの人型は人なのだろうか。巨大な化け物と相対して互角以上に戦っている。あれがたとえ人だとしても、俺と同じ存在だとはとても思えなかった。「平凡」な俺では決してあのような「力」は発揮できない。きっと彼らは「特別」に違いない。「平凡」、「特別」。ああ、そういえば少し前に同じようなことを思い知らされた気がする。

あなたに、ちからはないのでですか？

俺は思考も停止して、ただただ目の前の映像を映し続ける機械になっっていた。そんな中、突然何かから声をかけられる。

「君、大丈夫？」

その瞬間、俺の身体と自転車の拘束は解け、停止していた思考も、活動を再開するのであった。

4月29日その5 非日常な出来事（後書き）

総体は1回戦で負けました。

ちなみに作者はラグビーやってます。

今年は期待してたのですが……残念です。

総体は終わりましたが、引き続いてテスト、文化祭があるので、更新は遅れると思います。

4月29日その6 特別な出来事

「君、大丈夫？」

「のわぁ！」

唐突に身体が自由になり、自転車が横倒しになる。それにまたがつていた俺も、横倒しになってしまふ。反射的に頭だけはかばえたが、身体を強く地面に打ち、自転車の下敷きになってしまった。鈍い痛みが全身を走る。それでも重傷を負ったなんてことはなさそうだった。

「あ、ごめん。大丈夫？」

もう一度、何かから声をかけられる。その何かは人間だった。長い髪をポニーテールにしてまとめたスーツ姿の女性。その人が心配そうな表情を浮かべながら、俺の上から自転車をどかして、手を差し出してくる。その手はやはり、というべきか、女性らしい細くて白い手だった。何かその手をつかむのが恥ずかしかった俺は、彼女の手は借りずに自分で起き上がる。

「大丈夫です、平気です」

起き上がった俺に話しかけてこようとする彼女をさえぎって、先に言葉を放つ。俺の言葉を聞くと、目の前の女性は俺のことを頭先から足の先まで観察するようにじっと見つめてきた。微妙にどぎまぎしていた俺であったが、女性の表情がきりっとした感じに変わるのを見て姿勢を正す。

「小山市、対UMA特別対策課です。この先で、対UMAの作戦活動を行っているので、この区画は迂回して進んでください」

予想していたことであったが、やはりこの女性は退魔課の人間だそうだと、いう事は公園で戦っていた二人の人は、退魔課の人間なのだろう。俺の身体が「停止」したのも、道を封鎖するために誰かが「力」を使ったに違いない。

対UMA特別対策課。その名の通り、国の防衛省の管轄の下、各

市町村が運営するUMAに対する対策を執り行う組織。UMA被害や、能力者の管理も執り行っているそうだ。もつとも、ほとんどの人間は長い正式名称など呼ばず、「対」U「MA」から退魔ともじって退魔課、と呼んでいる。

「分かりました。……あの、どうして普通に封鎖してないんですか？」

別にこの道を迂回するのはどういう事ではない。だけれども、わざわざ「力」を使って道を封鎖したのかが気になって、女性に尋ねてしまう。別に道を封鎖するなら、コーンでも何でも置いて、人を配置すればいいじゃないか。それなら別に、俺は転ぶ必要はなかったはずだ。

俺の、少し慥然とした空気を感じ取ったのだろうか、女性はりりしい表情を、申し訳なさそうに変えて、答え始めた。

「すいません。人の配置が間に合わなかったもので……」

そう言いながらも、彼女はぶつぶつと、遅いのよ、とか文句言われちゃったじゃない、とか、早く行けよこのガキ、とかつぶやいていたのは、俺の心にしまっておこう。世の中、気にしないほうがいいことはたくさんある。なんか気まづくなった俺は、女性から自転車を受け取ると、出来るだけすばやくそれにまたがるのであった。

最後に何気なく公園の方に視線を向ける。そこではやはり、光を纏った人型が、巨大な化け物と熾烈な戦いを繰り広げていた。輝く人型が、光輝く何かで巨大な化け物を切りつけようとする。ちょうどその時、女性から急かされ、俺は自転車を公園とは反対方向へ向けるのであった。

「なんだかなあ」

今の自分の気持ちを表すならそんな感じだろう。UMAと退魔課との戦い、という普通では決して見ることが出来ない「イベント」を見た俺。間違いなく気分は高揚して、このことを誰かに話したくてうきうきしている。それは、ペダルをこぐ足が、どうも地に着かない感じがすることが証明してくれている。

だが、どうにもやりきれない感じがすることも確かなのだ。この世の物とは思えないUMAと互角以上に戦っていた退魔課の人々。道を封鎖していた「力」。全て俺と同じ「人間」の仕業だ。しかし俺にはそんな真似は出来ない。「平凡」な高校生である俺にはせいぜい逃げるくらいしか出来ないのである。

同じ人間なのに、どうしてこうまで差があるのか。俺にはない「力」を持つ人々。その、「力」というたった一つの違いが「平凡」な俺と、「特別」な彼らという絶対的な壁を作り出している。俺にも「力」があれば「特別」になれるのに……

クリスさんや、あの退魔課の人間達のような「力」を得た俺。俺はその「力」をふるいUMAたちを次々と消滅させていく。そんな中での美しいヒロインとの恋愛。そして俺はUMA発生の原因を突き止め、世界を救う。

俺は自宅に迂回して進みながら、そんなくだらない、子供が考えるような妄想をしていた。

だがもし、もしもその妄想が実現したとき、果たして俺は「特別」になっているのだろうか。

そして、俺は自転車を停めたんだ。

退魔課の女性に促されて俺がとった迂回路。それは少し遠回りする程度で、別に何が変わったというわけでもない。いつもの帰り道とほとんど変わらない路地。その路地の中央に、街頭に照らされてたたずむ「何か」がいた。

俺はどうして自転車を停めたのだろうか。その「何か」は人と同じ姿をしている。身長は150センチくらい、黒ずんだ色の肌をしていた。手足は細いのに、腹が異常に出ているのが気になったが、遠目から見れば「普通」の人間に見えなくもない。普通の人間なら通り過ぎればいいじゃないか。

それでも俺は自転車を停めた。当たり前じゃないか。その「何か」は、粗末な腰巻を身に着け、細い腕に似合わない、丸太のように太いこん棒を持って、こちらをにらみつけていたんだから。

4月29日その6 特別な出来事（後書き）

4月29日も長いですが、もうすぐ終わります。

4月29日その7 「平凡」と「特別」その1

こん棒を持った何かは、細い腕でそれを引きずりながらゆっくりとこちらに近づいてくる。木でできたと思われるこん棒を地面に引きずっているのに、何も音がしない。それがかえって不気味であり、そしてそれが何かの正体を表していた。……UMAは非生命体に干渉できない。あのUMAがこん棒を持っているのは、それが奴の身体の一部のような物だからだろう。

自転車にまたがりながら、俺はそんな分析をしていた。自分でも不思議なくらいに冷静だった。もう、UMAを見るのは3度目だからだろうか。俺には、今度の奴は今までの2匹と違って弱そうだなあ、なんて考える余裕もあったんだ。

「アアー」

正面のUMAは膨れ上がった腹を揺らし、かすれた、声にならない叫びを上げながらゆっくりと近づいてくる。最初、街頭3つ分は離れていたUMAとの距離は、もう街頭1つをはさむだけになっていた。

それでも俺は冷静だった。あのUMAは見る限り足は速そうでない。自転車で逃げれば余裕で逃げられる。俺はさっきよりもはつきりと見えるようになったUMAの気味悪い姿を尻目に、自転車を反対方向へ向けたんだ。

「アアー……」

UMAの叫びがあったという間に小さくなっていく。俺は自転車を冷静に、しかし出来るだけ急いで加速させて、先ほど退魔課の女性に促されてたどってきた道を後戻りし始めた。特に意識しなくてもたどれる道筋である。そうしながら俺は叫び声を上げる。

「UMAが居るぞー！」

公園までたどり着ければ退魔課の人たちがいる。あのUMAを倒していたとしても、まだ近くにはいるだろう。もしかしたら、俺の

声を聞いた近所の人が通報してくれるかもしれない。俺はそんな計算のもと、路地を公園に向かって順調に進んでいた。UMAの声は聞こえないから、かなり引き離れたのだろう。少し安心した俺が、スピードを緩め、路地を曲がったその時だった。

それじゃ、つまらないじゃないか。

誰かの声が聞こえた気がする。気がつく俺は自転車を停めた体勢で、UMAとであったあの路地にいた。そして俺の前方、街頭3つは離れたところ。そこにこん棒を持った、手足が細いのに腹が異常に膨らんでいるUMAがたたずんでいたんだ。

「おい……嘘だろ」

思考が一気に混乱する。なんだ。どうしてだ。何が起こったんだ。なぜ自転車は止まっている？俺は確かに住宅街を公園に向かって進んでいた。どこをどう間違ってもこの路地に戻ってくるはずはな

い。16年ここに住んでいるんだ。道を間違えるなんてありえない。だいたいどうして奴は俺の前にいるんだ。俺のことを追っていたはずのUMAがどうしていきなり正面に現れる？

「アーアー」

「あ……うわあ！」

前方のUMAは再び かすれた声を上げながら、無音で近づいてくる。それを見た俺は今度はすぐに自転車を反転させる。そしてもう一度、なりふり構わず全力で公園に向かった。今度は、叫び声なんて上げなかった。いや、そんな余裕なんてなかった。

ペダルを必死に踏み込んで速度を上げる。体中から急に汗が吹き出てきた。街頭で照らされている路地には、誰もいなかった。シンシュンという自転車のタイヤが回る音だけが路地に響く。自転車のスピードは限界まで出ているはずなのに、まだ足りない気がした。胸がもやもやする。もっと、もっと、もっと。

身体の限界を超えて求め続ける心が焦燥感を生み出す。さっきは冷静に進んでいた道を、がみしゃらに進み続ける。どんなに混乱していても、公園に向かっていている自転車を、ありがたいと思った。それなのに。

今度はどこの角を曲がったときなのだろうか。気がつく俺は再びUMAと出会ったあの路地に、自転車を停めた体勢でいたんだ。

「アーアー」

当然のように、前方にはUMAがいた。さっきと同じ、街頭3つ分の距離を保ってたはずんでいる。これでもう3度目。もう見たくなかった光景が目の前に広がっている。

どうして。なんで。何でここに戻ってきている。どうして自転車は止まっている。どうして俺の身体は汗だくなんだ。なんで、どうして、何が悪いんだ。俺が何をしたらっていうんだ！

自転車を降りてみたらいどうだい？

……自転車。そう自転車だ。自転車に乗っているのが悪いんだ。走って逃げれば大丈夫だ。あのときだってそうだったじゃないか。自転車に乗っているところがない。自分の足で走らなくては。俺はすばやく自転車を降りると、近づいてきたUMAに背を向ける。そして全速力で駆け出そうとした。でも背中の木刀が邪魔で上手く走れない。……背中の木刀が邪魔だ。こんな物は捨てて……

武器は必要だろ？

……そうだ。武器がないといけない。武器がなくてはだめなんだ。どうしてだろう。UMAにそんな物^{ばくとう}なんて効果がないと分かっていたのに。俺は走りながら木刀を竹刀入れから取り出し、竹刀入れを捨てる。そうすると右手に木刀を握り、走るスピードのギアをまた一段、上げたのであった。

「はあ、はあ、はあ」

さっきまで全力で自転車をこいでいたせいもあるのだろう。案外早く呼吸は乱れてきてしまう。それでも、俺は伊達に剣道部で鍛えられていたわけではない。気合でそれを押さえつけ、さらに走るスピードを上げる。もう少し。もう少しで公園までたどりつける。身体が酸素を求めているが、あと少しなんだ。それくらいだったら我慢できる。

だから、それじゃあだめなんだよ。

誰かの声が聞こえた気がする。これで何度目だろう、なんて思ったのはどうしてだろうか。俺は気がつく、またあの路地にいて、前方、街頭3つはさんだところにはUMAがいた。

「ああああ!!」

もう、いい加減にしてくれ! 気が狂いそうだった。これまでの出来事は全て夢で、これからが現実なんじゃないか、なんて思ってしまう。いや、思いたかった。でも、道に転がった自転車に右手に握った木刀、荒い呼吸と、全身を襲う疲労感。それらが今まで起きた出来事が現実であるといやでも証明していた。

最後に残った欠片のような理性で現状を分析する。いくら逃げてもここに戻ってきてしまう。理屈は分からないが、何かしらの「力」が働いているのは確かだった。でも俺には何も出来ない。「力」の原因がUMAだとしても人だとしても「平凡」な俺には何も出来ない。無意識に両手に力をこめると、右手の木刀が自己主張してきて、それが逆におかしかった。

君は、本当に、何も出来ないのかい？

そうだ。俺は何も出来ない。何も出来ない「平凡」な人間だ。だからこんな「特別」な出来事に何か出来るわけないんだ。クリスさ

んのようにUMAを圧倒することなんて出来ない。前方のUMAが、ゆっくりと、本当にゆっくりと近づいてくる。奴はちょうど、3つ目の街頭の光から出たところだ。

「平凡」なら、何も出来ないのかい？

そうだ。田島勇人という「平凡」な人間は何も出来ないんだ。たとえ俺に剣道の心得があっても、目の前のUMAがいくら弱そうでも「平凡」である限り俺は何も出来ない。「特別」にならなくては、何も出来ないんだ。公園にいた、「輝く人」のように「特別」にはなれないんだ。正面のUMAがひたひたと近づいてくる。奴はたった今、2つめの街頭の光に影を落としだした。

「力」があるのは「特別」なのかい？ 君が言う「特別」は「力」があることなのかい？

……。 「力」があることは特別なのか？ 「平凡」な人間がある日突然「力」を得る世界。「平凡」な人間でも「力」を手に入られるのなら、「平凡」な人間でも、何かが出来ると言うんなら。「特別」ってそういうことじゃなくて……

公園で見た、光り輝く人型の「力」が頭にちらつく。彼は光り輝く棒を持って、UMAと戦っていた。……俺の手には木刀がある。

そう、君は気がついていないはずだ。

UMAはもう、目の前に来ていた。俺は「輝く人」のように世界は光で染められない。そんなことは俺の「力」を超えている。だけど……

無意識のうちに強く握った手が、木刀の存在を俺に強く主張してきていた。……この「棒」を光に包むくらいなら……

目の前のUMAがその手に持つこん棒をゆっくりと振り上げる。その瞬間、それに殴り飛ばされる自分が頭に浮かぶ。だけど、それを振り払うように俺は木刀を両手で握って……

「力」を得たいなら、望むがいい！ 少年よ！

「平凡」だって、何か出来るはずなんだ！

そして俺の世界は光に包まれた。

4月29日その7 「平凡」と「特別」その1（後書き）

かなり大変でした。

一応、これで完成ですが、重要な話ですので、これからも色々と修正していくと思います。

4月29日その8 深夜の出来事（前書き）

更新が遅れてすいません。

4月29日その8 深夜の出来事

ぼくのゆめはたいまかにはいつて、せかいをすくうことです。

あさひようちえん ばらぐみ たじま ゆうと

「あ……れ？」

意識が覚醒すると、俺はどこか知らない場所にいた。どうにも頭が重くてぼおっとする。俺はベッドに寝かせられていて、目線の先には、しみが多い天井があった。鼻をつくような消毒液のにおいがある。ゆつくりと身体を起こして、周囲の様子を確認しようとした。だが、ベッドの周りは少し黄ばんだ白いカーテンで覆われていて、周りの様子が分からない。

そのまましばらく呆けていた俺だったが、だんだん頭が回ってくる。どうやら、ここは病院のようだ。よく、分からないがUMAからは助かったみたいだ。現状は把握できたが、誰もいないので不安になっていると、足音とともに、声が近づいてきた。

「……と言うことですので」

「分かりました。色々とすいません」

「息子がご迷惑をかけました」

いえいえ、なんて声が聞こえると同時に、耳障りな音をたてて、カーテンが開いた。病室の大部屋。カーテンの向こうには、俺の両親と、恰幅のいいおじさんが立っていた。

「ああ、目が覚めたのか」

俺が目をさましていると確認すると同時に、父さんが声をかけてくる。母さんも、大丈夫だったかとか、色々声をかけてきた。後ろの恰幅のいいおじさんが、医者を呼びに行きますね、なんて言って、

いなくなってから、俺は両親に現状の確認をとるのであった。

「俺、どうなったんだ？」

「ああ、あんた「力」に目覚めたんだと」

「は？」

母さんが言うには、近くで警戒活動をしていた退魔課の人がUMAに襲われている俺を発見したそうだ。それで助けようとしたら、俺が突然木刀に光を纏わせてUMAを消滅させたいらしい。俺はそのまま気絶してしまったので、救急車で病院に搬送された、ということだそう。

「それであのおじさんは退魔課の人だって。あんたに話があるみたいよ」

俺自身にはまったく自覚がないのだが、どうやら俺は「力」を手に入れたらしい。UMAに襲われていた時の記憶は、最初を除けばほとんど曖昧なのだが。「力」を手に入れると、世界が一変する、とかテレビでやっていたので拍子抜けである。まあでも、実際に体験するとこんなもんかもしれない。

どうにも雲をつかむような感覚の中、両親としばらく俺の「力」について話していると、退魔課のおじさんが、医者連れてやってきた。医者はいくつか俺に質問をすると、おじさんに会釈してすぐ帰ってしまった。

「それじゃあ、田島勇人君、だよ。僕は退魔課の吉田です」

おじさんに名刺を渡され、彼が柔らかい表情で話を始めると、両親も彼に会釈して大部屋の外に出て行ってしまった。それをなんとなく目で追ってしまう俺だったが、おじさんが話を続けるので俺も彼と目を合わせた。

「君は「力」に目覚めた、というわけだけど……それ以前から「力」に目覚めていたわけじゃないよね」

もちろんそんなことは無い。俺は今までに一度だって「力」を発現させたことはなかった。これからもそうだと思っていたのだが、どうやら違ったようだ。俺がおじさんの問いを否定するのを見て、

彼は笑みを浮かべたまま話を続ける。

「それじゃあ、君は自分の「力」がどんなものか分かるかい？」

残念ながら分からない。実際のところ、俺が「力」を手に入れたことすら俺にとっては曖昧なところなのである。それなのに、お前の「力」はなんだ、なんて言われても困ってしまう。彼は俺の答えを聞くと、2、3度頷いてまた口を開く。

「だったら君の「力」の確認をしなくてはいけないね……」

「確認、ですか」

「うん、えーとこの書類の上の方、緑の枠で囲まれたところに記入してくれるかな？」

おじさんはベッド備え付けの机にボールペンと紙を置く。渡された書類には、異能力者登録申請書、と一番上に書いてあった。少し目線を下にやると、登録者情報と緑の枠で囲まれたところがあった。ここに書けばいいんだな。俺はボールペンを手に取ると、書類に指定されたとおりに住所、氏名、職業などを書いていった。

「うん、ちょっと貸してくれるかな……これでよしと。ええと、

後日君の家に「力」の登録に関する手紙がいくと思うから」

おじさんは俺から書類を渡されると、ボールペンで何やら書類に書き込んでいく。それが終わると彼はにっこりと笑いながらそういったのであった。何か、軽い感じだがこれでいいのだろうか。俺が曖昧なまま頷くと、おじさんはそれじゃ、なんていって病室の外に出て行くとする。

でも彼は思い出したように戻ってくると、笑顔のまま、

「まだ正式に登録してないから、君が「力」を使うと犯罪になっちゃうよ、気をつけてね」

なんて恐ろしいことを口にしたのだった。……俺まだ自分の「力」の発動方法すら知らないんですけど。暴発とかしたらどうなるんですか。そんな俺の心の叫びを知ってか知らずか、おじさんは笑顔のまま病室を出て行ってしまった。本当にこれでもいいのかなあ。

「疲れたなあ……」

深夜遅く、自室のベッドでうつぶせになって思わずそんなことをつぶやいた。あれからすぐ、特に身体に異常はなかった俺は父さんの車で自宅に帰った。自転車は退魔課の人が運んでおいてくれたらしい。あとでお礼言いなさいよ、と母さんがとてもうるさかった。ともかく、慌しく自宅に帰った俺は、慌しく夕食をとり、風呂に入り、学校の準備をしてやっと、横になれたのであった。

「〔力〕、か……」

仰向けになって天井に手を伸ばす。就寝灯しかついていない部屋は薄暗い。黒く塗りつぶされた自分の手は、何か変わったようには思えなかった。俺は〔力〕を手に入れたんだよな。なぜかどうしようもなく不安になってしまう。実はこれまでの出来事が全て夢だった、とかドッキリだった、とかしょうも無いことが頭に浮かぶ。

「〔力〕よ、目覚めろ……なんて」

馬鹿だと思っけていてもやっぱりつぶやいてしまう。言葉にしても、頭で念じてても、何も、本当に何の変化も起きなかった。そのまま手を伸ばし続ける。そうしていると、それまで出会った「非日常」な出来事が頭をよぎった。

春休み、鬼の姿をしたUMAに襲われたこと。あの時は本当に死ぬかと思った。でもクリスさんに助けられたんだよな。あの、「天使」の姿は本当に綺麗だった。その後倒れたままだった俺に、ちらはないのですか、なんて聞かれてびっくりしたけど。

——でも、俺は〔力〕を手に入れた。もう、倒れているだけじゃない。

今日、退魔課の人たちの活動を目撃したこと。あの二人は本当にすごかった。身の丈を超える化け物を相手に一歩も引かずに戦っていたんだから。それに周囲を光で包むあの〔力〕。あんな〔力〕を持っているなんてどんな人間なのだろうか。あの時は本当に圧倒さ

れて、見ていることしか出来なかったな。

——でも、俺は「力」を手に入れた。もう、見ているだけじゃない。今日、UMAに襲われたこと。その時、俺に「力」が目覚めた、らしい。実際あの時は気が動転して途中から何がなんだか分からなくなっちゃったけど。しっかりと覚えているのは、自転車で叫びながら公園に逃げたところくらいまでかな。その後は……まあ、いいか。

——なぜなら、俺には「力」があるから。もう、逃げているだけじゃない。

さっきまでは自分の「力」なんて信じられなかったのに。どうしてだろう、こうして「非日常」な出来事を思い浮かべていると、自分に「力」があると強く信じることができた。天井に伸ばしたままの手を強く握り締める。握り締めたこぶしは、とても力強いものに感じられた。

手を下ろして横になる。上に伸ばし続けた手は、血が通わなくなっ
て冷たかった。しばらく、目をとじたまま横になる。そうしてい
ると、高校での自分の姿が頭をよぎっていく。

成績は真ん中ぐらい。運動も飛びぬけて出来るわけではない。部
活は人並みに以上に頑張っていると思うが、それは帝王の存在が大
きいからだろう。クラスでは変人で通っているらしいが、それだっ
て別に何がすごいというわけでもない。クリスさんの後見人だって、
彼女に頼まれなければやろうだなんて思わなかった。

——つまりは、つまりは結局のところ、「力」があっても俺は……

どうしてか、それ以上考えるのがどうしようもなく怖くなった。

俺は布団を頭までかぶると、そのまま丸くなって眠りについたのであった。

4月29日その8 深夜の出来事（後書き）

やっと、テストが終わりました。これから、修正を加えつつこれまで通りに更新できそうです。
あとあらずじ修正しました。

幕間 誰かの日記帳その2（前書き）

更新が遅れてすいません。

幕間です。

前回の幕間よりもさらに意味不明かもしれませんが、読んでいただけると嬉しいです。

幕間 誰かの日記帳その2

果たしてこれまで私は、彼にとってよい親であったのだろうか。

その子は、私にとって初めての子だった。当時、まだ若かった私は、自分に子供ができたという事実に歓喜し、舞い上がっていた。末は博士か大臣か、なんて言葉があるけれども、私は子供が生まれる前から、この子は将来どんな偉人になるのだろうかなんて夢想したものだった。

今思えば、とても馬鹿らしい話だと思う。だけど、当時の自分は本気で、自分の子供は才能に溢れている、なんて信じていた。いや、そう望んでいたのだろう。

子供ができたとわかってからすぐ、その子の名前を決めることにした。まだ、男の子か女の子か分からなかったから、夫と共に男の子のときの名前と女の子のときの名前を考えた。その時も私は、自分の子供にふさわしい「特別」な名前を、と育児雑誌や命名辞典をあさるように読んでひねり出した名前をその子につけようとした。だけれども、その名前は両親や夫の反対にあって、結局男の子だったその子は、「勇人」というその時の自分からすればつまらない名前を命名されたのであった。

本当にそのときはどうかしていたのだと思う。当時の私は、なぜ両親や夫がその名前を息子につけるのを反対したのか分からなかった。しかし、今思えば私はなんて名前を息子につけようとしたのか。恥ずかしすぎてもう思い出せないその名前は、今では自分の自己満足の塊だったとはつきりと認識できる。

私は、息子に「特別」になって欲しかったのだ。

息子が誕生した。体重は3456グラム、身長は52センチ。どこにも問題はないとても元気な赤ちゃんであった。

勇人が誕生してからも、私は育児雑誌を読みあさった。読むページは姓名判断の特集から、いわゆる「天才キッズ」の特集に変わっていたが。「天才キッズの育て方」なんて特集は、ひそかにバイナダーにまとめて、事あることに読みふけていた。

私は、勇人が何か出来るようになるたびに、それがほかの子と比べてどうなのかを確認した。はいはいが出来るのは平均より早かった。言葉をしゃべるのは平均より少し遅い。なんて比べても仕方がないことを比べて、そのたびに一喜一憂した。

そして、勇人をベビーカーにのせて、近所のお母さんたちと自分の子供について話す。そのときは表面上では彼女たちの子供をたたえる一方で、心の中では勇人の方がもっとすごいんだから、なんて歪んだ優越感に浸っていた。

勇人は「特別」なんだ。今はまだ小さいから皆には分からないけれど、きっとそのうち、何かすごい才能を発揮するに違いない。私はそう信じていた。それが息子を信じる心からきた思いではなく、自分の望みを押し付けただけの醜い自己満足の塊であった事に気がついていなかった私。なんて愚かだったのだろう。

私は勇人が「特別」であって欲しかったのだ。

勇人が幼稚園に入った。幼稚園では色々な習い事を行っていた。体操教室にピアノ教室、絵画教室や水泳教室等。今ではあまり思い出せないが、世間で言う習い事は一通りそろっていたと思う。

でも私は勇人を習い事には入れなかった。本当に勇人に「特別」になって欲しくて、私もそう望んでいたのなら習い事に入れるべきだったのであろう。だが当時の私は、習い事に入れることで、勇人が「特別」ではなくなくなってしまいうような、そんなよく分からない不

安にかられていた。

つまり、私は恐れていたのだ。勇人が周囲の人間によって「平凡」という絶対の刻印を押されてしまうのを。

そして私は忘れていた。たとえ勇人が「平凡」であっても、私にとっては大切な、「特別」な息子であるということ。

勇人が小学生になった。初めてのテストでは100点を取った。私はそれに喜んで、勇人を褒めちぎったものである。それから勇人は、テストのたびにその、丸しかない答案を嬉しそうに私に見せるようになった。

運動会があった。徒競走では2番だった。持久走では17番だった。私は勇人のことをすごい足が速いね、なんて褒めちぎった。

私は勇人のことを褒めるたびに優越感に浸っていた。自分の息子は「特別」なんだ。「平凡」な自分でも、こんな「特別」な子供が生めるんだ。私は勇人のためというより、自分自身のために彼のことを褒めていたのだろう。

私は勇人は「特別」でなくてはいけないと願っていた。それが自分自身の醜い自己満足で、自分の子より下の子を見下すことでしか得られない「特別」であったとしても。

勇人が小学生4年になってしばらくしてだろうか、彼は突然テストを見せなくなった。彼にテストを見せるように言っても、見せてくれなくなった。あるとき、私はランドセルからはみ出した彼のテストを見てしまった。……95点だった。

私は勇人に95点のテストを見せて、すごいじゃないと褒めちぎった。でも、勇人はちっとも嬉しそうに感じていない様子で、友達とは100点だと告げたのだ。

私はショックだった。勇人がテストで95点だったことではなく、彼が友達と比較して自分が「平凡」であると認識し始めていることが衝撃だった。本来なら、それは成長しているといえるのだろう。自分の力量を正確に把握し始めたのだから。しかし、その時の私にとってはそれまでの自分を否定したかのような衝撃だったのである。私は激怒した。勇人にとって、私があんなに怒ったのは初めてだったと思う。私は自分が「平凡」と自覚し始めている勇人に、これまでの自分が、「平凡」な自分が映し出され始めているのを見て怒っていた。勇人は自分がなぜ怒られたのかよく分かっていなかったはずだ。彼から見たら、私は意味不明な言葉をわめきながら怒っていたのだから。

それでも、勇人は謝ってきた。お母さんごめんなさい、なんて泣きべそをかきながら必死で謝ってきたのだ。彼は何で怒られたのか分かっていないだろうに。それでも自分のために、自分のためだけに勇人は必死で謝ってきてくれたていた。

それを見て私は悟った。いかにそれまでの自分が愚かだったか、と。そして申し訳なく思った。これまで歪んだ愛情で育ててしまつてごめんなさい、と。最後に感謝した。こんなお母さんでも、お母さんのことを愛してくれてありがとう、と。

それからの私は変わった。私は勇人に私の「特別」を押し付けるのではなく、勇人の好きなように、満足するように生きてくれればいいと願った。考えてみれば、それを願うのは親として当然だったのだが、未熟な私は勇人に気がつかされるまでそんなことも分からなかった。

それから勇人はすぐに大きくなった。大きくなるにつれて、変な

発言や、行動も増えたけれども私は彼の好きなようにさせた。大きくなるにつれて勇人は自分が「平凡」であると強く思い始めたみたいだけれども、私は何も言わなかった。

なぜなら、「平凡」だって何か為すことが出来るから。「平凡」な私が生んだ子供が、ちよつと変だけれども、優しい子供に育ってくれたように。勇人には、自分でそれに気がついて欲しかった。

それでも、「平凡」でもいいと思っても、人は「特別」を求めてしまうのだろう。

勇人が高校2年になった春。4月ももうすぐ終わりとなるその日。勇人がUMAに襲われて、「力」に目覚めたという電話を受けた私はその電話に、驚きの感情よりも、遠い昔に感じたあの「黒い」歓喜を感じてしまった。

「平凡」だと強く自覚し、「特別」を自分の子供に求めた自分。「平凡」だと強く自覚し、自分は「特別」になれないとあきらめていた息子。

私は、いや私たちは「平凡」と「特別」という呪縛から逃れられないのかもしれない。「力」という「特別」へのきっかけを手に入れた勇人。

勇人、どうか許してください。「特別」になることがどんなにか苦しいことだと知っている私ですが、あなたがどんなに苦しくても、あなたに「特別」になって欲しいお母さんのことを。

幕間 誰かの日記帳その2（後書き）

かなり難しかったです。これ以上は今の状況では無理でした。ですので、修正を加えるかもしれません。

文化祭が今週末にあるので、準備が佳境に入ってきました。です。更新が遅れるかもしれませんがご理解いただけると嬉しいです。

5月3日その1 言論の戦争・開戦（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

5月3日その1 言論の戦争・開戦

俺は「力」に目覚めた。つまり、俺には「力」があったんだ。それなら、どうしてそれまで俺は「力」に目覚めなかったのだろう。

……俺はどこか変わったのだろうか。

黄金週間。いわゆるゴールデンウィークとか言う休みが続く1週間。世間では行楽地に遊びにいたり、ゆつくりと自宅で休養したりするらしい。しかし、小山原高校の恐怖の剣道部に所属している俺にとっては、地獄の1週間でしかない。ただでさえたくさん宿題が出るのに、午前中いっぱい帝王と一緒に剣道漬けである。本当にいやになってしまう。

連休前の最後の月曜日。次の日からは祝日やら振り替え休日やらで6日間学校は休みである。どうせなら月曜日も休みにしてくれよ、とか思いながら、でもそれだとさらに地獄が長くなることに気がついてげんなりする。俺は朝から重いペダルをだらだらとこいで学校に向かったのであった。

「おはよー」

「ん？ ああ、おはよー」

登校時間まであと約40分。かなり早くついた教室には、もう向かいがいた。まだ、他の生徒は来ていないのに、奴は自分の机に向かって勉強をしていたみたいだ。朝からご苦労なことである。それと同時に、何優等生ぶってるんだ、なんて理不尽なことを思ってしまう

俺。他の生徒ならこんなことは思わないだろう。やはり、尚だからこんなことを思ってしまうに違いない。俺は少し笑みを浮かべながら、ヘラヘラと奴に話しかけるのであった。

「何勉強してるんだよ。中間はまだだろ」

「あ、これ連休中の課題だから」

「マジかよ!」

なんと、奴はまだ配られてもいなかった課題をやっていたのか。くそ、どんな裏技を使いやがったんだ。うらやましすぎるぜ! 思わず尚の机をつかんで、悔しがってしまう俺だった。

すると奴は俺の思いを感じ取ったのか、いかようにして秘宝かだいを手したのか俺に自慢げに語るのであった。

「実はな、今日俺は朝7時に学校に着いたんだ」

「早すぎだろ……。何がしたかったんだよ」

7時といえば、登校時間まであと1時間半はある。本当に奴は何がしたかったんだ? そこまで思って、すぐに奴は変人だったことに気がついた。この際、奴と同じくかなり早く学校に来ている俺のことは置いておこう。奴は、俺の突っ込みに耳を貸さず、一人納得していた俺を置いて話を続ける。

「んで、校門に入ったらほそちゃんがいたわけ」

「それで少し話をしたら、課題やってきますかなんて言われて、もらっちゃったのですよ!」

「じゃあさ、俺も今ほそちゃんのところ行けばもらえるかね?」

奴の話を聞いて、俺はすぐそう思った。尚がもらえて俺がもらえない道理は無い。どうせ朝のホームルームでももらえるだろうが、それまでに少しでも課題を進めときたいじゃないか。

尚は、もらった課題はほそちゃんの担当の数学だけだと付け加えたが、特に何も言わずに職員室へと向かう俺を見送る。だが、俺が教室を出る直前に奴は思い出したかのようにこう言い放ったのであった。

「あ、ほそちゃんと話してたら、帝王が学校入ってたぞ」

それを聞いた俺は、すぐに無言で職員室に向かおうとしていた身体を反転させる。くそ、なんで帝王も早く学校来てるんだよ。何か先週もほそちゃんと話したら帝王が来たよな。実はあいつほそちゃんが好きなんじゃないのか？

帝王を目の前にしては絶対言えないようなことを考える俺。にやにやと笑う尚を無視しながら、俺は尚の後ろの席を拝借する。

「あゝれゝ？ 戻ってきちゃったんだ？」

わざとらしく尚は話しかけてくる。さては、奴は最初からこうなることを分かっていたな。

……謀られた！ か弱い剣道部員こわつじの思いを踏みにじられたことに対して、俺は憤りを憶える。でも、いつも奴とはこんな感じなので、すぐに二人で世間話を始めるのであった。

「なあ、勇人知ってるか？ 先週の水曜日ニュースでに市内でU M Aが出た、ってやってたじゃないか。ネットで流れてただけど、あれお前んちの近くらしいぞ」

「え？ あ、そうなの」

突然、俺は奴から思いもしなかった話題をふられてビックリしてしまう。奴は、俺にU M Aを見なかったかとか色々聞いてくる。それを適当にあしらっていた俺だが、心中穏やかではなかった。

水曜日というと、あの時のU M Aだろうか。多分、俺が倒した奴じゃなくて退魔課の人が倒したU M Aのことだと思う。そう、つい4日前に俺は「力」に目覚めたのである。まあ、自覚がわいても実感はわいてこないが。

そういえば、土曜日に退魔課から手紙が届いたんだっけ。仮登録何とか……みたいな書類だったよな。本登録は後日連絡が来るんだっけ。なんというか、「力」に関することでもお役所って仕事が遅いよな……

「おい、聞いてんの？」

尚は、俺が奴の話を全然聞いていないことに気がついたのか、少し無然とした表情で話しかけてくる。それに気がついた俺は、すぐ

に謝って尚と話を続けるのであった。

「皆さん、今日は生徒会選挙の公示があります」

教室に入ってくるなり、ほそちゃんは柔らかい表情でそう告げた。ああ、ついにこの日が来てしまったか。覚悟をしていたことであったが、実際にこういわれると何かしり込みしてしまう。クリスさんと委員長の「特訓」は、先週いっぱい行われた。だが、俺の精神力の消耗にもかかわらず、やはりというかクリスさんは今日も無表情で俺の隣に座っている。

こんなんで選挙は大丈夫なんだろうか。クリスさんの後見人になった以上、彼女には生徒会長になってほしい俺であったが、彼女の様子を見ると、とても不安に感じてしまうのであった。

列の前からほそちゃんが回したプリントがやってくる。A4のプリントには、生徒会選挙の立候補者と、その後見人が書いてあった。

平成20年度小山原高校前期生徒会選挙公示

生徒会長候補（定数1）

2-4 クリス・ジェファースン 後見人2-4 田島 勇人

2-7 杉山 陽介 後見人2-7 吉田 恭平

副会長候補（定数2）

2-2 篠原 智美 後見人2-2 木島 愛子

書記候補（定数3）

2-4 石川 健二 後見人2-4 小林 尚

選挙運動期間は5月3日から、5月17日までの2週間。投票日は5月18日とする。

なお、定数に満たない副会長と、書記については信任投票とし、生徒会長に当選した者が一般生徒の中から定数を満たすよう指名することとする。

「何で会長が出てるんだよ……」

プリントを見た最初の感想がそれだった。クリスさんに立候補を薦めという、どうして自分で立候補しているのか。まったく、ふざけているとしか思えない。もしや、これは会長からの挑戦か？ ふふ……どうやら奴は俺を本気にさせてしまったようだ。面識はないが、その得意げな顔が驚愕に歪む時をぶるぶる震えながら見ているがいい！

「ねえ、田島君。小林君が後見人になってるよ」

プリントを見ながら一人不敵に笑っていた俺。明らかに気持ち悪いと思うのだが、優しい委員長はそんなことは気にせず話しかけてくれる。見てみる、前の染谷さんなんか、さっきから首が決してここに動こうとしてないぞ。

「ああ、どうでもいいけどな。信任投票だし」

委員長に密かに敬意を払いながら彼女の問いに答える。尚が健二の後見人になるのは、奴らしくはないとは思ったが、特に驚くべきことではなかった。健二と尚は友達だし、尚も書記が信任投票になることを見越して後見人になったのだろう。

去年の後期選挙は全部の役職が信任投票だった。去年の前期選挙のときなんか会長職にしか立候補者が出なかったし。しかも1人。今回みたいに会長だけであっても、まともに選挙するのは珍しいんじゃないだろうか。

「意外だな。小林君とは親友なんだから、もっと気にしてると思ってた」

委員長が俺の答えに意外そうに話す。まあ、尚が後見人になることが全然気にならないといったら嘘になるが、奴だって子供じゃないんだし無難にやるだろう。そんな事を委員長に話したら、

「信頼しあってるんだね」

なんて言われてしまった。何かとてつもなく恥ずかしいことを言ってしまった気分になった俺は、奴とは永遠のライバルだぜ！なんて言ってそれっきり委員長との会話をやめてしまった。

ああ、本当に委員長にはかなわないな……

5月3日その2 言論の戦争・顔合わせ

昼休み、俺はいつもの通り尚と健二と3人で飯を食べた。最近気がついたことなのだが、健二はどうやらピーマンが苦手のようなのだ。今日の俺の弁当にはピーマンが入っていたので、尚と2人で健二をからかいながら楽しく食事した。いやー本当に楽しかった。

「ひどいなあ……」

何か恨めしそうな目で見てくる健二がいるが、気にしない。なぜか半笑いだけど気にしちゃだめだ。俺たちは飯を食い終わったので、カードゲームで遊び始める。

「本当に、ひどいなあ……」

……なんか可哀想になってきた。だけど、ここで屈してしまったら絶対何かおごらされるに違いない。尚もそれが分かっているのか、健二の相手はしていない。と、言うか健二の表情も半笑いだし。奴も分かって訴えてきているんだ。

「ああ、俺可哀想だなあ……」

「あー！分かったよ。悪かったって」

結局、健二からの圧力に負けた俺は奴の相手をしてしまう。それを聞くと健二はにっこり笑って、俺に賠償^{ジューズ}を求めるのであった。ちなみに尚はさっきから会話に入ってこない。

健二に笑顔でお礼を言われ、勝負に負けたが戦いに勝った気分になった俺。健二と2人で尚ひどいな、なんて言いながら三人で自動販売機へ向かったのであった。

「生徒会選挙出馬者と、その後見人に連絡します。12時45分ま

でに2階講義室に集まってください。もう一度繰り返します……」

缶ジュースを買ってきた後、再び3人でカードゲームをしていると、放送がなった。自然と時計に目がいつてしまう。時計は12時35分を指していた。

「そういやさ、健二達って選挙活動しないの？」

「それを言うならお前こそだろ……」

カードゲームを続けながら、なんとなく2人に聞いてみる。まったく尚のいう通りなのだが、クリスさんはまだ何も選挙の準備をしていないようである。委員長とも、選挙活動の具体的な話すらしていない。

「俺たちは来週からだね。選挙運動期間にならないと印刷室使えないし。連休中に選挙の準備をする予定だから」

健二がカードを出しながら俺の質問に答える。ぬ、そのカードはまだまだ甘いな、健二。俺もカードを出しながら話を続けた。

「あ、そのカード俺の「M&A（敵対的買収）」でもらうから。替わりに健二のMP回復ね。あとさ、現会長はどうするか知ってる？」

健二は、俺の出したカードに一瞬苦い表情をしたものの、すぐに表情を戻して話を続ける。

「陽介も来週からみたいだね。勇人たちもそうでしょ？ あと、M&Aはこの「失われた10年」で無効にするから」

ぬう。まさか返してくるとは……じゃなかった。会長も来週から活動をするんだったら、俺たちも焦らなくていいか。委員長もそれを知っていたから選挙の話をしてこなかったのだろう。クリスさんは……何も知らなかった可能性が高いな。

「じゃあ最後に、「恐慌神ヒンコネス」を出してとどめね。はい、勇人は破産！」

「え、うそ！」

いつの間にだろう。奴の場には恐慌神が出ていて、俺はカードゲームに負けていた。くそう、これで3連敗である。なんで健二はこんなに金融王が強いんだ。

自称カードキングの俺としてはリベンジを挑みたかったが、集合時刻が近いからと健二は戦線を離脱してしまった。尚とやっても俺が勝つのは決まっているので、尚は無言で健二の後についていく。尚が逃げたので相手がいなくなった俺も、小走りで追いかける形で二人の後についていくのであった。

講義室につくと、そこにはもう4人の生徒がいた。そのうちの一人が俺たちが講義室に入ってくるのを見て、こちらに向かってくる。……って、あれは篠原さんじゃないか！

篠原さんが近づいてくるので、俺はどうしようもなく焦ってしまふ。彼女が教室のドアの所にいた俺たちのそばに来たのをみて、俺は声をかけようとする。だが、彼女はそんな俺を気にもせずに健二に話しかけたのであった。……悔しくなんかないもん！

「健二君、こんにちはー。えーと？ どっちが小林君？」

篠原さんがこっちを向いて健二に問う。その瞬間に俺は彼女の顔をまともに見てしまった。

おお！ やっぱり可愛いぜ！ やはり学年一の美少女と男子の中で評判の篠原さんである。パッチリとした瞳に、鼻筋から整った顔立ち。ショートカットの髪は、さらさらと流れてとても綺麗である。その顔に浮かべている笑顔もとてもすばらしくて、もう、なんというか、俺、ノックアウトされちゃいました。

クリスさんが、彫像のような美しさを持っているとしたら、篠原さんは人形のような愛らしさを持っている。人の容姿をものにとえるのは悪い気がしたが、俺の貧相な表現力ではそんな表現が限界だった。

「ああ、さっきから変な動きをしていないほうが尚……小林君」

「じゃあ、この変な動きをしているのは？」

しかし、最近の俺はついている気がする。それまでろくに女子とは係われてこれなかったのに、ここ1ヶ月でクリスマスさんやら、委員長やら、篠原さんやら、可愛い女の子と仲良くなりまくりじゃないか！

まあ、委員長は前から友達だし、篠原さんとはこれから仲良くなる予定だけど。

そんなことを思っていると、篠原さんが突然声をかけてきてびっくりした。

「えーと、君が「あの」田島君？」

「え、うわあ？」

シット！いきなり話しかけられたから、変な声しかあげられなかったじゃないか。ああ、これじゃあ篠原さんに変な奴として認識されてしまう……

「うん、聞いたとおりだね。これからよろしくね」

しかし、篠原さんは軽く苦笑するだけで話を続けてくれる。ああ、なんて優しいんだ。うちのクラスの自覚がない墮天使クリスさんとは大違いだぜ！……それはクリスマスさんに悪いか。クリスマスさん、ごめん。

「ああ、うん。よろしく。あー、えーと、聞いた通りって？」

篠原さんが、俺のことを聞いたことがある風な口で話すので、気になった俺は彼女に聞いてみることにした。ああ、でも女子と話すのは難しいな。どうにも、どもった感じになってしまう。委員長とか、クリスマスとかだと平気なんだけどなあ。

「うん。健二君がクリスマスさんの白馬の騎士で、当代一の変人だって」

「そうなんだ。ところで、どこに、いくのかな、健二君？」

あっはっは。なんでだろう、いつになく愉快な気分になった俺は、自然と顔に笑顔が浮かんでいた。そして、なぜかこっそり教室を出ようとしていた健二君を右手で捕まえたのである。

あれ、なんでだろう。ちょっと捕まえただけなのに、健二君は必死に謝ってくる。尚と篠原さんは、なぜか苦笑しながらこっちを見ているぞ。おお、健二君が土下座し始めた！　これはめずらしいな。と、まあ、しばらく健二をからかっていたわけだが、さすがにかわいそうになった俺は、彼のことを許してやるのであった。

話が一段楽したので、ふと教室の教壇の方を見る。すると、そこにはほそちゃん何人かの生徒がこちらを見て微笑んでいた。おう！　なんかとてもなく恥ずかしいぜ！

「お話は、終わりましたか？」

ほそちゃんが心底嬉しそうな笑顔で話しかけてくる。ああ、こんなときでもほそちゃんの笑顔って癒されるんだなあ。俺が彼の問いに肯定すると、彼は候補者と後見人ごとに机につくよう、促すのであった。

「それじゃあ、まず自己紹介からしましょうか」

皆が席に着いたのをみて、ほそちゃんがそう言った。俺の隣にはいつの間にか来ていたクリスさんが無表情で座っていた。彼女がなぜか最前列に座ったので、俺も最前列に座っている。なんか心許なくて仕方ない。

「それじゃあ、生徒会長の候補の方から……杉山君と後見人の吉田君、お願いできますか？」

どこことなくおぼつかない感覚で席についていた俺だが、ほそちゃんの声に気合が入る。ついに、あの生徒会長とのご対面である。今までは顔くらいしか知らなかった俺の宿敵。

自称であるが、最大の天敵の俺が、お前の自己紹介のレベルをはかってやるぜ！

そんな俺の思いを知ってかしらるか、ゆっくりと後見人と共に教壇に上がった会長は、優等生然とした、はきはきとした口調で自己紹介を始めるのであった。

5月3日その2 言論の戦争・顔合わせ（後書き）

出てくるキャラが多いですが、分かりやすいでしょうか？
出来たら感想等をいただけると嬉しいです。

5月3日その3 言論の戦争・前哨戦

会長は綺麗なお辞儀をすると、爽やかな笑みを浮かべながら自己紹介を始める。うーむ認めたくは無いのだが、会長の整った容姿と相まって、とても絵になる光景である。同じ男なのに、どうしてここまで容姿が違うのだろうか？ ふと、右を向くと、窓ガラスに映った自分の姿を直視してしまい、密かにため息をはく。

俺の身長は165センチ止まりなのに、会長はどう見ても175は超えている。スラーとした感じでうらやましい限りである。俺は坊主頭をそのまま伸ばしただけで、額なんか丸見えなのに、会長は前髪が目近くまで来ていて、それが彼の魅力を引き立てている。俺の顔にはニキビだって絶賛出来放題中なのに、会長の顔にはそんな無駄な物なんて無い。もちろん、顔立ちは会長がサツとした感じの爽やかな顔立ちだとすれば、俺はヌボーとした感じの、ってもういいか……

どうにも暗い気分になりながら、会長の自己紹介を聞く俺。戦う前から、何か大事なところで負けてしまった気がした。もつとも、実際に戦うのはクリスさんだが。ああ、それなら負けていない。むしろ勝っている！ そう考えると、俺は少し尊厳を取り戻せた気がした。

「それでは皆さん、選挙期間中どうかよろしく願います」

会長はそう自己紹介を締めくくり、もう一度綺麗なお辞儀をした。ほそちゃんに促されるまでもなく、自然と教室から拍手が起こっていた。ぬう、さすが会長というべきか。特に文句のつけようが無い「無難」で「完璧」な自己紹介である。

だが……

はっはっは！ 会長見切ったり！ まったく、俺の永遠のライバルというから、どんな意外性に溢れた自己紹介かと思ったら、そんな無難な自己紹介で俺を超えられるかと思ったか！

俺は拍手をしながら、心の中では密かに高笑いをしていた。会長がそう来るのなら、俺は本気を出すしかないだろう。本当の「敵」はクリスさんでなく、俺であることを彼に知らしめる必要がある。

俺は、会長の後見人の吉田が自己紹介をしている間に、即興で俺流の「完璧」な自己紹介を考えるのであった。

「はい、お二人ともありがとうございます。それでは、クリスさんと田島君、よろしくお願いします」

ついにこの時がきた。俺は教壇に上がると、クリスさんの後ろに控える。そうして、2列目の後ろに陣取っていた会長に目をやった。奴は後見人と一緒に爽やかな笑顔を浮かべてこちらを見ていた。…その顔が驚愕に変わる様を震えて待っているがいい！

そんな俺の思いは知る由も無いクリスさんは、いつもの通り無表情で自己紹介を始める。

「2ねん4くみのクリス・ジェファークソンです。せいとかいちようになるのは、とてもむずかしいとおもいますが、たじまくんときよりよくしてがんばりたいです」

ん？ 彼女の自己紹介を聞いた俺は、かすかな違和感を憶えた。いったいなんだろう？ みんなの拍手が終わって、俺がほそちゃんに促されるまでの短い間に違和感の正体を考える。

ああ、俺のことを「たじまくん」と呼んでたんだ。まあ、だからどうというわけではないが、少しクリスさんとの距離が近づいたような気がした俺の顔には、一瞬血液が上ったのであった。

そんななかで、ほそちゃんに自己紹介を促され、俺は少し動揺す

る。頬を紅潮させているという不可解な姿で、俺は自己紹介を始めたのであった。

「私の名前はマイケル・K・アンダーソン。16歳だ。アメリカのテキサス州カルベストン出身である」

俺が始めた自己紹介を聞いて、尚とクリスさん以外の人間は明らかな困惑の表情を浮かべていた。それはそうだろう。田島勇人として紹介された人間が、いきなり他人の自己紹介を始めたのだから。

どうやら、つかみはばっちりみたいだ。これぞ、田島勇人の自己紹介秘術その5、「他人の自己紹介」だ！　こうして、他人の自己紹介をすることで、逆に俺の存在を印象づけるのである。

そうして俺は、ガルベストン出身のマイケルの半生を語っていた。幼稚園のときに、海でおぼれて大学病院に入院したこと。パーカー小学校に入学して、初日に親が学校に呼び出されたこと。ムーディガーデンなるテーマパークで迷子になったこと。

ほそちゃんに止められるまで、俺は自分自身ではなく、さっき考えたばかりのマイケルの半生を語り続けたのであった。

「と、まあ先生もまあおっしゃってるし、今日のところはこれくらいにしといてやろう」

俺がそう結ぶと、教室からは、安堵のため息が聞こえた気がした。みんななんと反応していいかわからない、といった顔をしている。そんな中、無表情だったクリスさんと、ねぎらいの表情を顔に浮かべていた尚が拍手を始める。それにつられるよう、教室に拍手が広がっていったのである。

なんか、みんなの反応は予想外の物であるが、これで田島勇人という存在をみんなの胸に刻み込めたであろう。これで会長も俺のこ

とを真の敵として認めるに違いない。

異様にみんなの視線が集中する中、俺は自分の席に戻った。会長の方に目を向ける。彼は、まるで変人を見るような目でこちらを見ていた。……なんて失礼な奴！　だが、これで奴も俺のことを認識しただろう。ある種の怒りと満足感という、相反する感情に包まれながら、俺はクリスさんの隣に腰掛けたのであった。

その後の自己紹介は、ある一人の例外を除いて、無難な感じに終わった。もちろん、その例外とは尚のことである。奴も俺と同じように「他人の自己紹介」をしたのである。まあ、奴の場合は話が盛り上がる前にほそちゃんの強制介入が入ったわけだが。もちろん、尚が退場するときは、俺が盛大な拍手で迎えてやった。

そして、予想外に伸びた自己紹介により、ほそちゃんは珍しく早い口調で本題に入ったのである。

「これからの予定を簡単に説明します」

ほそちゃんの話をもとめると……

選挙活動は5月17日まで。活動している時間帯は朝7時から夕方6時半の間。校舎外での選挙運動は禁止。ビラを作ったり、旗を作ったりするのは自由。ただし、ポスターや旗、看板を立てるときは先生方の許可を得て行う。担任の許可を得てなら、学校内の施設を自由に使える。11日の全校集会で立候補者の演説と、後見人の推薦演説。17日にもう一度、違う内容で演説を行う。

と、いうことだそうだ。特に驚くべき話はなかった。去年の選挙は部外者であったが、そんな感じの日程で行われていた気がするし。ほそちゃんは予定を話し終えると、11日の演説の原稿は10日に

担任に提出することを付け加えて、解散を宣言したのであった。

解散が宣言されたが、まだ少し昼休みは残っていたのでクリスさんに作戦会議を持ちかけた。彼女が会議を行うことに同意したので、委員長を呼ぼうと2人で教室に戻ることにした。

「あれ？　かとうさん」

席を立ったその時、クリスさんが声を上げる。無表情であったが、珍しく感情がこもった声を彼女が発した。それにつられて、彼女の視線を追うと、委員長が教室の入り口に立っていた。

委員長は軽くこちらに手を振ると、こちらに向かって歩いてくる。俺も照れくさい気持ちになりながらも、手を振り返す。もしかして待っていてくれたのか？　なんか嬉しいなあ。

若干ドキドキしながら、近づいてきた委員長に話しかけようとする。

しかし、委員長は突然立ち止まり、嬉しそうな表情を作ると、教室を出ようとしていた会長に話しかけたのであった。

……え？　なんで？

5月3日その3 言論の戦争・前哨戦（後書き）

カルベストンはありませんが、ガルベストンならあります。
初めて主人公の描写が入りました。

……遅いですよね。

ご意見ご感想をいただけると、嬉しいです。

5月3日その4 揺れる気持ちとは（前書き）

なんか意味深なタイトルですが、期待しないでください。

5月3日その4 揺れる気持ち

委員長はコロコロと笑顔を浮かべながら会長と話をしている。傍目から見てもとても楽しそうである。俺はそれなんとも言えない気分で見つめていた。クリスさんはもちろん無表情である。正直言っただけで面白くない。

委員長はこちらを指差しながら話を続けている。詳しくは聞き取れないが、俺たちの話を話しているのだろうか。どうにも気になつて仕方がない。気になって仕方がないが、それを表に出すのもとても恥ずかしい気がする。迷った末に俺は委員長たちがいるドアとは反対側から教室を出ようとしたのである。

どこに行くのか、と聞いてくるクリスさんをごまかして外に向かう。最後にもう一回、二人の方を見つめると、会長と目が会ってしまった。にこりと微笑んできた会長を無視して、自分の教室に向かった。

「たじまくん、どうかしましたか？」

クリスさんは何故か俺についてきた。何故かその事実にはっとした俺は、自分の席に戻ると昼休みが終わるまで、彼女と話をするのであった。

「田島君、クリスさん、さっきはごめんなさい」

放課後、選挙に向けて計画を立てようとしていた俺とクリスさんに対して、委員長が発した第一声はこれだった。彼女は頭を下げてこちらをちらちらとかがっている。本当に申し訳なさそうだ。そう考えると、さっきの自分の行動がとても子供っぽいものに見えてくる。とたん恥ずかしくなった俺は、しどろもどろになりながらも、クリスさんに続いて委員長を許す言葉を発したのであった。

「きにしないですよ」

「いや、その、俺も悪かったし、あゝ気にしないでいいよ」

その言葉を聞くとすぐ、彼女の表情に光がさした。どうにもその表情を直視できなかった俺は、あさっての方向を向きながら、話を本題に持っていた。すると、委員長は思い出したかのように一枚の紙を取り出した。

紙には片面になにやら絵のようなものが描かれているようだが、委員長が持っているせいで何が描いてあるかまでは分からない。なにか選挙に関係あるものであることは確かであろうが……

「それは？」

俺がその紙について聞くと、委員長は表情をニヤニヤとしたものに変える。そうすると、もったいぶりながら彼女は説明を始めるのであった。委員長がもったいぶるなんて、いったいどんな意味を持っていた紙なんだ？

「これは……会長の選挙宣伝用のビラで……」

委員長は紙の絵が書かれた側をひらひらと見せ付けてきた。会長のビラ。昼休み会長と話していたのはこれ入手するためだったのだろうか。

クリスマスさんと共に覗きこむようにしてビラを見る。委員長が机に置いたビラには、会長の似顔絵とおぼしき男子生徒が描かれていた。それにかぶさるように彼の公約、というか方針が書いてある。

「これを参考にして私たちも作戦を考えていこうと思うの」

去年も聞いたような文句が書かれていたビラを流し読みしていた俺に委員長はそう話しかけてきた。クリスマスさんはいつの間にかノートを取り出してビラの内容を写し始めている。どうやら二人の間で決まっていた話のようだ。特に異論もなかった俺はそれに同意する。

そうして俺たち3人は下校時刻になるまで選挙の基本方針を話し合うことに決めたのであった。

「じゃあ、今日はここまでだね」

下校時刻前の放送がなると同時に委員長がそう声をかけた。ずっ

と椅子に座って話し合っていたので身体がこわばっている。両手を上に伸ばして筋肉をほぐしながら今日のまとめをする。

「んじゃあ、変化をテーマにしていくということだ」

二人ともそれを聞いて無言で頷く。とりあえず今日の2時間あまりの話し合いで決まったのはそんなことであつた。

前会長にあつてクリスさんにはないもの、それは新しさであろう。彼女が会長をやっていないことしかり、転校生であることしかり、外国人であることしかり……

それから踏み込んだ方針に入ろうとしたのだが、今日は時間が足りなくてそこまで話を進めることが出来なかった。これから連休に入ってしまうのに、そんなことで大丈夫だろうか。俺がそんなことを考えるのと同時に委員長が提案をしてくる。

「じゃあさ、田島君メルアド教えてくれない？」

「え？」

一瞬頭が真っ白になってしまう。だってそうだろう。女子からメルアドを聞かれることなんてこれまでただの一度もなかったんだからもちろん、こちらから聞いた事だって一度もなかったわけだが。意味もなく冷や汗をかいている俺に気がついたのかいないのか、委員長は笑顔を浮かべて言葉を続ける。

「連休中にも話し合いがしたいから、連絡取りたいんだけど……」

「あ、ああ、うん。いいよ」

いや、冷静に考えれば当たり前じゃないか。せっかく連休があるんだし、それを利用しない手は無い。そう考えるとさっきまでの思考が恥ずべき物に思われてくる。ああ、今日の俺ってばどうしちまつたんだ。何度目とも分からない赤面をしながら、委員長とアドレスを交換したのであつた。

教室に出る最後になって、クリスさんからもアドレスを聞かれた。どうしてだろうか、彼女の場合はアドレスを聞かれた驚きよりも、クリスさんが携帯を持っているんだ、という感心の方が大きかった。……この態度の違いはどこからくるのだろうか。やっぱり普段纏って

いる雰囲気からだろうか。

今日は部活はしなかったものの、しっかりと下校時刻ぎりぎりまで学校に残った。いつもの通り明るくなってきた住宅街を家路につく。逢魔が時、とでもいうのだろうか。暗いとも明るいともいえない、不安になるような暗さの路地を進んでいくと、急によんだような不安にかられてしまう。

最近の俺はどこかおかしいのではないか。それまでUMAなんかと何のかかわりもなかった「平凡」な高校生だった俺。ところがどうだ。ここ1ヶ月で俺は3体ものUMAを目撃し、2度も死に掛けて、「力」ある者として覚醒してしまった、らしい。

どう考えてもこれはおかしい。UMAの発生なんて1月に2度あるかないかだ。それなのに俺は3度も目撃している。1月にあるUMAの発生が全て同じ人物のところで行われる、なんてことがありうるのだろうか。ありえないことと思っても、誰かの作為を感じてしまう。

でも、誰が？

どうしてだろう。俺の頭の中では、クリスさんと初めて出会ったときの光景が再現されていた。そして、その映像が終わって、家に入る直前。始業式の日に尚に言われた言葉が聞こえた気がした。

なあ、何であの子はここにいたんだろうな……

「そんなの、偶然だろ……」

いやな気分だ。こんなよく分からないような暗さのせいなのかもしれない。俺はまとわりつくような、どろどろとした空気を振り払

うように、明るい自宅へと早足で入っていくのであった。

5月4日その1 田島君の黄金週間

因果応報。何か行動を起こさない限り結果は起きない。そんなことは分かっている。

問題は、俺のどんな行動が原因で俺が「力」に目覚めたかっただ。

今日は目覚ましの音を聞かずに起きることが出来た。上半身を起こして自室のカーテンの方を見る。そこからはまだ薄暗い光しか漏れていない。ゆっくりと時計に目をやると、まだ時刻は5時であった。

まだ早い時間であったが、二度寝する気にもなれない。なので親を起こさないよう、静かに制服に着替えて、部屋の電気をつけた。そういえば、昨日は帰ってきてから携帯を見ていなかった。制服のポケットの突っ込んだままだったそれを取り出して、変化がないか確認する。

「お、メールだ」

そう独り言ちてメールフォルダを開いた。委員長からのメールだ。今日、いつから暇かな？

選挙の話し合いがしたいんだけど。ということだそうだ。絵文字もついていて、なかなか見栄えがいいメールである。

今日は部活があるから、午後からなら暇です。と、意味も無く敬語になってしまった文章で返信を作成した。やっぱり絵文字とかも入れたほうがいいのだろうか？ そんなことも気になったが、思い直してそのまま送ろうとする。

が、今の時間はまだ朝早いことを忘れていた。このまま送っても

迷惑だろう。そう思った俺は、そのメールを保存して携帯を閉じる。どうしよう。急にやるのがなくなってしまった。とりあえず課題でも進めとくか。だらだらと鞆から課題を取り出すと、俺は机に向かったのであった。

「ふう。難しすぎる……」

2時間ばかり机に向かって数学の課題を解いていたわけだが、さっぱり進まなかった。基本問題は解けるのだが、こういう課題に出てくる応用、発展はさっぱりである。数列なんて考えた奴出て来い！ 過去の偉人たちに怒鳴りたい気分だった。それとも、こんな課題をだしたほそちゃんに文句を言うべきか。

集中にも切れてきたので、ぱらぱらと教科書を流し読みしてみる。後に進めば進むほど、意味不明な記号がでてきた。このままで大学なんて受かるのかなあ。そんなことを考えていると、親が起きたような物音がした。考えを切り替えて、俺はリビングに降りていくのであった。

「あれ、今日は早いじゃない」

リビングでは、パジャマ姿の母さんが朝食を食べ始めていた。母さんに挨拶をして、自分も朝食を食べ始める。今日はおそらく部活が激しいと予想されるので、パンをいつもより多めに食べる。ああ、部活を意識したら急に緊張してきたぞ。帝王のしごきが始まってしまふ。部活さばりたいなあ。

朝食を食べ終わり、朝のニュースの時計を見ながら俺は刻一刻と近づいてくる審判の時を待っていた。どうか、このまま時間が止まりますように。そう願っていても、時計は無常に時を刻み続けている。

「ねえ、新聞とってきてくれない？」

……親とはこういうときに空気を読んでくれないのか。まあ、言

い返しても論破されるだけだろうなあ。ため息一つ吐いて、玄関を出て郵便受けに向かった。

郵便受けからはみ出るように突っ込まれた新聞を取り出し、郵便受けの中を覗き込んで封筒を取り出す。新聞を脇に挟みながら、幾枚か届いていた封筒のあて先を見てみた。親に気がつかれたら怒られそうだが、このくらいはいいだろう。家族の秘密を探る、ほどではないが、ドキドキしながら手紙のあて先を確認していると、予想外の名前を見つける。

「あれ、俺宛だ」

よく役所から送られてくるような、宛名のところだけビニールの長方形の封筒。ビニールの向こうに書かれていた宛名には、俺の家の住所の下に田島勇人様、と書いてあった。

直感的に退魔課からの手紙だと感じた。まあ、それ以外に俺に手紙を送ってくるようなところも無いわけだけど。俺の直感を裏づけるように、封筒の右下には小山原市対UMA特別対策課、と書いてあった。

今ここで開封したかったけど、ここで勝手に開けても親に文句を言われてしまうかもしれない。ここは気がつかなかったふりをしたほうがいいかも。俺は何もなかったことを装って、リビングへと向かったのである。

リビングに戻るとテーブルに新聞と封筒を放る。母さんが封筒からのぞき始めるのを、俺はテレビを見るふりをしつつ、横目で気にしていた。

「勇人、あんた宛。退魔課からだって」

予想通り。母さんは封筒を一枚取り出すとこちらに放る。まっぴりしたと封筒を開封して中の書類を取り出した。

能力登録のお知らせ、A4ほどの小さな紙にはそんな見出しがついていた。5月7日金曜日の午前10時から、能力の登録を行うので保護者の方と一緒に市役所隣の退魔課の建物まできてほしい、ということを書いてあった。

金曜日……そういえば変則振り替え休日で学校は休みだけど平日だったっけ。部活は休まなくちゃいけないか。帝王なんて言えばいいんだろう。普通に言えばいいのか。ああ、面倒がまた増えてしまった。

密かに俺が苦悩していると、母さんに書類をよこすように言われる。言われたとおりに渡すと、母さんが小さく声を上げる。気になった俺が尋ねると、母さんはいかにも面倒くさそうにこう話した。「金曜日、お友達とランチする予定なのに……」

……はいはい。そうでしたか。まともに相手にする気にもなれなかった俺は、母さんを見無視してテレビに視線を移す。ランチが何だ、俺なんか帝王に話すんだぞ。テレビではゴールデンウィークの行楽地特集がやっていて、なんだかとてもむなしい気分になった。

行楽地の特集から高速道路の渋滞情報にニュースが移った。時計を見るとそろそろ部活へ向かったほうがよさそうな時間になっている。気が進まないけれど、いくしかないか。まあ、帝王は怖いけど、剣道をするのは楽しいしな。あ、その前に委員長にメールか。

「よし！」

委員長にボタン一つでメールを送信すると、一つ気合を入れる。勢いよく立ち上がって、勢いのままに部活へと向かったのであった。

「ありがとうございます！」

汗はだらだら、息も上がっているし、四肢は棒のようになっていく。だけど、それを表に出しては一喝されてしまう。最後まで全力で。きびきびと挨拶をして、帝王が剣道場の外に出ると、剣道場は喧騒に包まれる。部員たちが更衣室に向かう中、俺一人だけ駆け足で剣道場の外に出た。

外に出ると、すぐに渡り廊下をゆっくり歩いていらっしゃる帝王が目に入った。帝王を目の前にして一気に緊張が高まって一瞬躊躇

してしまう。だけど、このまま何も言わないわけにも行かないので、覚悟を決めて声をかけた。

「……っ。近藤先生！」

「……どうした」

さすが帝王である。とっつきやすいような笑顔を浮かべることは無く、ゆっくりとためると、威厳たつぷりに返してくる。できることなら、なんでもないです、と言って剣道場に引き返したい。でも、そんなことをしてはどうなるかは目に見えている。ええい、ままよと帝王に金曜日部活を休むことを告げようとした。

「あの金曜日」

「竹刀」

俺が話を始めると同時に、帝王は俺の話をさえぎって、俺が手に持ったままだった竹刀を指差す。まずい、まずいぞこれは。どうやら帝王は俺が竹刀を外に持ってきたことがお気に召さなかったようだ。

ぐるぐるぐるぐる。竹刀を剣道場に戻してくるべきか。だが、そうしてしまうと再び俺の話に耳を貸してもらえないのか。でも、このままここにおいても怒られて話を聞いてもらえないに違いない。剣道場、竹刀、帝王。目線と身体の方がぐるぐると変わる俺を見て、帝王は大きいため息を吐く。

それを見て身体回転は止まる。そして俺の方針も決まった。帝王に竹刀を戻してやることを告げ、駆け足で剣道場へ戻ることにしよう。出来るだけ綺麗な気をつけの姿勢をつくり、帝王に話しかけようとしたところで、また彼にさえぎられる。

「……いい、話を続けろ」

「あ、はい！」

あれ、戻さなくてもいいのか？ 困惑してしまうが、これはついているのかもしれない。気を取り直して、帝王に金曜日部活を休むこと、そしてその理由を告げたのであった。

「分かった」

「失礼します！」

帝王は俺の話を聞くと、特に感想を漏らすことも無くすぐに職員室に向かってしまう。自分で言うのも変だが、俺が「力」に目覚めたというのは結構なニュースだと思うのに。そこはさすが帝王、というべきなのかもしれない。深く礼をして帝王を見送った俺は、着替えるために剣道場の更衣室へと向かったのである。

「じゃ、お疲れ」

お疲れ〜というゆるい声の合唱を聞きながら剣道場を出る。いやあ、なかなかどうして部活は激しかった。いまさらながら疲労がたまってしまった身体を感じて、そう思う。これをやった後に勉強なんて考えられない。しかも、俺はクリスさんの選挙対策もやるんだよな。バックから携帯を取り出すと、自転車にまたがりながらメールを確認する。

「え〜と、1時に学校集合？」

委員長から届いていたメールにはそう書いてあった。個人的にはその文よりも、部活頑張ってねという一文が目をはいたわけだけどもとかく、選挙対策は学校で行うようだ。今は12時だから……ペースマートで昼飯買ってきて学校で食べるか。親にメールしておう。簡単なメールを親に送ると、俺はペースマートに向けて自転車を向け始めたのであった。

5月4日その1 田島君の黄金週間（後書き）

スランプです。難産です。どうしたら面白くなるのでしょうか……

5月4日その2 変わるもの、変わったもの(前書き)

本当に長らく更新しなくてごめんなさい。

5月4日その2 変わるもの、変わったもの

学校の校舎は休日でも自習等の用途のために生徒に開放している。もつとも、俺はそんな優等生なことは今までしたことが無かったわけだけど。委員長は先生に話でも通して校舎を利用できるよう許可を取ったのだろう。彼女が選挙に出るわけではないのに、本当に頭が下がる。

ペースマートで昼食の弁当を購入した後、俺は学校に帰ってきた。しかし、皆が勉強しているであろう校舎の中で昼食を食べるのも憚られたので、日陰で野球部の練習を眺めながら昼食を取ることにした。

甲高く響く金属音と、野太い男の呼び込む声を聞いていると、なんだか眠くなってくる。

……あそこで必死に練習している奴らは、自分自身の事をどう考えているのだろうか。甲子園と言う舞台に上されるのは全国で何万人という高校球児のたった一握りの「特別」な奴らだけだ。あそこで練習しているの奴らは、自分たちが「特別」だと信じて練習しているのかな。だとしたら、奴らはなぜ自分たちが「特別」だと信じられるんだろう……

気がつくと、うとうととしてしまっていた。何か、夢を見ていたのかもしれない。頭が寝起き独特の重さになっている。携帯を開くと時刻はもう1時を指していた。もう委員長達が学校に来ているかも。俺は重い頭を振り払って、校舎の方へと歩き出したのであった。

「おいしい、二人とも」

校舎の正面玄関の前まで行くと、そこで二人の女生徒が話し込んでいた。その二人がクリスさんと委員長だと気がついた俺は片手を振りつつ声をかける。委員長は笑顔でこちらに手を振りかえしてくる。クリスさんは相変わらず無表情であったが、意外にも手を振り

かえしてくれた。

クリスマスも最近是这样、柔らかくなった感じがするな。相変わらず表情の変化は無いけれど。俺のギャグが効いた……わけないよな。最近は委員長とすぐ仲がいいみたいだし、その影響が大きいのかも。

委員長とクリスマスさんは職員室へと向かっていく。ああ、先生に話を通しに行くんだな。帝王が居るから俺としては避けたいところなんだが……。そんな気持ちを察したのか、委員長は俺に先に2階の講義室に向かうように伝えてくる。さすが委員長だ。俺の心を読んでいるかのような気配りの仕方である。俺はありがたく先に講義室へ向かわせてもらうことにした。

なんか尚に知られたらヘタレとか言われそうだが、気にしてはいけないんだ。うん。

「えーと、ここはもっと大きい方がいいんじゃないかな？」

「そうですね……こういうのはどうでしょうか」

あー。なんというか只今俺はものすごい疎外感を感じています。2階講義室ではクリスマスさんのビラ作りの原案の真っ最中である。美術的センス0の俺はビラに書く内容に意見を出すことは出来ても、こうしてビラの構成になってしまおうと役立たずなのであります。

何もしないというのも気まずいので、意味も無く机に広がっているプリントやノートを片付けてみる。

「あ、ごめん田島君。それ使うんだ」

「ごめん……」

邪魔してしまってさらに気まづくなっちゃった。田島君は休んでいていいよ、とかゆっくりしててください、なんて気を使ってくる彼女たちの言葉が、逆に心に突き刺る……

ああ、俺に美術的センスが少しでもあれば！ せめて、せめてまともな絵が描ければ！ ノートに描かれた俺考案の棒人間だけのビラの原案を見て、深くため息を吐いたのであった。

「よし、できた！」

それから一時間ほどして、教室の一角から委員長の声があがる。どうやらビラの原案が完成したみたいだ。俺は二人がビラを作っている間ずっとグラウンドを眺めていた視線を教室内へと戻す。ビラが完成して喜んでいる二人、といってもクリスさんは無表情だけれども。でも、そんな様子を眺めていると、なんだか寂しくなってくる。

「じゃあ、印刷してこようか」

委員長がクリスさんにそう声をかけながら席を立つ。印刷。そうだ！ここで恐るべき速さで印刷を済ませて、俺の面目を取り戻してやる！ふっふっふ。これから印刷の鬼と呼ばれる予定の俺の實力を女子二人に見せつける時が来たようだな。

「じゃあ、ここは俺がやってくるよ！」

「わたしが……」

クリスさんが声を上げようとするのを遮って、俺が委員長からビラを受けとる。俺は自分たちも行くと言い張る二人を休んでいろ、と教室に残して印刷室へと向かったのである。

印刷室にたどり着くと、そこには既に先生が一人コピー機を使用していた。俺は先生に一声かけると、2台あるうちの先生が使っていない方のコピー機を使用することにした。

買った当初は真っ白だったろうに、今はもう黄ばんでしまったコピー機に哀愁を感じながら操作をする。印刷する枚数は1000枚。委員長が言うには、学校が再開すると同時に朝のホームルームで全てのクラスで配布してもらうそうだ。とりあえず、用紙は絶対足りなくなりそうだったので、印刷室の隅にある用紙の束を持ってきたから、印刷を開始する。

崩壊直前の断末魔の叫び声のような音を上げながら、コピー機はコピーされたビラを排出し始める。大丈夫だろうか、なんか不安なんだが。しかし最初、ぎこちなくビラを排出していたコピー機は、

しばらくすると小気味よくビラが出る音を響かすようになった。

そうしているうちに先生は印刷室を出てしまった。コピー機に腕をつけながら、ビラが排出される様子を眺める。勢いよく印刷機から排出されたビラは、トレイに当たって軽い音をたてるとそのままトレイの底に落ちていく。

一枚一枚排出される様子を眺めていると、ビラがトレイにたまるのはとても遅く感じる。だけど、少し目を離すといつの間にかたくさんビラがたまってしまった。

やっぱり、俺って変わったのかな。ふとビラから目線を外し、そんなことを考えてみる。俺自身は自分が変わったとは思わないけれど、このビラのように少しずつ紙が積み重なるように俺は変わっていたのかもしれない。そして、その変化がいっぱいになったから、俺には「力」が目覚めただろうか。

なら、誰かに聞けば俺が変わったかどうか分かるのだろうか。でも、自分でもわからない自分のことを、他人が分かっているなんてことがあるのだろうか。

俺はそのままぼんやりとしながら、狭い印刷室の狭い窓の外を眺めていた。途中でコピー機が赤ん坊がぐずるようなやかましい音をたてながら停止したので、俺もあやすように用紙を追加した。それ以外、何をするわけでもなくそのままぼっとしていると、俺の背後でドアの開く音がした。

「田島君、これ差し入れ」

「たじまくん、おつかれさまです」

ドアを開けて入ってきたのは、委員長とクリスさんだった。委員長は俺に差し入れのジュースを渡すと、トレイに入っている用紙の枚数を確認する。そういえば、今何枚くらい印刷したのか。俺も気になったのでコピー機の実操作画面を確認すると、そこにはあと60枚と言う文字が表示されていた。

まだ半分終わってないのかよ……。俺は若干げんなりしながら、

二人にもその事実を伝える。委員長はそれを聞くと、軽く相槌をうつてもう一つのコピー機に手をかける。もしかして2台体制でやるのだろうか。それだと先生の邪魔になりそうだけど……

ところが、委員長はそんな俺の予想を無視するかのようには、クリスさんと世話を始めるのであった。

休憩かな。とりあえず委員長からもらったジュースを開けながら、二人の話に加わろうとする。二人は連休中の課題について話していた。さすが優等生だ。話している内容が違うぜ。クリスさんも、意外と言っては失礼かもしれないけど、結構ジェスチャーを交えて話をしている。まあ、表情はほとんど変化しないんだけど。

そんなことを思った俺は、クリスさんにむかって話しかけていた。「やっぱさ、クリスさん明るくなったよな」

「そうでしょうか？」

俺の声がかかると同時に、委員長との話を中断しそう答えてくる。自分では気がついていないのか。俺から見ると結構変わったように思えるんだけど。

委員長もそんな俺の意見に同調して、クリスさんが明るくなったことを強調してくる。だけど、クリスさんはただただ首を傾げるばかり。なんというか、その首を傾げる事自体が変わったといえる証拠の一つなんだけどなあ。

しばらく俺たちはクリスさんが変わった、という話題で盛り上がっていた。そうして印刷も終わりに近づいたころ、委員長がまとめるようにこうつぶやいた。

「やっぱさ、自分でなりたい自分に変わろうと努力しないとだめなんだよね……」

「そうですか……」

クリスさんはやっぱりよく分かっていない感じで相槌をうつていた。もちろん、無表情だ。だけど、俺は委員長のその言葉に大きな衝撃を受けていた。なりたいたい自分に変わろうと努力する。言われてみれば、そんなの当たり前のことだ。だけど、今までの自分はどう

だろう。俺はなりたい自分に、「特別」になろうと頑張ってきただろうか。自分は「平凡」だから、とどこかあきらめていなかっただろうか。

そうだ。あきらめていたんだ。だから、自分が変わったと思えなかった。自分が変わろうと自分で踏み出していなかったから、自分がどこに居るか分からなかったんだ。

もし、「特別」になろうと思うのなら、自分が「平凡」であるかどうかは重要じゃなくて。

自分が「特別」になろうとすることが重要なんだ。そう、俺は平凡でも「力」があるんだから。

「そうだよな委員長。自分で動かなくちゃいけないよな」

委員長だってそうだった。彼女はクリスさんのことを避けていたじゃないか。それが今ではこんなに楽しそうに話が出来るくらい仲良くなっている。これは、きっと委員長がクリスさんと仲良くなろうとして努力した結果なんだ。

だから、俺も……

俺の言葉に満面の笑みで同意してくる委員長を見て、俺は密かに決意したのであった。

5月4日その2 変わるもの、変わったもの（後書き）

なんかもう吹っ切れました。スランプを脱したわけではありませんが、とりあえず書いていこうと思いました。

あと、1〜20部くらいまでまとめて修正中です。夏休み中にはまとめて更新しようと思います。

そういうばもう30部でした。なのに物語は進展してないですね…
…

5月7日その1 いざ退魔課

努力すればなれないものは無い。それは本当なのだろうか。少なくとも、俺はそう信じたいと思う。

いや、そう信じなくてはいけないんだ。

気がつくと時間がたつのは早いものだと思う。連休は流れるように過ぎていき、いつの間にかもう金曜日になっていた。朝起きて部活して、選挙の準備をして、帰宅して宿題する。ある意味無駄がない。けどどうしようもなくむなしい連休である。

今日はついに退魔課へと「力」の登録へと行く日だ。昨日はがらにも無く夜の寝つきが悪かった俺は、朝起きるときも妙に目が冴えたままだった。

「早く朝ごはん食べてよね。片付かないから」

言葉に出来ない期待感と共に朝の食卓につく。母さんは今日が退魔課に行く日だと分かっているのだろうか。そうとは思えない母さんの台詞に確認をとりたくなる。でも、あんまり気にしているのが母さんにばれるのもいやなので、黙って朝食を片付けることにした。朝食を済ませるとそのままりビングのソファアに座って朝のニュースを眺める。昨日はUMAが県内で出なかったのか、UMA関連のニュースはやらなかった。

「……死亡していたのは県内の高校に通う……」

ニュースを流し見しながら母さんの様子も確認する。朝食の洗い物を済ませた母さんは、ダイニングのテーブルについてニュースを眺めていた。やっぱり今日が退魔課に行く日だと忘れてるんじゃない

ないのか。ここは一言言ったほうがいいのかもしれないな。そう決心した俺は母さんに話しかけようとした。

「母さん、今日ってさ」

「早く退魔課に行く準備してよね」

「……家出をしたと思われ、数日前から行方不明になっており……」
……何でこう母さんは俺を脱力させるのが上手なのだろう。深いため息一つ。母さんから白い目で見られながらも、ニュースに見送られながら身だしなみを整えに行くのであった。はあ、俺も家出しちゃおうかなあ。

退魔課の建物とはどんなものだろうか。身だしなみを整えながらそんなことを考える。得体の知れないUMAという怪物の脅威から一般市民を遠ざける異能力者集団。公的機関という言葉も相まって、とてもかっこいい感じじゃないか。きつとすごい綺麗でスタイリッシュな建物に違いない。いまだ見ぬ退魔課に思いをはせつつ、身だしなみを整えた俺は玄関へと向かうのであった。

あ、でも市役所の隣にそんな建物ってあったっけ……

「ここが退魔課、か」

母さんの車に乗って約20分。中心街に着くと、30階建ての無駄に巨大な県庁が迎えてくれる。その県庁から少し離れたビルの中に、あまりに巨大な県庁に申し訳なさそうに7階建ての市役所が建っていた。

えっと、市役所の隣が退魔課だよな。市役所の駐車場に止まった車から降りて、周囲の建物を見渡す。

右。保険会社のビル。違う。正面。見るからに古そうな3階建てのコンクリート造りの建物。……とりあえずスルーだ。左。喫茶店や旅行会社などのテナントが集まったビル。違う。

最後に祈りをこめて後ろを向く。そこには巨大な県庁だけが堂々とそびえていた……

えっと、まさかとは思うが消去法で行くとこれしかないよな。見るからに古そうなコンクリート造りの3階建ての建物。それが小山

原市の退魔課であった。……微妙だ。なんというか、想像以上にしょぼい建物である。もっとうこう、秘密基地のような物を期待していたんだけど。

上の方から黒ずんできているコンクリートの塊には、日が沈んでからは出かけない、とか今月UMA発生数増加中、と書かれた垂れ幕がぶら下がっている。UMAと戦う公的機関というイメージは湧かないなあ。

どうにも今日は自分のペースで物事が進まないみたいだ。俺は建物から視線を外すと、もう既に車に鍵をかけて建物の入り口に向かっている母さんを追いかけたのであった。

「本日はどうなさいました？」

何故か二階にある正面入り口へ続く、巨大な黒ずんだ階段を上る。手動のドアを押し開いて退魔課に入ると、クーラーの冷気が俺たちを迎えた。今日は暑くもないのに、お役所だからつけているのか。受付の人と母さんとの会話を聞きながら、室内の様子を確認する。

予想外に広い室内であった。学校の体育館くらいはあるんじゃないか？ 入って正面にはすぐカウンターがある。その奥には事務机が並んでいて、スーツ姿の人が席に着いて事務仕事をしていた。時折響く電話の着信音が印象的である。

外見もそうだが、中も想像を見事に裏切ってくれている。部屋自体は広いのに、ほとんどのスペースを事務机が占領してしまっている。これじゃあ、どこかの会社、といった感じじゃないか。市役所でさえ1階は丸々大きなホールになっているというのに。

カウンターにあった退魔課のお仕事、というカラフルなパンフレットを手にとると、受付の人が事務机の方へと消えていった。退魔課って略称は本家公認なんだな。意外な事実に感心しつつ、パンフレットをめくっていると受付の人が病院で会ったあのおじさんを連れて来た。

「今日はよろしく願います」

母さんがおじさんに向かってお辞儀をするのを見て、俺も合わせ

るようにお辞儀をする。おじさん。名刺をもらったような気がするが、名前はなんといっただろうか。ああ、思い出せない。とりあえず曖昧な笑顔を浮かべながらおじさんのあとについてカウンターの向こう。事務机の群れの中へと踏み込んでいった。

「さて、勇人君。僕のことは憶えているかな？」

おじさんに部屋の片隅にすりガラスのついたてによって作られた応接間に招かれる。机をはさんでおじさんと向かい合うようにソファーに座ると、おじさんは笑顔でこう切り出してきた。

あゝ、どうしよう。素直に憶えてないけどもいえいいのだろうか。でもそういつて印象悪くなるのも嫌だしなあ。しばらくそんな感じでどもっているとおじさんは笑顔で改めて自己紹介をした。くれた。

「それじゃあ改めて、小山原市対UMA特別対策課の吉田です」

吉田さん。もう忘れないぞ。もうこれから会うことも無いかもしれないけど。それでも吉田さん。あなたのことは永遠に忘れません。そうして少しの間世間話をする、いよいよ吉田さんが本題を切り出し始める。能力者としての登録。俺は自分の「力」がどんなものかも分からないし、発動すら出来ないのだけど。こんなので登録なんて出来るのか。

俺がその旨を伝えると、吉田さんは予想していたのか笑顔で話を始める。

「それじゃあ、勇人君には僕と来てもらって。お母さんはこちらの方に」

そう言う吉田さんは別の人を連れて来て母さんを頼むように言う、俺についてくるように促す。母さんのことが気になるけれど、どんどん行ってしまう吉田さんを見て小走りについていった。

「あの」

吉田さんに追いついた俺は一言声をかける。とりあえずどこに行くのかの説明くらいは欲しかった。吉田さんはカウンターの向こうに出て、左手にあった階段の前で止まると俺に向き合う。それにあ

わけて俺も吉田さんに視線を合わせた。

「えっと、勇人君にはこれから「力」を発生させてもらうからね」

吉田さんがそういうのを聞いて、俺はすぐに反論しようとした。発生させてもらうも何もそんなやり方なんてわからないぞ。せめてもう少し説明してもらわないと……

そんな俺の思うを無視するように、吉田さんは階段を下りていってしまう。むう、なんだか不安になってきたな。本当に大丈夫なのか？ 不安と胡散臭さを感じながらも、吉田さんに続いて俺も階段を下りていったのであった。

5月7日その2 退魔課の中で

階段を下りきるとそこには目をひく大きな扉があった。壁の色と同じ、少し黄ばんだ白い色をした両開きの扉には銀色の取っ手がつけられている。なんとなくその向こうに大きな空間が広がっている事を感じさせた。

吉田さんはその扉には目もくれずに右手にあった小さなドアのドアノブを回す。そのドアには小さな札がかかっていた。その札に何と書かれているのか確認する間もなく、ドアが吉田さんによって開かれる。

扉を開くと、そこは控え室のようになっていた。ドアに似合わず広い長方形の部屋の右手には、男子と女子のそれぞれの更衣室の扉が存在し、左手には大きなテレビが何台か置かれている。各々のテレビには柔道場のような空間が写されていた。そのいくつかでは組み手がおこなわれているのが見える。テレビの下には放送室でみかけるような機材があり、壁には市営ののフラワーパークの宣伝ポスターが貼られていた。部屋の隅には自動販売機があつて、部屋の中央には大きなベンチがいくつか配置されている。

そのベンチには資料らしき物を読んでいる男性とそれを見ていた女性が座っていた。そのうちの女性が俺たちが入ってくるのを見てこちらに顔をむける。あれ？ あの人もしかして道を封鎖していた人か？ よく顔を覚えていないので自信はないが、そんな気がした。「光山さん、相川さん、こんにちは。こちらが田島勇人君です。お願いします」

「はい。田島君。光山沙織です。よろしくね」

吉田さんと女性、改め光山さんは俺を男性が座っているベンチの正面のベンチに座るように促す。すると、隣の男性も腰を上げて俺に挨拶してくる。

「こんにちは。相川順平です。今日はよろしく」

手を伸ばしてきた相川さんと握手すると、いよいよ本題に入った。ついに能力の登録である。どんなことをするのか分からないが、大人3人に囲まれて結構緊張してしまうじゃないか。

「それでは、一応の報告は吉田さんから受けてますが……。確認します」

相川さんはそういうと、俺の住所氏名から始まって、俺の能力や覚醒したときの状況など、初めて吉田さんと話したときに答えた内容を俺に確認してきた。自分で自分の能力は分かりません、というのは気が引けたけど、それ以外は特に問題も無く話は進む。一通り終わったところで、相川さんがまとめるようにこう話した。

「君は自分の能力の自覚が出来ておらず、発動も出来ない。しかし、第三者からの確認によって、君に「力」があることは分かっている。了解です。それでは」

そうすると、相川さんは右手を軽く振った。瞬間、俺の中で何かが動き始めた気がする。それが動ききる前に、室内なのにそよ風が巻き起こった。もしかして今のは……。内と外、両方の異変に驚いた俺は相川さんを見つめる。相川さんは肯定するかのように深く頷いた。

「今が私の「力」です。君には今から自分の「力」をコントロールするコツを憶えてもらいます」

「コツ？」

オウム返しに聞き返した俺に対して再び頷くと、相川さんの説明は始まった。

彼が言うには、自分の「力」をコントロールするというのは、自分の意志で発動できて、自分の意志で強さを調節できる、ということとだそう。といっても難しいことではなく、自転車に乗るのと変わらない物らしい。感覚さえつかんでしまえば、後はその技術を磨くだけ、ということである。

「それではこれを持って。まず、意識を集中して……」

いつの間に取り出したのか、相川さんから木刀を受け取る。え？

なんで？ 困ったので吉田さんに視線を向けると、吉田さんはゆっくりと微笑んだだけだった。……しようがないか。

そのまま木刀を握り、目を閉じ、意識を集中させて、精神を統一する。冬場、部活で精神鍛錬と言う名目で精神統一はやったことがあるので、特に苦も無く集中することが出来た。

意識が渦巻きながら沈んでいくような、そんな感覚。周囲の雑音は意識まで届かず、定期的に聞こえる心音が、さらに俺の意識を沈めていった。そんな中、遠くから相川さんの声が聞こえる。

「そのまま、自分の〔力〕を強くイメージして」

自分の〔力〕。どんなものなんだ？ どんなもの…… そうだ。

木刀に光を纏わせていた、って言われたっけ。

右手に握っていた木刀を両手で握ると、再び深く集中する。そうして、木刀が光に包まれる様子を強くイメージしてみた。

……何も変わった気がしない。目を開けても、何の変化もない。目線を上げると、何かを期待するような目で見つめてくる吉田さんが居た。そんな目で見られてもなあ。なんというかまったく、取っ掛かりすらつかめた気がしない。

「あの、だめです」

俺の様子を冷静に注視していた相川さんにそう告げる。これ以上やっても何か変わる気はなかった。相川さんは何故か訝しげな視線を光山さんに送る。光山さんが深く頭を下げると、相川さんは一度ため息をついて、こう言った。

「もう少し頑張ってみましょう」

そうして俺はそれから1、2時間だろうか。俺は相川さんとマンツーマンで〔力〕のコントロールのための訓練を受けた。といっても、ひたすら精神統一をしていたんだけど。でも、俺は〔力〕を発動させることは出来ない。いい加減疲れてきてしまったぞ。

「この方法では無理みたいです」

そんな俺の様子を見て、相川さんがあきらめたように俺に告げる。この方法。ということは「力」をコントロールするための訓練は、他にもあるということなのだろうか。

「その前に、田島君。一つ確認をします」

「え？ はい」

「君にはこれから催眠術を受けてもらいます。そうして、君が「力」を覚醒させた状況を再現することによって、君に「力」をコントロールするためのきっかけを掴んでもらいます」

そうすると、相川さんは書類を取り出す。相川さんはその書類を俺に見せながら、催眠術は基本的に安全だけど、ごく稀にトラウマなどにより錯乱状態に陥る人がいること。また、俺は施術の目的の関係上、その可能性が高いことを説明した。

そうして最後に、催眠術をかけられてもいいのなら、書類にサインするように求めてきた。

……これは親の同意もいるのだろうか。そのことを問うと、もう既に同意はもらっているという答えが返ってきた。いつの間にもらってきたのか。準備がよすぎるじゃないか。どちらにせよ、もう後は俺の意志しだいというわけか。

しかし、そうはいっても俺は「力」の専門家じゃないし、向こうが提示してきた条件をひたすら呑むしかない。俺は催眠術という言葉に少しの不安と、いくらかの好奇心を感じながら、自分の名前を書類に書き込んだのであった。

「それでは光山さん」

「はい。じゃあ田島君、こっちに」

俺がサインするのを見た相川さんから声をかけられた光山さんは、俺を先導して男子更衣室に入っていく。何のためらいも無く男子更衣室に入っていく光山さん。そして、ついていこうともしない吉田さんと相川さん。なんか、逆に入るのが恥ずかしいな。それでもそんな感情を表に出す暇も無く、俺は光山さんと密室で二人っきりになったのであった。

密室で女性と二人っきりで催眠術。なんかエロイ感じがするが、気にしちゃだめなんだ。うん。これは訓練なんだぞ！

催眠術。俺はこの約1時間人生初の催眠術を体験した。更衣室に入ると、光山さんから改めて施術に関しての説明を受けた。

彼女によると、「力」というのは人の心理状態によりその強さが変化する傾向があるそう。そこで、俺の場合は能力が目覚めた状況を催眠術で再現することにより、俺自身が「力」をコントロールできるようにしよう。と、いうことらしい。

タオルが敷かれた更衣室のベンチに寝そべりながら、俺の「力」の媒体と考えられているらしい木刀を握らされた。どうやら、相川さんと訓練したときに木刀を持たされたのもそういうことらしい。ともかく、そうして光山さんの施術は始まった。

なんというか、起きてても憶えている夢を見ているような感じ。五感の感覚が薄れる中、再びあの人型のUMAと対峙する。

映画を見ているように場面が流れる中、俺は相川さんに教えられた「力」をコントロールするためのコツ。自分の「力」を強くイメージすること。を実践していたわけだけど、何かつかんだような感覚を得ることは出来なかったのである。

そうして1時間ほど経っただろうか、俺はぼんやりとした頭を振りながら、光山さんと更衣室を出た。外に出ると吉田さんが笑顔でねぎらってくれ、相川さんは光山さんに結果の報告を求めた。

「それで、結果は」

「残念ながら、失敗でした」

「そうですか。困りましたね……」

結局、光山さんの判断で催眠術から解放された俺は「力」を自分

の意志で発現することは出来ず、大人三人押し黙るという気まずい状況に置かれたのであった。

「えっと……」

「あ、大丈夫だよ勇人君。確かに君は「力」をコントロールするのは苦手みたいだけど、君に「力」があるのは本当だから！」

どうにも気まづくなつた俺が声を出してしまうと、あわてて吉田さんがフォローを入れてくる。コントロールも何も、自分に「力」があるかどうかの確証すらないわけなんだけど。そんなことを言い出せるはずも無く、対策を話し合ひだした大人たちを見つめる俺がいた。

「……あの方法をお願いできますか？」

光山さんが相川さんに頭を下げて何かお願いをする。相川さんは何故かとがめるような視線を彼女に送る。それでも光山さんが頭を下げ続ける。

相川さんは手元の書類を見つめながら押し黙る。しばらくして、相川さんは深くため息をつく、俺に話しかけてきた。

「田島勇人君。今から君の「力」を引き出すために、君にはある危険なことに挑戦してもらいたい。そのための同意をお願いできますか？」

「危険なこと？」

危険なことって、どんなことなのだろう。電気ショックでも流すのだろうか。雰囲気からして明らかに普通じゃないことをするってことは察せるけれども。

相川さんはもともと真剣だった表情をさらに緊張させて、こう言ったのであった。

「君にはこれから対UMA特別対策課の職員と戦ってもらいます」

5月7日その2 退魔課の中で（後書き）

少し説明が多かったかもしれません。

ついに次は戦闘シーンです。苦手ですが頑張って書いて見ます……

5月7日その3 〔力〕求めて（前書き）

最初にお詫びします。まだ戦ってないです。

5月7日その3 「力」求めて

君にはこれから対UMA特別対策課の職員と戦ってもらいます。確かに相川さんはこう言ったよな。えっと、対UMA特別対策課ってのは退魔課の正式名称で。その職員ってことは毎晩街の皆をUMAの危険から守っているわけで。なるほど。そんな人と俺は戦うのか。そうかそうか。よし。何て言われたのか飲み込めたぞ。

……え！

「え、そのそれって」

それはまずい。まずいぞ。しがない高校生が退魔課の職員と戦えるわけじゃないか。そんなことを伝えなかったのだが。悲しいかな、混乱した俺の頭は論理的な言葉を紡ぎだすことはなかった。

「大丈夫です。田島君の安全は保障します。重傷を負ったり、死んだりすることは絶対ありません」

うろたえる俺を見て、光山さんがそう告げる。えっとその言い回しからすると、重傷は負わなくても怪我はするんだよな。やだなあ。どうしてそこまでして俺の「力」を目覚めさせなくてはいけないのだろう。第一親の許可はとっているのだろうか。

「あの、親の許可は……」

「もう既にいただいています。大丈夫！ 田島君は剣道をやっているのでしょうか？ それなら大丈夫ですよ」

母さんは許可したのか。母さんまでそこまでして俺の「力」を目覚めさせたいのか。いや、母さんのことだから俺の意志にまかせた、ということなのかな。

それに光山さん。剣道をやっているからって退魔課の職員と戦っても大丈夫ってことはないと思います。そんなことは表立っては言えないけれども。

「田島君。もしよろしいのならここにサインを」

相川さんが頃合を見て紙とボールペンを俺に差し出してくる。一

番下の空欄以外、紙の記入欄は全て埋まっていた。

もう決断しなくてはいけないのか。もう少し時間が欲しかった。いきなり退魔課の職員と戦って言われても。ボールペンを握って見たものの、空欄に視線が集中するばかりで手が動かない。

「あの、もう少し時間をいただけませんか？」

思い切ってそう言ってみる。このまま決めても、自分で満足できる気がしなかった。大人たちは頷くと、しばらくしたら戻ってくると告げて部屋を出て行く。そうして最後に光山さんが部屋を出る直前、いきなり話しかけてきた。

「君にはもうこの方法しかないと思うわ。……決断してね」

そう言うとな彼女は俺の返事を待たずに部屋を出てしまった。いきなり口調が変わったので一瞬うろたえてしまう。彼女の口調はそれまでと違って親しげだったのに、とても冷たい物に感じられた。

ああ、やっぱりこの人達は退魔課の人間なんだな。当たり前のことだけど、何故かそう強く感じた。

「この方法しかない、か」

一人残った部屋でそうつぶやく。光山さんに言われたからではないが、俺もそんな気がしていた。なんというか、取っ掛かりがつかめない。まったく始まりを感じない。閉塞してしまつて、変化がないというか……

自分でもよく分からない。自分自身で説明することが出来ない。

でも、これまでやってきたような方法では無理だと感じていた。戦う、という手段が新鮮で刺激的だからかもしれないがこの感覚を打ち破るにはちょうどいい方法だと思う。

「でも……」

でも、でもだ。どうしてそんなことをしなくてはいけない？ どうして「力」にこだわる必要があるんだ？ たとえ今「力」が発動できなくても、いつか出来るかもしれないじゃないか。そうなるま

で精神統一を繰り返していけばいい。わざわざ危険を冒して戦う必要があるのか？

自分で言うのも悲しいが、俺ははっきり言って弱い。そりゃあ剣道は人並みにはやっている。だけど腕前は大会で一回勝てればいい位のレベルだ。そんな物で戦闘のプロである退魔課の職員と戦えるわけがない。

それに相手は「力」を持っている。俺のようなあるのかなのか分からないような「力」じゃない。人々を襲う怪物を駆逐するための、訓練された強力な「力」だ。どうひっくり返っても俺が一方的にやられるのは明白だった。

俺はどうしたいのだろう。危険を冒してまで俺は「力」を手に入れたいのか。そこまでの覚悟が俺の中にあるのか。そこまでしなくてはいけない理由が俺にはあるのか。

無い。俺には危険を冒す覚悟も理由も無い。

でも、俺は「力」を手に入れたい。このまま何も変わらないまま終わりたいくない。

俺は「平凡」だ。普通の人間だ。だけど、「力」という可能性が俺の中にまだあるのなら、あきらめるのはまだ早いんじゃないか。まだ、一歩踏み出せるんじゃないか。

俺は「特別」になりたい。それはとても曖昧で、単純で、馬鹿みたいな思いかもしれないけれど。もう一度、挑戦してみるのでもいい

かもしれない。

「……よし！ やるか！」

「それじゃあ田島君、だっけ？ お手柔らかに」

あれ？ 俺は気がつくコンクリートむき出しの壁に覆われたバスケコート2面分くらいの場所にいました。床は柔道場のような柔らかい素材なので転んでもあんまり痛くなさそうです。そんな床に靴を履いたまま乗っかっているのなんだか違和感を感じます。えーと、目の前にいるのは退魔課の霧島さん。爽やかな笑顔が特徴のナイスガイ。歌のお兄さん、といった感じの彼ですが、夜になると街の皆を守るために毎日パトロールに出るそうです。

俺が退魔課の人と戦うと決めてからの展開は早かった。妙に生き活きし始めた光山さんと吉田さんにレガースやヘッドギア、プロテクターを装着させられ、地下に入るときに見た大きな扉の中に案内される。

中にあつた柔剣道場の奥にひっそりとたたずんでいた扉を開けると、コンクリートで覆われた広い空間が待っていた。そこでいきなり霧島さんなる人物と二人っきりにされてしまったのである。

「あのー、田島君？ でいいんだよね……」

「あ、はい。大丈夫です」

なんというか、会話が続かない。もっとうこう、しっかりと準備して始まると思ったのに、何だこれは！ 後は若い者にお任せしますってか？ そんな、お見合いじゃないんだから……

俺からはなれてストレッチを始めてしまった霧島さんを見て、俺

もストレッチを始めてみる。男二人で無言でストレッチというあまりにも気まずい雰囲気を破ったのは、意外なことに光山さんの声であった。

「あゝ、テストス。霧島君、聞こえる？」

「はい、聞こえます。主任」

へ。光山さんって主任なんだ。意外と言っては失礼かもしれないが、思いもよらぬ事実に感心する。どうやらこちらとはマイクかなんかで話せるみたいだな。天井付近を見渡すと、思ったとおり監視カメラとおぼしき物体がくつついていた。あの控え室みたいな所のテレビとかはそういうことか。

そんなこんなで、天井から聞こえる妙に親しげになった光山さんの声に通りの注意を受ける。

無理みたいだったらすぐに言うこと。だけど、「力」は所有者が危険に陥るほど発動しやすくなるので、出来るだけ我慢すること。

特にルールはないが、金的や、目潰し、首への木刀での突きなどの今後の霧山さんの活動に影響が出そうな攻撃はやめて欲しいとの事。

あと、田島君は手を抜かずに思いっきりやっちゃいなさい。ということだそうだ。

「それじゃあ、田島君分かった？」

「はい、分かりました」

出来るだけ我慢か。まったく霧島さんの強さが分からないから不安だな。それに剣道とはまったく違うよな。当たり前だけど。ほとんど喧嘩のようなものだろうか。自信はないけどやるしかないんだよな。

「それじゃあ、主任。田島君も」

そういうと霧島さんは部屋の隅にあった白い何かが詰まった買い物籠を部屋の中央に持っていく、自分はその横に立つ。あ、始まるのか。どうしよう。今になって急に緊張してきたぞ。汗で木刀滑らないよな。

霧島さんに促されるままに俺も部屋の中央に歩いていく。霧島さ

んは特に構えを見せない。どうしよう？　こんなときは構えないものなのか？　それにどんな構えをすればいいのだろうか？　とりあえず無難に中段の構えを取る。

構えを取ると条件反射だろうか、意識が落ち着いた。いつものように対戦相手に視線が集中していく。面越しじゃない分視界が広くて集中しやすかった。

集中が高まりきる瞬間、広い室内に光山さんの声が響いた。

「始め！」

「せいややあ！！」

声が響くと同時に強く踏み込む。反応させる隙を見せずに面を打ち込む。

が、しかし。

「がっ、はっ」

世界が揺れる。頭の中に鉄が入ったよう。姿勢は保てずふらふらと後退する。

何が起こったのか認識する前に、俺の身体はもう一度、強い衝撃に襲われていた。

5月7日その3 〔力〕求めて（後書き）

予告を裏切る形になってごめんなさい。流れるに次こそは戦闘シーンです。

5月7日その4 v s 霧山さん（前書き）

更新が非常に遅れてしまつて申し訳ありません。

5月7日その4 vs 霧山さん

衝撃は続く。二度、三度。反射的に顔を下げて両手で頭をかばいながら後退する。部屋の端ぎりぎりまで後退してやっと衝撃は収まった。

プロテクターのおかげで痛みは残らないが、衝撃でふらつく頭を上げて霧山さんの方を確認する。床には白くて丸い物体が転がっていた。霧山さんは先ほどと同じく、何の構えもみせずに部屋の中央に立っている。ただし、先ほどまでの柔らかい表情は消え去り、少しも俺から目線を外そうとしないが。

UMAに襲われた経験があるからだろうか。予想外に冷静に立て直すことが出来た。ほぼ間違いなくさっきの衝撃は霧山さんの「力」に違いない。

どんな「力」かはまだ分からない。そもそも人の「力」についての知識が俺にはない。どの程度の範囲でどんな攻撃をできるのか分からない以上、様子を見るのがいいかもしれない。

俺も霧山さんから目線を外さずに木刀を構えなおす。しばらくそのままにらみ合う。彼が仕掛けてこないのを見て目線を霧山さんから外さないようにしながら、床の白い物体に意識をやる。

「野球ボール？」

床に転がっていたのは野球ボールだった。といってもプロなどで使われるような硬球でなく、アマチュア野球で使われる軟球。霧山さんの「力」はこいつを使うのか。そういえば霧山さんの足元には買い物籠があった。そいつに入っていたんだな。

……普通に考えればこいつをぶつけて攻撃してきたんだよな。投げてきたのか、文字通り飛ばしてきたのか、は分からないが。

しかしこいつは投げれば牽制として使えるかもしれない。そう感じてゆっくりとしゃがみながら左手でボールに手を伸ばす。そのままた手にとって右手の木刀と持ちかえる。

手に取った感触は予想したよりも硬い感じだった。コイツは中に芯が入っている準硬式球かもしれない。好都合だ。顔を狙って投げればいい牽制になる。

一気に近づいてボールを投げつけて木刀で殴りかかる。単純でバレレだが、とりあえずやってみる価値はある。

霧山さんは相変わらず仕掛けてこようとしないう。俺が仕掛けてくるまで待つ、ということなのだろうか。それとも仕掛けることが出来ないのか。

霧山さんまでの距離は目測で普通の歩幅で20歩ほど。突きなら5歩くらいのところの踏み込めれば攻撃は届く。……問題は牽制のタイミングか。本当は霧山さんの攻撃範囲が分かってからの方がいいが、仕掛けてこない以上こちらから行くしかない。

「……よし！」

いつの間にか汗まみれになっていた両手に力を込め、霧山さんを見据える。彼は床に転がったボールを拾うそぶりすら見せない。一声気合を入れると、俺は部屋の中心に向かって強く踏み込んだ。

瞬間、視界が白で覆われる。

「うぐっ！」

床に転がっていたボールがいきなり浮き上がって俺の顔へと突っ込んでくる。反射的に下げた頭にぶつかり、再び鉄が入ったような感覚を味わう。

思わず床についてしまった右手をばねにして、飛び上がるように霧山さんへと近づく。右手に持っていたはずのボールはさっきの攻撃で落としてしまったようだ。

行動に思考が追いつかない。いつの間にか地面に四肢をつけてい

た俺はそれを認識する間もなく真横へ飛びのく。そのまま身体は前転するように部屋の中心へと近づいた。

自分でも信じられなかった。なぜ自分はこんな動きが出来ているのか。どうして自分は霧山さんの攻撃をかわすことが出来るのだろう。

気がつくともた、身体をひねるようにして白い物体から身をかわしていた。一緒にひねられた頭が4つ同時に飛んでくるボールを認識する。三つをしゃがんで、一つを木刀をかざしてかわす。

ボコッ！ という鈍い音がすると同時に、手に響くような痺れがはしる。その痺れによって、ようやく思考が行動に追いついた。

めのまえにボールがせまっている。

正面から飛んできたそれをかがんでかわす。今度は右、間髪いれず左。今度は認識しているのに体が追いつかない。鈍い音と共にいくつものボールが身体に食い込む。

身体に入っていた空気が一気に押し出される。痛いのか、力が入らないのか。とにかく我慢できない感覚が全身を襲う。その感覚に耐え切れず四肢を地面に着いてしまった。しかし、霧山さんの攻撃は容赦なく俺の体を襲ってくる。

攻撃から逃げたかったのか、一度落ち着きたかったのか。もはや当然の行動のように俺は後退する。手加減しているのか、俺が後退している間は攻撃が飛んでこなかった。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

再び壁の辺りまで下がると、自分の息があがってしまっていたことに気がつく。息を整えながら、霧山さんを見据えると、彼は身構えるかのようにあたりに転がったボールを浮き上がらせてきた。

前進すれば攻撃するってことか。もう一度、もう一度さっきの動きが出来れば霧山さんに近づけるかもしれない。

先ほどの動きをイメージするように部屋全体を見回す。そうして

霧山さんに視線を集中させると、足を一步、踏み出した。

どれほどの時間が経っただろうか。

「ガッ、ハッ、はぁ、はぁ、はぁ」

もはや天国とすら思える部屋の隅。壁に背をもたれさせながら俺は何度目かも分からぬ休憩を取っていた。足を一步でも踏み出せばまた雨あられのようにボールが襲い掛かってくる。どのくらいの時間が経ったが分からないが、この戦いが始まっていやというほど思い知らされていた。

どうしても近づけない。もう少して木刀が届く、分かっているのにあと少して攻撃に耐え切れずに後退してしまう。剣道部で鍛えられてるはずなのに。やはり、俺がこんなことをするのは無謀だったのか。

そう思うと、何だか急に体の力が抜けた。霧山さんから外れなかった目の焦点が外れ、ぼんやりと彼とその周りの空間を捉える。霧山さんの周りには俺を威嚇するようにボールがふわふわと浮いていた。

荒い呼吸に定まらない焦点。身体は熱く、まるでまどろんでいるよう。ぼおっとしながら、どうすればいいのか考える。

牽制のボールは霧山さんに当たる前に空中で静止させられた。おそらく木刀を投げて、止められてしまう。木刀ではじくなんてものではない。手がしびれて攻撃するところではない。攻撃をかわし

続けてもある一線でかわしきれなくなる。

一瞬でもいい。霧山さんに致命的な隙を作ることが出来れば、木刀の一撃を浴びせられる。一撃でも当てられれば、こちらのペースに持ち込めるんじゃないか。こんな戦闘の経験なんて皆無だが、そんな風に思った。

どうすればいい。どうすれば致命的な隙を作れる？ 牽制攻撃は無意味。大声を上げる？ いや、大声程度では足りない。そもそも、嵐のような攻撃の中大声なんて上げられない。霧山さんにある程度近づいた上で、彼の攻撃の中でもできるような行為……

そんな行為なんてあるのか？ 思いつかない。たとえばそんな物があつたとしても、普通の人間には無理だ。……普通の人間？ 再び、正面の霧山さんに集中する。彼は壁に寄りかかっている俺に攻撃を加えることはなく、ボールを周囲に浮かべながらこちらを見据えていた。

彼の周りにあるボールを浮かべているのは何だ？ 彼の「力」だ。俺は何でここにいる？

そこまで考えて、頭の中で何かが繋がった気がした。そうだ。俺の「力」は木刀に光を纏わせるもの。限界まで近づいて、一気に木刀に光を纏わせる。そうすれば目がくらんで隙が出来るかもしれない。

問題は、俺は「力」の発動方法が分からないことだ。どうすれば、どうすれば発動できる？

木刀を杖のようにして立ち上がる。呼吸はさっきよりみしたが、まだ落ち着かない。俺が立ち上がったのを見て、霧山さんは少し表情を陰しくした。

目を閉じて精神を集中する。火照った身体のせいかな、落ちていくように精神が収束する。そのまま落ちていってしまわないよう、気を保ちながら自分の「力」。木刀に光を纏わせるようなイメージを作り上げる。

……何も変わらない。もう一度。もう一度。

繰り返しても何も変わらない。この方法は何度も試してだめと分かってはいたが、俺の知識のほかの方法がない以上、これしかやることがなかった。

もう一度、もう一度。繰り返すたびに呼吸が荒くなっていく。焦燥感が身体を蝕んで気持ち悪くなってくる。意識が落ちていってしまいそう。気持ち悪い。もう一度。気持ち悪い。もう一度。ああ、落ちていってしまいそう。

……………落ちちゃだめだ！ 思わず意識を失いそうになるくらい意識が落ち込みそうになる。ああ、気持ち悪い。

そのまま、落ちていってしまえばいい。

誰かの声がする。落ちていけだって？ 冗談じゃない。そんなことは、そんなことはいけない。理由は分からないが、落ちてしまっ
てはだめな気がする。

落ちていってしまえ、落ちるんだ。

うるさい。誰だお前は。人の気も知らないで。勝手に命令するんじゃない。ああ、気持ち悪い。

さあ、落ちるんだ。落ちるんだ！

いい加減にしてくれ！ やめてくれ！ 勝手にしゃべるな！

「ええと、田島君？」

「うるさい！」

視線がぐっと前方に集中する。

右足で地面を蹴って飛び上がるように前進。左から球三つ。飛び込んで前転する。

右と正面数5つ。前転から立ち上がって左前にステップ。

左右から4つずつ。両足に力を込めて加速する。

頭と上半身を狙って3方向から5つ。足からスライディングして立ち上がる。

いつの間にか正面にきていた人と目が合った。距離6歩半。左手の木刀に右手もかける。

籠の中から球が浮き上がる。一瞬で球に取り囲まれる。数は数え切れない。

君は、何を望んだんだい。

「黙れえええ！」

一気に視界が歪む。頭がいろんな物でいっぱいになって、それで気持ち悪くなって……

俺は足を踏み出して、踏み出したまま足がつくことなく落ちていった。

5月7日その4 VS霧山さん（後書き）

戦闘シーンは難しいですね。臨場感とか、テンポとか上手いかな
いです。

5月7日その5 vs 霧山さん その後

そのまま落ちていくと思った足は案外すぐ地面に着いた。上を見たまま階段を無事に降り切れた。そんな感覚が全身を包み、何かが自分の中でかみ合った気がした。

その瞬間、辺りを閃光が包み込む。目を閉じていなかった自分の目も眩んだけれど関係ない。次にやることは分かっている。視えている。

踏み込んだ位置はもう木刀の射程範囲。無意識に下段で構えていた木刀を、一層強く光らせて振りかぶる。そうしてもう一度強く踏み込み、声に乗せた気合とともに剣を相手の面に向かって振り下ろし、駆け抜けた。

「メーローン!!」

気剣体一致。その真理に限りなく近づいたのではと思われる会心の一撃。光にきらめく視界の中、振り向くとよろめく人影が見えた。そのまま、残心を取り追撃に入る。油断はしない。

もう一度、木刀を振り上げると人影は頭をかばうように両腕で覆う。おそらくは反射的な動き。だがそれを逃さない。もう一度。裂帛の気合を乗せて。今度は胴に会心の一撃を。

「ドーーーー!!」

パシリ、という軽い音がした。おそらくは二度目の会心の一撃になるはずだった一撃。しかし、その一撃は人影の両手に止められていた。

手首に耐え難い痛みが走ると、視界が回転して激しい衝撃に襲われることが同時に起こる。あまりに急すぎて受け身なんて、取れなかった。

薄れていく意識の中、やっぱ退魔課の人って武術の達人なんだあ、なんて当たり前のことを思った。

「……でしょ」

「ではやはり……」

人の声が聞こえた。声。そういえば霧山さんと戦ってる時も声が聞こえた。それだけじゃなく初めて「力」に目覚めた時も。いや、もっと前にも一度……。

あいまいな記憶を引き出そうと体を起こす。そうして初めて自分がベッドに寝かされていたことに気がついた。真白に漂白されたカーテンに囲まれたベッド。ああ、俺、霧山さんに倒されたんだっけ。それじゃあここは病院か医務室ってところかな。自分でもこんな状況に慣れてしまっているのを感じた。うゝむ、はたして喜ぶべきなんだろうか？

「あ、気がついたみたいですよ」

俺がそんなことを考えていると、カーテンの間から吉田さんの顔が覗き出てきた。彼の声が続いてカーテンが開く。蛍光灯のまぶしい光がはいってくると共に、相川さんと光山さんの姿が見えた。なんとなくベッドの上にいるという事実が恥ずかしくて、視線を落とした。

「おめでとう。君は「力」を覚醒させました」

俺が何か言う前に相川さんはそう言うのと、俺に木刀を押し付ける。そして間髪入れずに光らせてくださいなんて言った。なんだか急じゃないか。もうちょっとゆっくりさせてもらってもいいと思う。

でも、俺のそんな感情はお構いなしに退魔課の3人は期待を込めた視線を俺に送ってくるのだった。

「さあ、田島君」

光山さんが催促をする。俺は膝の上の木刀を握ると促されるままに意識を集中させた。

一步、暗闇の中に踏み出す感覚。ついさっき感じたばかりの感覚

を乗り越えようと、手の中の木刀は天井の蛍光灯のように光り輝いていた。

「やりましたね。それでは少し指示に従ってもらえますか？」

なぜか笑顔で抱き合っている吉田さんと光山さんを尻目に相川さんはクールな表情でそう言う。そして事務的にいくつか俺に指示をだした。真っ赤な顔をしてる吉田さんが羨ましいと思いつながらその指示に従う。

木刀の光を強くしたり弱くしたり。合図に合わせて光をつけたり消したり。さっきまでは全くできなかったことなのに、一度感覚をつかんでしまうと面白いようにコントロールすることができた。なるほど、自転車に乗るようなものっていうのはこういうことか。「力」をコントロールする心地よい感覚に思わず笑みがこぼれた。

「すばらしいですね。それではこの書類に記入してもらえますか？」
相川さんに差し出されるがままに、書類に記入をする。ようやく、やっと俺も「力」を手に入れた。さっきまで希薄だった認識が急に肉付いたように感じられた。

「はい。これで田島君の能力者としての登録は完了です。それでは……」

「相川さん、そこから先は私が引き受けてもいいかしら？」

引き続き説明をしようとする相川さんを遮って光山さんが話に入ってくる。相川さんはそれを聞くと一つ頷く。そのまま彼は俺が記入した書類を持って俺の視界から消えてしまった。ドアが閉まる音が聞こえたから、部屋の外に出たのだろう。

「そうね。まずベッドから出てもらえるかな？」

相川さんが出て行くとすぐ光山さんはそう言った。そういや霧山さんにしたたか叩きつけられたんだっけ。身体を起こして痛むのが不安だったが、普通に起き上がることが出来た。そうして部屋の隅にあったソファーに案内された。

向かい合う形で配置された手前側のソファーに座る。後ろにはさっきまで俺が寝ていたベッドがあり、左手には保健室のように薬品

棚と小さな椅子が配置してあった。周りを見回してみる限り、どうやらここは退魔課の医務室のようなところのようだ。

「それにしても田島君、君すごいね」

俺が落ち着いたのを見計らって向かい側に座った光山さんがそう切り出してきた。横に座った吉田さんもうんうんと頷いている。：俺がすごい？ 俺の「力」のことだろうか？ もしかして木刀を光らせる力ってとんでもなく貴重なのか？ だとしたら……

「俺が、すごい、ですか？」

「うん。普通の高校生が霧山君とあそこまでやりあえるなんて思わなかったわ」

ああ、そちらの方か。よく考えてみりゃそうだな。木刀を光らせるなんてどんな役に立つのか……

停電のときとか？ あとは年末のかくし芸程度か…… 考えると虚しくなってきたな。

「田島君は剣道部に入っているのよね。他に何か武道とかやってるの？」

「え、あ、いや、別に何もやってないです」

ぼおっとしていた所に予想外の質問をされた。俺が何か武道をやっていたかなんかが問題なのだろうか。確かに自分でも霧山さんとの戦いでは信じられない動きをした。でも、それはやはり無我夢中にやった結果なのだろう。

「信じられませんね……」

「いや、ただ無我夢中にやってただけで」

吉田さんのつぶやきにかぶさるように俺は反論する。というか、正直言って俺はそんなに凄かったのだろうか？ 霧山さんのボールにはぼこぼこにされるし、不意打ちでしか一撃を加えられなかった上に、追撃は手で掴まれる体たらく。攻撃を手で掴まれたなんて知ったら帝王になんて言われるか！

「吉田君。君が信じないもないでしょう。にしても、あれだけの動きが出来るなんて……そういう才能がかしら？」

「才能だなんて！ 本当に、無我夢中で」

なんだか知らないが褒められて反射的に否定する。よく分からないが才能なんてあるわけがない。剣道の大会で1回勝てばいいような生徒に戦いの才能があるだって！ とんでもない！

「普通の人だったら霧山君の初撃はかわすても、そこからはなかなかかわせないわ。少なくとも、そういった訓練を受けた人間か才能がないと」

剣道部だから普通の人とはやっぱり違うのかな？ なんて光山さんは続ける。こういうことを言われたのはもう久しくなかった。少なくとも、才能があるなんて褒め言葉を聞いたのは小学生以来だろうか？

「才能、ですか」

「そう、君にはきつと戦いに関する才能がある。間違いないわ」

「はあ」

光山さんは勢いよく俺に才能があると断言した。隣の吉田さんを見る。目が合うと同時に深く頷かれた。なんだか、自分を信じない、といわれてる気がした。

でも、なんだか実感が湧かない。なぜだろうか。そういや初めて「力」目覚めたと告げられたときもこんな感覚だった。空気を掴むような、他人の話を聞かされているような……

「田島君、君が初めて「力」に目覚めたとき、どんな行動をとったか覚えてる？」

「え？」

また光山さんが予想外の質問をする。彼女は俺がその時の状況をよく憶えてないと知っっているはずなのに。しかし、彼女はそんな俺の困惑を気にせず、俺の回答も聞かずに話を進めた。

「君はいきなり光った木刀に困惑することもなく、そのまま木刀を正面のUMAが振りかぶっていたこん棒にむけて一閃。敵の武器を破壊すると間髪いれずに左胸にむけて突きを放つ。胸を貫通した木刀を引き抜くとそのままUMAの首を切り落とした。そして今日。」

君は現役で活躍してるうちの職員相手を一瞬だけ超えてみせた。そんな君が普通の人間？ 何の才能もない？ そう考えるのはちょっとおかしいでしょう」

「……」

俺が、本当に、そんなことをしたのか。信じられない。畳み掛けるように話してくる光山さんがどこか遠く見える。彼女の言葉が頭をぐるぐる回って何かを考えることが出来ない。

「だから、君にお願いがあるの」

そうして、固まってしまった俺に止めをさすように光山さんはこう言ったのであった。

「田島勇人君、君の「力」と才能を小山原市のために貸してください」

5月7日その5 v s 霧山さん その後（後書き）

思い出したように更新。本当に久しぶりですね。

いやはや文体が変わってしまっただうにもならないような気がします。

5月12日その1 3つの悩み

才能とは誰が決めるんだろう。「平凡」とは何が決めるんだろう。

「特別」だとなぜ思うのだろう。

俺にはまだ、何もわからない。

「はあ……」

連休が明けて2日目の学校生活は、ため息と共に始まった。ため息をつくのはもちろん悩みがあるからだ。今のところ大きな悩みが3つ。

「〔力〕と才能、か」

1つ目の悩みは金曜日に出来た。どうやら、退魔課の人たちは俺をUMAと戦う助っ人として雇いたいらしい。俺はもちろん驚いたのだが、強力な〔力〕を持つ退魔課以外の人々を特別協力員として雇うことは珍しいことではないらしい。

俺の場合は、強力な〔力〕と、いうより戦闘に関する才能をかった、ということらしいが。君と同じ高校生だって私たちと共にUMAと戦っているのよ、なんて言った光山さんの笑顔を思い出す。

そりゃあ、全国探せばそんな高校生もいるかもしれない。春休み見た、クリスさんの圧倒的な〔力〕を思い出した。案外、彼女がそんな高校生だったりしてな。でも、だからって俺が彼女のようなことが出来るかどうかは別だ。

俺の〔力〕は木刀を光らせるだけだ。そんな力でUMAに対抗するなんて出来るのだろうか。いや、実際俺はUMAを一匹倒してる。でもあいつはかなり弱そうだった。初めて見た鬼や、公園で退魔課の人たちが倒していた怪物のようなUMAと比べれば一目瞭然だ。あんなUMAを光る木刀と、光山さんのいう才能だけで倒してけるのだろうか……

「でもなあ……」

退魔課に雇われる。そんな普通では絶対経験できないような出来事に心惹かれてるのも事実だった。だってそうだ。女子は知らないが男だったら自らの「力」でUMAを倒すなんてことに憧れないはずはない、と思う。まあ、少なくとも俺はそうなわけで。

それに、これが何かのきっかけのようにも感じていた。今まで「平凡」に過ごしていた俺が「特別」になるきっかけ。これをきっかけに俺は退魔課のエースとして活躍して、今までの「平凡」な日常とはおさらばする。そんな期待もあった。

そう、変わろうと行動しなきゃ変わらないんだ。自分がなりたいと思う自分に。俺は「特別」になりたい。だったらこのチャンスは絶好の物だと思う。

あなたに、ちからはないのでですか？

最近はいつもこうだ。煮詰まってくるとクリスさんのあの言葉がよみがえってくる。

「もう、「力」は手に入れたよ。だけど……」

「たじまくん、おはようございます」

「うわあ！」

いきなり背後から声がして飛び上がってしまった。振り返ると金髪の子天使のような少女が一人。ああ、俺の悩みのもう一つの原因がやってきてしまったようだ。彼女は俺が飛び上がったことを特に気に留める様子もなく、無表情で教科書を机の中につめ始めた。

クリス・ジェファーンさん。彼女はうちの学校の生徒会選挙に立候補している。役職は生徒会長。対する対抗馬は完璧会長こと現職の杉山陽介。まあ、それだけならよかった。学校生活を面白くするイベントとしては満足な物かもしれない。

でも、それに自分がかかわっていると話とは別だ。俺はクリスさんの後見人として生徒会選挙に参加している。まあ、それでも

別にいやなわけではなかった。彼女に協力するのがいやだってほど俺は彼女を嫌ってはいないし。問題は……

「それでは、行きましようか」

クリスさんは相変わらず無表情で俺を促す。今は朝7時。これから俺たち二人は校門に立って登校してくる生徒たちに自分たちへの投票をお願いしに行く。いわゆる、朝立ち、ってやつだ。女の子と朝立ち……男としてはなんかこう、くるものがあるのだがそれは置いて。

「クリスさんさ。凄く言いづらいんだが……」

「どうかなさいました？」

その無表情どうにかできないかなあ。と言いかけて止まる。俺の問いかけに振り返った彼女の表情には、当然のように色はなかった。

「はあ……」

昨日の演説のことを思い出した。ゴールデンウィークの間委員長と3人で考え抜いた演説内容は完璧とはいかなくても、まあ、杉山に劣るような内容でもなかったと思う。それでも明らかに反応が違った俺たちとあいつらの演説の差はやはり表情じゃないだろうか。

少なくとも俺は、同じ演説内容だったら無表情の人間よりかは表情豊かに語ってくれる人間の方に票を入れようと思うぞ。

「あの、たじまくん？」

「ああ、やっぱりなんでもないよ。先行っててくれるか？　すぐ追いつくから」

開けっ放しのエナメルバックをクリスさんに見せてそう言った。やっぱり彼女は何の感情も見せずに教室の外へと出て行ってしまった。……あそこまで表情変わらないと逆に尊敬の念を抱いてくるなあれもいわゆる一つの個性ってやつか？　まあ、そう考えて頑張るしかないよな。

「あとは……」

開けっ放しのエナメルバックの底にあった真っ白な原稿用紙を取り出す。17日、2回目の演説の原稿。俺の3つ目の悩みの種であ

る。2回目の演説は投票直前だから内容によっては逆転も狙えるわよ。とは委員長談だ。

正直言って俺はこんなの得意じゃないんだが…… 昨日の演説はゴールデンウィーク中一緒になって考えてくれた委員長あつてのものだし。本当に、委員長には助けられてばかりだな。

あと1週間で果たしてクリスさんを当選させることが出来るだけの内容の演説を考えることが出来るのだろうか。

昨日の演説では彼女がうちの学校に変化をもたらしてくれることを主張した。実際、彼女に出会ってから自分の周辺は劇的に変わりとつある。それが望む物であれそうじゃない物であれ。やっぱり、そういう変化を実際にもたらすあたり、彼女は普通とは違う人間なんだろうな。

2回目の演説はクリスさんの人となりの説明しよう。とはやはり委員長談である。田島君が感じたままに彼女の素晴らしさを皆に伝えればきつと大丈夫だよ、と委員長は話してくれたが……

「クリスさんの素晴らしさ、ねえ……」

そもそも俺はクリスさんの後見人なのに彼女の事はまったく知らない。外国から来た転校生。容姿は飛びぬけてるのにまったく無表情。それに、春休み。彼女は天使のように羽を生やしてUMAを圧倒した。しかもその「力」は退魔課には登録されていない……

謎の美少女。そう形容するのがふさわしい。俺はそんな彼女を全校生徒にどう紹介すればいいんだろう。彼女は凄い人間ですよ。UMAだって彼女にかないませんってか？ ばからしい。

「はあ……」

色々考えると気が重い。いつからこんなネガティブ思考になったかなあ。とりあえず、目の前のことを一つずつ片付けていくしかない。うん、色々考えるよりかは行動したほうが気がらくだ。

エナメルバックを片付けると俺は朝立ちに向かったクリスさんを追って教室を出たのであった。

5月12日その1 3つの悩み（後書き）

今回は短めでした。

うむむ、うじうじ考えるとかは苦手です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7890g/>

田島君の退魔日記

2010年10月11日02時35分発行